

秋田県埋蔵文化財センター

# 研究紀要

Bulletin of the Akita Prefecture  
Cultural Assets Research Center

## 第 22 号

- 講演録「武家屋敷の考古学」……………古泉弘…… 1
- 秋田県内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定（2007年度）  
…小林謙一・坂本稔・遠部慎・小林克……22
- 能代市杉沢台遺跡の土坑埋納土偶－遺体変形と土偶祭祀－  
……………播摩芳紀・小林克……30
- 中近世秋田における礫石経塚（2）－検討遺跡の集成－  
……………今野沙貴子……46
- 中国仰韶文化と縄文文化の共通性と相違点に関する問題  
……………趙建龍 / 吉川耕太郎訳……56
- 秋田県考古学関係文献抄録（8）－縄文時代①－ ……利部 修……74

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefecture Cultural Assets Research Center

秋田県埋蔵文化財センター

# 研究紀要

Bulletin of the Akita Prefecture  
Cultural Assets Research Center

第 22 号

2 0 0 8

秋田県埋蔵文化財センター

Akita Prefecture Cultural Assets Research Center



## 序

当埋蔵文化財センターは、秋田県の埋蔵文化財の公的調査機関であり、主要な業務の一つとして開発事業等に伴う緊急発掘調査を実施し、調査の記録である報告書を刊行しております。こうした業務を遂行するにあたっては、担当する職員の日常的な研究が必要であり、発掘調査から報告書作成までの業務はそうした基礎の上に成り立つものと考えます。

本紀要は、このような職員の研究成果や業務に有益な資料を紹介し、職員及び業務の質的向上をはかる目的で設けられました。

本誌では、平成 17 年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会での古泉弘氏による講演録「大名屋敷の考古学」、国立歴史民俗博物館の小林謙一氏らとの共同研究である「秋田県内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定結果（2007年度）」、国指定史跡杉沢台遺跡で出土した土偶を論じた「能代市杉沢台遺跡の土坑埋納土偶－遺体変形と土偶祭祀－」、中近世経塚を紹介した「中近世秋田における礫石経塚（2）－検討遺跡の集成－」、甘肅省交流員として来秋した甘肅省文物考古研究所副研究員の趙建龍氏による「中国仰韶文化と縄文文化の共通性と相違点に関する問題」、縄文時代に関する文献一覧である「秋田県考古学関係文献抄録（8）－縄文時代①－」を掲載しております。

御一読の上、当埋蔵文化財センターの業務と担当職員の研究活動に、なお一層の御指導と御鞭撻をいただけますようお願いいたします。

平成 20 年 3 月

秋田県埋蔵文化財センター  
所長 熊谷太郎

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要 第22号

目次

講演録「武家屋敷の考古学」	古泉弘	1
秋田県内遺跡出土試料の <sup>14</sup> C年代測定結果（2007年度）	小林謙一・坂本稔・遠部慎・小林克	22
能代市杉沢台遺跡の土坑埋納土偶 —遺体変形と土偶祭祀—	播摩芳紀・小林克	30
中近世秋田における礫石経塚（2）—検討遺跡の集成—	今野沙貴子	46
中国仰韶文化と縄文文化の共通性と相違点に関する問題	趙建龍/吉川耕太郎訳	56
秋田県考古学関係文献抄録（8）—縄文時代①—	利部 修	74

## 大名屋敷の考古学

古泉 弘\*

### はじめに

古泉です。よろしく申し上げます。ただ今ご紹介頂きましたが、若干補足させていただきます。私は現在、秋田へ来る機会がなかなかありませんが、まったく無縁ではございません。大学を卒業してから、宮城県多賀城跡調査研究所で、3 年程多賀城跡の発掘のお手伝いをしていたことがあります。その折りに、秋田城跡の史跡整備に伴う発掘調査が継続して行われるようになり、秋田城跡の発掘にメスが入りました。その最初の調査の時に、手伝いに行き来といわれ、ひと夏、お手伝いに来ました。かれこれ 33 年程前のことです。

最近では、秋田でも久保田城をはじめとして近世の発掘調査が行われ、また、江戸の方でもたくさんの江戸時代遺跡の発掘調査が行われていますので、何かそれに関係した話をするようにと、今回ご依頼を頂きました。どんなお話をしようかと思ったのですが、江戸にはたくさんの大名屋敷一各地の大名の藩邸があって、その発掘調査も大分進んでいます。大名屋敷は江戸とその他の地方とを結びつける大きな役割を果たしていました。今回はその辺に焦点を当てて、大名と江戸の藩邸、特に国元と江戸との関係に重点を置いてお話をしたいと考えています。久保田藩の江戸藩邸の発掘調査例がまだありませんので、その辺がやや残念です。

### 1. 発掘された諸国の城

よく近世といいますが、織田信長の頃から江戸時代全般を含む三百年くらいの時代をいいます。この近世というのは、人によって色々なとらえ方がありますが、一般的には、封建制度が頂点に達した時代といわれます。完成された日本の封建制度とは、言い方を変えれば幕藩体制で、中心に幕府があり、全国に大名が散らばっている。それが日本封建制度の究極の姿でした。したがって、江戸の大名屋敷というのは、封建制度を維持するための装置として、非常に大事な役割を果たしていたのです。

江戸には各地の大名屋敷が集まっています。近年では、大名の国元の城もしくは城下町、そういった近世の遺跡の発掘調査も盛んになってきています。東北地方の弘前や仙台をはじめ、関東の川越、中部の松本など、さまざまな城下町の発掘調査が行われています。もちろん、西国でも様々な城下町の調査例があります。城下町は中世から近世へ、そして、近世の中でも少しずつ変貌して行きますので、そのあたりからみていきたいと思えます。

近世の城と中世の城の違いは色々ありますが、その典型的な例を小田原城にみることができます。小田原城は関東の戦国大名北条氏の居城でした。五代北条氏直の時に豊臣秀吉が攻め、落城後は徳川氏方の近世小田原城として整備されます。つまり、ひと口に小田原城といっても、北条氏による中世城郭から、徳川氏方の近世城郭へと変貌していったのです。小田原城と城下は、小田原市によって長い間発掘調査が続けられています。城内にある二ノ丸の中堀という地点では、戦国時代と江戸時代両方の遺構が見つかっています。ここでは堀が確認できますが、中世の堀は、土を掘り下げただけの素

\* 東京都教育委員会学芸員

掘りですが、近世になると、堀の斜面に石を積んだ石垣積みの堀に変わります。近世だからすべて石垣の城になるとは限りませんが、石垣というのは、近世城郭の象徴的な工事工法の一つであるといえます。しかし、近世の石垣も次第に工法に改良が加えられていくことが明らかになってきました。

仙台城は、ご存知の通り伊達政宗が築いた城です。仙台城の本丸は、政宗在世当時はその中心として使われていましたが、実は、その後はあまり機能せず、むしろ二ノ丸の方に中心が移っていきます。近年、この仙台城本丸跡の石垣が大部痛んできたため、石垣の積み替えを行うことになり、そのための解体調査が行われました。調査の結果、仙台城の石垣は3期に分けられることが明らかとなりました。解体前の石垣はきれいな整層積みになっています。これが今日慣れ親しんできたⅢ期の石垣です。ところが、これをある程度解体すると、その内側から別の石垣が出てきました。

これがⅡ期の石垣ですが、Ⅲ期の石垣がきれいな成層積み—「切込接（きりこみはぎ）」と呼ばれる積み方—であるのに対し、Ⅱ期の石垣は粗い割石を使い、その間に小さな礫をはめ込む工法を採っています。Ⅱ期の石垣は元和2年（1616）の地震によって痛んだため、新たに築造されたものです。さらに、Ⅰ期の石垣は傾斜が緩く、段築になっており、より古式の工法で造られていました（図1）。江戸時代になってからも、石垣の積み方は段々と進歩して行くことがわかります。このように石垣一つを見ても、近世だからといって全く同じ工法が採られていたわけではないことがおわかり頂けるかと思います。

これは導入として、各地で色々な近世城郭の発掘が行われているというお話のほんの一部です。これから江戸の大名屋敷を見ていきたいと思っていますが、その前に、江戸とはどういう都市であったのかということをお話しておきたいと思っています。

## 2. 江戸の構造

### 江戸の広がり町並み

江戸は、江戸城を中心として、堀が右螺旋状に廻る構造になっています。外堀の東端は当時大川といった墨田川につながっています。さらに墨田川は南東側の江戸湾（現在の東京湾）に注いでいます。外堀と大川と海、これらに囲まれた範囲が当初の江戸の惣構えということになります。この惣構えが完成したのは、おおよそ寛永年間（1624～1644）、三代将軍家光の頃のこととされています（図2）。

江戸時代も後期になると、市街の範囲がさらに広がって行きます。江戸の市街は大まかには幕府に関連した施設、武家屋敷、寺社地、町人地からなります。武家屋敷はさらに大名屋敷、旗本や御家人の屋敷、大縄地に分けられます。大縄地というのは、与力・同心などの下級武士たちへ一括して与えられた土地です。御先手組、御持組、鉄砲組など、組単位で屋敷を拝領したのです。彼らはそこを細分する形で住まいを構えていました。

町人地は各所に飛び飛びにあり、18世紀以降は街道沿いに市街を広げて行きます。しかし、もともと江戸時代初期、家康が入部した頃は、江戸城の直下まで海が入っており、そこに「江戸前島」と呼ばれる半島状の陸地が突き出た形になっていました。その前島に当たる部分が初期の町人地になっていたのです。

江戸の人口は最盛期に約100万人を数えたといわれていますが、実はあまり根拠のある数字ではありません。享保年間に八代将軍徳川吉宗が人口調査を行い、それ以後、町人地については人口調査が

継続的に行われますが、武家が何人住んでいたのかは定かではありません。ただ、武家と町人がおよそ半々ぐらいであろうといわれています。試みに建築史学者の内藤昌先生による試算の人口を、屋敷地の分布範囲から割り帰すと、武家地と町人地で明らかに人口密度が違うことがわかります（表）。町人地は人口密度が非常に高いといえます。ですから、少なくとも住環境に関しては、広い面積にゆったり住んでいた武士に対して、狭い面積に押し込まれていた町人という違いが明らかに出てきます（図3）。

町人地の様子を見てみましょう。日本橋のすぐ近くの守山町に、今の三井財閥の前身の三井家が所有していた土地の図面が残っています。図の上側が表通りですが、表側は店を貸しています。その裏に、裏店、いわゆる裏長屋があったわけです。裏長屋には細長い建物が並列し、狭い所では3坪程の住居に仕切られていたことがわかります。そして、小さな空き地には井戸、ゴミ溜、廁が設けられていました。この廁は3つに仕切られていますが、「惣後架」といって、共同便所の形をとっています。井戸と廁とゴミ溜のセットは2か所設けられています。30戸程の住まいが並ぶ長屋で、住人たちはこの2か所で井戸と廁とゴミ溜とを共同利用していました（図4）。今でも東京の住環境はあまり良くないのですが、その前身がすでに江戸時代にあったといえます（図5）。

#### 大名屋敷の位置づけ

それでは大名屋敷というのは、どういう性格を持つのでしょうか。大名の持つ意味は時代とともに変わってきますが、特に室町時代以降は守護大名から戦国大名へと、大きな力を持ってきました。都が京都にあり、足利幕府があった時は、京都に多くの大名屋敷が集まっていました。織豊期——近世が上がる織田・豊臣の時代では、例えば秀吉がどこかを攻めに行くとなると、要地に大規模な陣を築きます。その陣に多くの大名を配置します。あるいは、京都や大坂に本拠地を構えると、人質を取ったり、大名の屋敷を構えたりします。

肥前、現在の佐賀県唐津市鎮西町に名護屋城という城がありました。これは、秀吉が朝鮮出兵の足がかりとして築いた城です。玄界灘に面した入り組んだ地形の一角を占めています。この名護屋城を取り囲むように、非常に広い範囲に各大名の陣屋が配されていました。本丸の北東には徳川家康の陣があります。これ程たくさんの大名を集めて陣を築いたこの名護屋城は、秀吉が亡くなって朝鮮から撤兵し、その後直ちに破却されています。城も、多くの陣屋もすべて撤収されているわけですが、これがそのまま続いていたら、場合によっては江戸のような一大都市になっていた可能性もあります。大名を集めるということの一つには、戦時的にはこういう意味合いもあったわけです。

#### 大名屋敷の配置と種類

江戸時代も徳川幕府の政権がゆるぎないものになり、寛永12年（1635）には参勤交代が制度化され、寛永19（1642）年には譜代を含む全大名を江戸に集めることとなります。江戸には全国の名古屋敷が建設されました。全国の名目の数は約260といわれています。大名屋敷には上屋敷、中屋敷、下屋敷、あるいは蔵屋敷といった種類があります。その配置は不規則にも見えますが、何となく傾向があるようにも見えます。江戸城を取り囲むように多くの上屋敷が配置されている一帯があります。それから五街道沿いの江戸の出入り口付近に大きな大名藩邸があります。御三家の一つ尾張藩徳川家、

同じく水戸藩徳川家、あるいは加賀藩前田家というように、大きな大名家の上屋敷が街道沿いに配置されています（図6）。

下屋敷は比較的周辺部に配置される傾向があります。大川（隅田川）から東の部分にもたくさんみられます。もともと大川には橋がなく、その東側は未開拓の土地でした。明暦3（1657）年に振袖火事とも呼ばれる非常に大きな火事があり、橋がなかったため多数の人々が逃げ遅れて亡くなってしまったこともあり、その後両国橋などの橋が架けられました。それを契機として、元禄年間頃から低地である墨田川の東——墨東地域の方に町屋や大名の下屋敷が造られるようになったのです。

先に上屋敷、中屋敷、下屋敷といった説明を申しあげましたが、上屋敷というのは基本的には大名の藩主が居住し、政務を執る場所です。その上屋敷が、火事によって焼けてしまったというような場合には、代わりに中屋敷を使います。中屋敷は、あるいは隠居した藩主や世継ぎが住む屋敷としても用いられました。下屋敷は、中屋敷のさらに代替の屋敷ということになりますが、もう一つは別荘に似た使われ方もします。墨東地域は、今ではあまりありがたがられない低地帯ですが、当時は水辺の景観が好まれ、別荘としての性格をもった下屋敷が多く建てられました。

大名屋敷はその所持の仕方によって、別の分け方もあります。大名屋敷というのは基本的に幕府から拝領するもので、それが「拝領屋敷」です。大半は拝領屋敷という形をとっています。しかし拝領屋敷という形とは別に、大名が、周辺の農民などから土地を買い上げて抱える。つまり直接買い上げて屋敷に取り込むという形があり、それを「抱え屋敷」と呼んでいます。したがって抱え屋敷は江戸の周辺部に多いことになります。

多くの大名は、このように複数の屋敷を所持していました。例えば久保田藩（秋田藩）佐竹家の場合では、上屋敷が下谷七軒町、中屋敷が神田佐久間町、本所十間川、下屋敷が日暮里、浅草、鳥越などにありました。そのほか京都にも屋敷があり、また、大坂には米の集積場があったので、その米の集積場である堂島に蔵屋敷を構えていました。

#### 初期と後期で異なる大名屋敷の風貌

同じ大名屋敷でも初期と後期とではまったく様相が異なります。寛永年間頃の江戸の様子を描いたといわれる国立歴史民俗博物館に所蔵されている『江戸図屏風』には、きらびやかな大名屋敷の建築が描かれています。例えば、当時外桜田（現在の日比谷公園付近）にあった伊達家の上屋敷には、日光東照宮の陽明門の様に非常に派手な装飾門があり、金箔や漆で飾られています。屋根の軒瓦も、金箔を貼った「金箔瓦」が用いられているようです。当時はまだ桃山文化の影響が残り、各大名が贅を凝らして見栄を張りました。特に、政宗は「伊達者」として知られていましたからから、こういったきらびやかな屋敷を築いたのかもしれませんが。

一方、幕末の1865年頃、芝の愛宕山の上から江戸の東面一帯をフェリックス・ベアトが撮った写真が残されています（図7）。「江戸図屏風」の世界とはがらりと様相が変わって非常に地味です。写真がモノクロだというだけでなく、大名屋敷にも過度な装飾が廃されています。実は、江戸図屏風が完成してから少し経って、先程お話した明暦の大火が起こり、江戸の大体6割くらいが焼失してしまいました。その後に築かれた建物は、非常に落ち着いた、地味な、言い換えれば大人の景観といった様式に変わります。幕末の頃の江戸の景観はこれを受け継いでいると思われます。

### 秋田藩の江戸屋敷

秋田藩の江戸屋敷跡は現在どうなっているのでしょうか。台東区上野の近くに佐竹商店街という一角があります（図8）。ここが秋田藩佐竹家の上屋敷があった場所です。戦前はたいへん繁華した所だそうです。東京では割と珍しいアーケード街として残っていますが、いずこも同じで、今ではかつての賑わいは失われているようです。この辺で発掘調査が行われることにでもなると、秋田藩邸の様子少しはわかるかもしれません。

佐竹氏代々の墓所は、秋田市の天徳寺にありますが、14代藩主の佐竹義堯は明治17年に亡くなり、東京浅草橋場にあった総泉寺というお寺に葬られました。また、支藩の秋田新田藩は、江戸詰——江戸定府となっていますので、代々のお墓がやはり総泉寺にありました。その総泉寺が関東大震災で焼け、その後、昭和になって板橋区の小豆沢に移りました。そこは私の家の近くです。色々な御縁でしょうか、私も総泉寺の沿革を最近まで知らなかったのですが、私の父の葬儀は現在の総泉寺の葬儀場で行いました。次に、江戸藩邸を発掘すると、どういう遺構が出てくるかということをお話したいと思います。

## 3. 発掘された江戸藩邸と施設

### 加賀藩本郷邸の発掘調査

加賀藩本郷邸は、ご存知のとおり東京大学の本郷構内にありました。現在も、有名な三四郎池や赤門が残っています。今日伝わる絵図面には往時の様子が残されています。中央には御殿がありました。御殿は前田家の藩主が生活し、政務を執った非常に大きな建物です。しかし、大名屋敷というのは、大名だけが住んでいたわけではなく、多くの家臣も暮らしていました。そうした家臣、——いわゆる詰人の長屋があちらこちらにたくさんあります。同じ詰人といっても色々な格があり、大きな住居を構えていた家格の高い家老格の人も居れば、長屋塀に住んでいた家格の低い人達も居ました（図9）。実際、東京大学の構内では、ここ15、6年の間に学内整備に伴って少しずつ発掘調査が進められており、残された絵図面と合致するような遺構が発掘されています。

12代将軍家斉の娘で、加賀藩の13代藩主斉泰に嫁いだ溶姫（やすひめ）は、将軍家から迎えられたため下にも置かない扱いをされます。その住まいも御守殿と呼ばれるようになります。その門が赤門です。赤門は東大の代名詞のようになっていて、その前身は加賀藩の門だといわれますが、この赤門自体は溶姫を迎えるための門だったのです。

溶姫御殿の下から発掘された遺構の一つに石組みの地下室（ちかむろ）があります（図10）。絵図から考察すると、ここは台所があった可能性のある場所です。石組の地下室には階段がついており、この下にさらにもう一つ小さな石組の室があり、この底からは筵が出てきています。地下室は色々な物の収納に使うので、台所に関係した品物を収納したと思われそうですが、筵も出てきていることから、おそらくこれは氷を入れて置く「氷室」ではないかと考えられています。加賀藩では、加賀からはるばる氷を切り出して運んできたことが記録に残されていますが、そうした氷を夏場まで保管するために使用した遺構ではないかと考えられています。

加賀藩には、1802年に建設された梅之御殿と呼ばれる御殿がありました。これは10代藩主の重敦の夫人のために建てられた隠居御殿です。ただ、この梅之御殿は、夫人が入ってからまもなくして亡

くなり、結局築後20年ぐらいで取り壊されました。存続した期間が短いため、増改築などが少なく、そのため、ほぼ絵図面通りに遺構が検出された大変良い例です。

発掘されたのは梅之御殿の北半分です。いろいろな遺構が出てきましたが、特にここでは、たくさん検出された厠について取り上げます。絵図面では、四角の枡の中にさらに小さい長方形を描いた記号が厠を表しています。このうち3箇所の厠跡で鉛の分析が行われました(図11)。便槽の中と周囲の土を採取し、鉛(Pb)がどれくらい入っているかという分析をしたのです。その結果、72号遺構と75号遺構の厠からは非常に多くの鉛が検出されました。ところが65号遺構の厠からは、ほとんど鉛が検出されていません。これはどういったことを意味するのでしょうか。

当時、女性は化粧に白粉(おしろい)を使っていますが、その白粉の主成分は鉛だったのです。その白粉の鉛成分が体内に蓄積され、そして厠に排泄される。その場所が鉛を検出した厠遺構なのだと思います。そうすると、鉛が検出される厠遺構と検出されない厠遺構の違いは、白粉を用いていた女性と、用いなかった人という厠の使用者の違いにある可能性があります。絵図面によると、72号遺構と75号遺構のある部分は、奥向きという大体が女性の生活空間なのですが、鉛が出ていない65号遺構は人足溜りがある場所ですので、男性が使う空間の厠だったのでしょうか。生活空間の違いがわかってきたという一例です。

理学部7号館地点という調査箇所は、八筋長屋という長屋の跡に当たっていました。長屋が8棟並んでいて、中級家臣が住んでいました。発掘された範囲はその一部で、絵図面からおおよその位置はわかるのですが、詳しい位置となると、細かい点で微妙なため、たいへん難しいのです。元禄元年(1688)の絵図面に描かれた井戸と、発掘した範囲の中で該当するのが3・4号井戸跡になります。この井戸を起点として、絵図面と遺構群とを重ね合わせると、実際の長屋の位置がはっきりしたという例です(図12)。

発掘結果をみますと、井戸や穴蔵、あるいは厠といった遺構が一定の範囲に集中していることがわかります。反対に遺構があまりない場所、これは長屋の本体、建物の跡に当たり、その庭に当たるような空き地の部分、そこに井戸、穴蔵、厠といった地面を掘り込んで造った施設が集中していたということが遺構の分布からもよくわかります。

#### 毛利家の下屋敷と地鎮

毛利家の下屋敷は、現在「東京ミッドタウン」として再開発されましたが、その建設前に発掘調査が行われました。建物を建てる際に地鎮祭を行なう風習は古くからありますが、その地鎮を行った遺構が出てきました。穴の中に、皿状の土器であるかわらけが上下に合わせて埋められていました。中世から近世にかけてよく見かける遺構です(図13)。密教法具である輪宝なども出ています。さらに、このかわらけの中には金銭が入っていました。永楽通宝です(図14)。永楽通宝は明からの渡来銭で、本来銅銭です。永楽通宝の金銭というのは、実際に流通していたわけではなく、地鎮などの祭りごとのために日本で鋳造したものと考えられます。

#### 汐留遺跡の大名屋敷

その大名屋敷を建てる際に、非常に大規模な土木事業を行っています。その一例として、港区にあ

る汐留地区遺跡を取り上げてみましょう。現在、シオサイトという商業施設となっていますが、もともとは旧国鉄の新橋操作場でした。明治5年に日本で最初の鉄道が敷かれた時、「汽笛一声新橋を」という新橋駅の基点になった場所として知られています。発掘調査の結果、旧新橋駅の駅舎や、プラットフォームの跡が出てきました。発掘は東京都埋蔵文化財センターが長い間時間をかけて行ったのですが、旧新橋駅ができる前、江戸時代には大名屋敷が並んでいたのです。

この一帯はもともと海岸でした。江戸時代前期に、この場所を播磨の脇坂家、陸奥の伊達家、それから会津の保科家が拝領し、海岸沿いに藩邸が建ち並びました。伊達家だけでも85,000㎡もある広大な面積を占めていましたが、一時期にこれだけの面積を造成したのではなく、海岸ですので、埋め立てをしながら徐々に屋敷を広げていったのです。

埋め立てには、まず海岸近くに柵状の土留を設けて、その内側を埋め立てていくのが基本的な工法です。土留には4種類の工法が知られています。木杭を立てて、そこに板を横に柵状に渡した「板柵」、板ではなく杭に竹を絡ませた「しがらみ」、筵で土を覆った「堤状」、それから「石垣積み」です。こうした各種の土留を用い、その内側を埋め立て、少しずつ埋立地を拓げていったのです（図15）。

屋敷の中にはさまざまな施設がありました。海に面していることを利用して、伊達家には舟入場がありました（図16）。海から水路を設け、舟を引き入れる構造になっています。舟入場の護岸は石垣で築かれています。石垣は屋敷境の溝にも用いられています。伊達家と脇坂家との境堀は良好な状態で検出されました。

汐留地区の大名屋敷からは多くの厠の跡が発見されています。江戸では桶を用いた便槽が多いのですが、このほかに甕も使われます。しかし、あまり大きくありません（図17）。桶製の便槽の容量は大体60リットルくらい、すぐいっぱいになってしまうと思います。甕の場合、多くは愛知県の常滑地方で作られた大甕です。大名にとっても、周辺の農民にとっても、排泄物の扱いは大きな関心事でした。便槽に溜まった尿尿は周辺地域から農民が汲み取りに来ます。今は汲み取ってもらう方がお金を払いますが、当時は逆で、汲み取る方が尿尿を買い取っていき、それを肥料にするというわけです。排泄物は大切な肥料で、商品だったのです。したがって、桶や甕が小さいということは、多分頻繁に汲み取りに来たのだろうと考えざるをえないわけです。

各大家では、下肥を払い下げる村は大体決まっていたのです。その名主にお任せだったのです。このように、大家も最初は鷹揚だったのですが、段々年代が下ると、家計のことを随分考えるようになります。今の役所と同じで、もっとコスト意識を持つということ、18世紀くらいになると、多くの大名屋敷でも下肥の汲み取りを入札制にしていきます。すると、今までほとんど独占的に、ある程度安い値段で下肥を買い取っていた名主が権利を失うことが起こります。そして、下肥の値段が高騰したことが原因で、農民達が団結して引き下げ運動を起こす事態にも発展したのです。こういった遺構からも色々なことが考えられるわけです。

もう一つ大事なものは、ライフラインの一つとしての水です。井戸もたくさんあったのですが、ただ、飲み水は井戸だけではまかないきれないので上水が整備されました。江戸では、神田上水をはじめ、六上水が整備されました。そのなかでも最大の玉川上水は、現在の多摩川の中流から江戸のはずれまで、延々と水路を掘ってきて、江戸の市中は今の水道と同様に、地中に配管を張り巡らせていました。伊達家や脇坂家の屋敷内の遺構から、木樋（きどい）を配管した様子がよくわかります（図18）。い

くつかの木樋は上下に交差していますが、同時に皆使われていたということではなく、一つの系統が廃止された後、別の系統を設けたためです。

道路や大名屋敷の中の水道管は、このように木樋をつなげながら、地下に埋めていきます。一般的な木樋は、削り抜いた木の上に蓋をして釘で打ち留めています。木樋を継ぐには、ソケットのような部品を用いる方法や、木樋の端と端とを直接挿入する方法があります（図19）。

あるいは枡を用いる方法もありました。特に木樋の屈折点や分岐点には、しばしば使用されました。桶を埋めた枡が多いのですが、枡の側板に木樋を挿入して水を溜めます。そして別に挿入されている流下先の木樋に水が送られる仕組みです。流下先の木樋を取り付ける位置によって、流れの方向や、分水する本数・方向を設定できます（図20）。

水道は江戸だけではなく、規模の大小はあっても、17世紀初めくらいから全国各地にたくさん敷設されるようになります。元和の一国一城令が発令されますが、各藩に一つの城下町が出来る時、おそらく、その城下町の水需要を賄うために、こういった上水網が各地に展開したのだらうと考えられます。

#### 火災への備え—穴蔵—

江戸遺跡を発掘すると、穴蔵の遺構がたくさん検出されます。江戸は火災が多く、火災のような非常時のために、大名に限らず、裕福な町人達も地下式の倉庫—穴蔵—を設けました。もちろん地上式の倉庫である土蔵もあります。

台地上のように、関東ローム層が堆積しているような地盤が固い場所では、土地を掘り抜いて地中に部屋を設けた穴蔵が造られます。中への出入りのために階段や斜面を設けたり、天井部から直接梯子で出入りする構造の穴蔵もあります（図21）。江戸の大名屋敷を掘ると、特にこういった穴蔵が蜂の巣のようにたくさん発見される場合があります。穴蔵の用途は色々ありますが、日常的に使う場合もあれば、火災時に器物をこの中に入れて緊急退避させるという場合もあります。

一方、低地のように地盤の弱い場所では、土地を掘削して地下に部屋を掘り抜くことができないので、木の枡を埋めて仕立てます（図22）。木造の穴蔵が最初に発見された時、ほかに例がなかったため、それが何の遺構なのかわかりませんでした。穴蔵だろうと最初に気がついたのは、『安政見聞誌』という安政の災害の様子を描いた本の挿し絵に、よく似た施設を見出した時です。安政の大地震は、江戸で起きた直下型の大地震で、その際、火事も併発して甚大な被害を受けました。

『安政見聞誌』には、エピソードとして吉原の様子が記されています。吉原に三浦屋という遊廓がありました。火災が迫って来たため、その主人が選りすぐりの遊女を10人集め、床下に設置されている穴蔵の中に入れます。蓋をした後に砂を撒き、その上に水畳といって、水をかけた畳で覆って穴蔵への延焼を防ぐ。そういう場面の絵です（図23）。絵の右端の人物は鍬を持ち、砂をかけるために待機しています。迫りくる火事から遊女を守ろうということなのですが、もちろん後日談があります。火災が終わってから蓋を開けてみると、皆蒸し焼きになっていたという怖いお話です。ただ、どうも三浦屋の主人に悪気はなく、本気で助かると思っていたらしいのです。なぜなら、自分も一緒に入って遊女たちと運命をともにしてしまったからです。挿絵には、埋釘を隠すための木の部材が見えます。和船などと同じ構造です。これらが一橋高校から発掘された木製遺構と大変よく似ていること

から、このような遺構が穴蔵であったことがわかったのです。

#### 徳利とやきものの流通

今回は江戸の暮らしの話は致しませんが、『久留米藩江戸勤番長屋絵巻』という江戸東京博物館が所蔵している有名な絵巻があります。勤番で江戸藩邸の長屋に詰めていた武士が、明治時代になってから、当時の思い出を懐かしんで描かせた絵巻です。天保10（1839）年前後の、久留米藩邸の長屋の暮らしを描いています。彼らは単身赴任で、例えばその一人の戸田熊次郎のように、部屋の中に書を飾ったり、庭には朝顔を這わせていたりというような、割と風流なお住まいをされている方もいらっしゃいました。

『絵巻』には酒宴の場面もいくつか描かれています。中には少々乱暴な場面も描かれています。天保10年に参勤交代が明けて帰還するという事になって、皆喜んでいたところ、急に藩主が火之番を命ぜられ、せっかく帰れると思っていたのに帰れなくなってしまったため、翌日、皆でやけ酒を飲んで大暴れをしているという場面です。そこには色々なお皿やお碗のほかに、徳利がたくさん描かれています。

『絵巻』に描かれた徳利の多くは「貧乏徳利」と呼ばれる徳利です。江戸ではどこを掘ってもたくさん出土します（図24）。大体規格が決まっていて、二合半、五合、一升です。これは、今の徳利の様に爛をつける徳利ではなく「通い徳利」です。酒屋の屋号が入っていて、この徳利を持って酒を買いに行く。そういった徳利です。大体が瀬戸美濃地方産です。おそらく秋田の方では、この頃瀬戸美濃地方の製品はあまり入っていないようなので、こういったものが出るかどうかわかりません。その他にも静岡県の大井川の辺りで作られている志戸呂焼というやきものや、珍しいものでは沖縄からもたらされた壺屋窯の徳利などがあります。やきものはたくさん作られ、かつ残りもよいので流通の様子がわかっておもしろいのです。江戸では肥前系の磁器と瀬戸美濃地方産の陶器が主流を占めます。恐らく、秋田の方は日本海ルートで入って来るやきものが多いため、肥前系の磁器はもとより、陶器も唐津の製品が多いだろうと思います。

#### 大名屋敷の庭園

大名屋敷の中には趣向を凝らした庭園がありました。現在でも水戸藩邸であった小石川後楽園や、柳沢吉保邸であった駒込六義園などに往時の姿を留めていますが、大半は東京の近代化の過程で失われてしまいました。しかし、発掘調査によって、庭園の遺構が明らかになる場合もあります。汐留地区の発掘調査では、伊達家の庭園の跡が発見されました。大小の池が見出されましたが、大池の方は何度か拡張されたり形を変えたりしています。この池は「江戸藩邸芝口上屋敷庭園図」に描かれていますが、発掘された遺構とほぼ一致するようです（図25）。

御三家の一つ尾張徳川家では、戸山屋敷という、別荘に使っていた屋敷を持っていました。戸山屋敷の庭園は池泉、築山はもとより、東海道や小田原の町並が再現されるなど、たいへん凝っていて有名でした。残念ながら、今日ではその姿を留めていませんが、発掘調査によって面白い遺構が発見されています。「龍門の滝」と呼ばれた人造の滝と、滝壺から流れる水路の遺構です。滝は上部が失われていましたが、大きな石を積み上げて造られており、絵画に描かれた当時の様子を彷彿とさせます。

#### 4. 江戸藩邸にみる国元の文化

##### 藩窯

江戸藩邸での生活は、江戸だけで帰結するものではなく、特に国元との関係を抜きにしては考えられません。江戸と国元との関係を探ることは、大名屋敷の考古学にとって大きな課題です。それにはさまざまなアプローチの仕方があります。各藩で異なった国元の文化、あるいは大名独自の文化というものも色々ありますので、その辺をいくつかみて行きたいと思います。

まず生産、製作に関してみていきたいと思います。実は大名屋敷の中では、色々な生産活動が行われています。大名屋敷の中には作業小屋のようなものがあって、鉄を鍛える小規模な鍛冶を行っていたり、同じく銅製品の製作を行っていたりという痕跡が、遺構や遺物の上から確認されます。その他にも様々なことを行っています。特に生活のためとか、あるいはもう少し文化的な生活を楽しむために様々なことを行っています。

その一つにやきものがあります。大名が国元、あるいは江戸の藩邸でやきものを焼きます。大名が造った窯が藩窯です。藩窯の一例として有名な鍋島焼があります。肥前（佐賀県）の鍋島藩がたいへんな労力を傾けて生産した高級なやきものです。将軍家や他の大名家への進物などに用いられたといわれています。最近では、発掘すると江戸でもたくさんの鍋島焼が出てきます（図26）。全部が全部最高級品とは限りませんが、大名屋敷はもとより、旗本屋敷などの武家屋敷からも出土します。こうした出土状況からみると、おそらく、単に進物としてだけではなく、経済的にも相当のウェイトを占めていたろうと考えられます。

このような、国元で大々的に作るやきものだけではなく、藩主などが個人的に楽しむためのやきものもあります。特に江戸時代は茶の湯が盛んで、茶の湯は大きな文化活動の一つでした。その茶の湯などに使用するため、御庭焼と呼ばれる小規模な窯が営まれました。

尾張藩は、瀬戸・美濃といった一大窯業生産地を身近にしていることもあって、やきものとかかわりの深い大名です。尾張藩の上屋敷は現在の防衛庁（省）の敷地などに当たっていますが、その発掘調査によって、「楽々園焼」の御庭焼きが出土しています。これらは小さな窯で焼き、意匠的にもおもしろく、凝ったやきものです。やきものの裏には、しばしば「楽二園製」、「楽々園」というような刻印が見られます。「楽二」というのは、楽が二つ重なっており、やはり「楽々園」という意味です（図27）。

讃岐高松藩の藩主はやはりやきもの好きで、京都の陶工を讃岐に呼び寄せて、理兵衛焼という御庭焼を始めました。讃岐高松藩は水戸徳川家の分家です。理兵衛焼は代々の紀太理兵衛が作っていますが、このやきものは伝製品も少なく、あまり良くわかっていません。その讃岐高松藩の屋敷が千代田区飯田橋にあったのですが、発掘調査をしたところ、一つの穴からまとまって、おそらく5代理兵衛の作になると思われる理兵衛焼が一括して出てきました（図28）。特にこの5代理兵衛は名工の誉れが高い方でした。

出土したやきものはたいへん変わった器種で、専門家でもあまり見ることがない珍しいもので、実用品ではないかもしれません。大体が鏡台です。半円形に伸びた細い腕の上端に小さな穴が開いています。当時の鏡は丸い銅鏡ですが、この穴を支点として鏡を嵌め込む構造になっています。このほかにも、筆立てか、祭り事に使う幣（ぬさ）立てかとの定まらないやきものも出土しています。この

ようにデザイン的に非常に凝っており、細かい模様が描かれた、手の込んだ繊細な技法で作られた京焼系のやきものです。こういった国元で作られたものが、江戸の藩邸で使われていた一例です。

東京都庁は以前丸の内にありましたが、新宿移転後は旧都庁の跡地は国際フォーラムという施設になりました。その国際フォーラムの建設に先立って行われた発掘調査で、注連縄文が描かれた碗がいくつか出土しています（図 29）。丸ノ内の旧都庁舎は、土佐高知藩山内家と阿波徳島藩蜂須賀家の上屋敷が隣り合っている遺跡でした。注連縄文碗は蜂須賀家の上屋敷跡から出土したのです。蜂須賀家では大福茶（おおぶくちゃ）といって、年頭にお茶を飲む風習があり、その折に注連縄文碗を使用しました。やはり国元の風習が江戸の藩邸でも行われていたという事例です。

### 発見された独自の「焼塩壺」

江戸に限らず、各地の城下町、あるいはお城を発掘すると、「焼塩壺」と呼ばれる土器がたくさん出土します。主に大坂周辺で作られていたのですが、時代が下ると、それを消費するそれぞれの地域でも作られるようになります。大坂周辺で作られた焼塩壺には、「泉州麻生」とか「泉湊伊織」といったスタンプが押されています。コップ型の土器の中に塩を入れ、そしてやはり土製の蓋をし、また焼く、そうして精製した焼塩を作ります。こうしてできた焼塩を調味料に使ったり、医療用に使ったりしますが、いずれにしても焼塩を詰めそのまま販売され、各地に持ち運ばれたものです。江戸の遺跡からもこういった焼塩壺がたくさん出ていますが、幸い色々なスタンプがあるので、どこで、いつ頃作られたかがわかり、年代の決め手となる重要な遺物です（図 30）。

汐留地区の仙台藩邸跡からは、底が厚くカットされている一風変わった特徴のある焼塩壺が出土しています。このような焼塩壺は、江戸でもほかの地点ではあまりみられません。ところが、仙台市内の発掘でも同じものが出ていることから、仙台で作られ、江戸に持ち込まれた焼塩壺であると考えられます。ただ、それはほかへは流通せず、仙台藩の邸内だけで使っていたものであろうと思われれます。これと同様な事例は加賀藩などでもあります。そのうち秋田などでも、こういった独自のものが出てくればおもしろいと思います。

### 国元の食習慣を垣間見る

東京大学の本郷構内から、池状の大きな穴が発掘されました。その中から膳や箸、木簡などの木製品や素焼きの土器であるかわらけ、あるいは動物の骨、魚骨、貝殻などがまとまって出土しました。寛永6（1629）年に、三代将軍家光と前将軍の大御所秀忠が、あいついで加賀藩邸を訪問します。将軍が大名屋敷を訪れるのは、「御成」といって大規模なイベントでした。その際、大宴会を催すわけですが、その宴会で使用した様々なものを捨てたごみ穴が、先程の遺構と考えられています。木簡は文字資料をもたらす古代の遺物がよく知られていますが、食品の付札や荷札として、江戸時代になっても用いられています。ごみ穴から出土した木簡には、鮎、鱒などの魚名が記されていて、このような食材が宴会の献立に上ったことが推定されます（図 31）。

実は、動物の骨、魚、貝殻といった食べ物の残滓が、大名藩邸のごみ穴からたくさん出てきます。それらを見ていくと、どうも当時江戸では捕れなかったり、あまり好まれなかったりした魚が特定の名古屋敷の中から出てくる場合があります。加賀藩邸からは、鯛や大きな鮑など、高級な魚介類が出

土し、さすが大名屋敷と思わせます。とともに、フグ・スケトウダラ・サバなども出土しています。フグは、その毒にあたって死ぬとお家断絶にもつながることから、武家では忌み嫌っていたといわれています。しかし、これらの魚は北陸では干物あるいは鮓などとして食べていました。ですから、どうも国元の食習慣は、そのまま江戸の藩邸内にも持ち込まれていたことが伺われます。

#### 土木・建築と江戸屋敷

江戸の大名藩邸の屋根に葺かれていた瓦は、江戸の近郊で作られている瓦が多いのですが、そのほかにそれぞれの大名の国元で作られたと思われる瓦があります。尾張藩邸跡からは、「尾州樽水御瓦竈元」と記された瓦が出土しています。また、紀州藩邸跡からは「泉伯／瓦屋伊三郎」、「紀州多田孫三郎」といった刻印がある瓦が出土しています。おそらく、補修などに使用されるために、国元からもたらされた瓦もあったのではないかと考えられます。このような土木建築ということになると、目に見えない国元の色々な影響もあります。

例えば尺度です。江戸では、土木や建築で長さを測る尺度は、町人地の町割では当初1間=6尺5寸(約30cm×6.5=195cm)の京間という間尺を使用していました。一方、武家地の町割では田舎間が用いられるなど、京間、田舎間が併用されていました。その後、次第に江戸間あるいは田舎間と呼ばれる1間=6尺(約30cm×6=180cm)の間尺が一般化していきます。

大名屋敷を発掘すると、塀や建物など、さまざまな遺構が検出されます。そうした遺構間の距離や柱の配列を測ると、当時どのような尺度を用いて設計されていたのかがわかる場合があります。支藩の大聖寺藩を含む加賀藩本郷邸では、17世紀後半以降は藩邸の外周などは田舎間(江戸間)で設計されていました。ところが、17世紀前半の段階では、藩邸内の区画や建物は京間、江戸間どちらにも属さない1間=6尺3寸といった中途半端な間尺が使われていました。加賀藩の国元の場合は、越前間と呼ばれる北陸地方などで盛んに使われていた6尺3寸の間尺があり、それが使われた可能性があるといわれます。地方では、こうした独自の中間尺があることがわかってきました。基準尺度の選択とその変遷は、幕府と大名との関係を考える上でも重要です。

秋田でも、湊城では2m間隔の柱間が検出されているようですが、これは京間を使っていたのでしょう。それから古川堀反町ですが、こちらの方は江戸時代初期では越前間に相当するような間尺が使われ、後期になると田舎間に相当するような間尺が使われていたと記憶しています。いずれにしても建物のサイズがどういった基準で建てられていたのかは、今後注意して発掘して頂くと、色々なことがわかり、おもしろいのではないかと思います。それらと江戸の藩邸で用いられていた尺度との関係は、今後発掘調査によって解明すべき課題の一つです。

#### おわりに

色々なことをとりとめもなくお話ししてきましたが、江戸の大名屋敷というのは近世日本の縮図です。それぞれの国元の文化がぎっしりと詰まった空間だったのです。その江戸藩邸と国元との関係は、封建制度を考える上で、非常に大事な問題です。こうしたことは、文献による記録からだけではわからない部分があります。考古学的に大名屋敷を分析することによって、表に出ない、つまり文献による記録に残されない事実が浮かび上がってきます。発掘された遺構や遺物は、それらを紐解く証拠物

件になります。そのため江戸時代といえども、考古学が非常に大事であり、これからも大事になっていくと考えています。

もうお分かりかと思いますが、江戸藩邸と国元との関係は、江戸の発掘を行うだけでは不十分です。各大名の国元で、城や城下町などの江戸時代遺跡の調査が行われ、江戸と国元との比較や情報交換ができて、初めて明らかになる部分が多いのです。そういう意味で、今後秋田でも近世の発掘調査がいつそう進められ、研究が盛んになっていくことを希望しています。

(追記)

本稿はテープ起こしした講演記録を古泉弘氏により確認していただいたうえ、大幅に補筆したものである。

## 図版

- 図1 仙台城本丸跡 石垣断面合成模式図（仙台市教育委員会，2000，『仙台城本丸跡の発掘』）
- 図2 江戸の惣構え
- 図3 模型で見る江戸（東京都埋蔵文化財センター蔵）
- 図4 「守山町三井家屋敷図」（東京都公文書館 1990.『江戸住宅事情』）
- 図5 江戸の町屋遺構 都立一橋高校地点（東京都教育委員会提供）
- 図6 江戸中心部における大名屋敷の分布（東京都江戸東京博物館，1997.『参勤交代—巨大都市江戸のなりたち—』）
- 図7 愛宕山から見た幕末の江戸（横浜開港資料館，1987.『F.ベアト幕末日本写真集』より）
- 図8 佐竹商店街
- 図9 加賀藩本郷邸（東京大学総合研究博物館，2000.『加賀殿再訪—東京大学本郷キャンパスの遺跡—』）
- 図10 溶姫御殿跡から検出された穴蔵（東京大学埋蔵文化財調査室提供）
- 図11 加賀藩梅之御殿の厠（東京大学埋蔵文化財調査室，1990.『東京大学本郷構内の遺跡—山上会館・御殿下記念館地点—』）
- 図12 理学部7号館地点と絵図面との対比（東京大学総合研究博物館，2000.『加賀殿再訪—東京大学本郷キャンパスの遺跡—』）
- 図13 萩藩毛利家下屋敷跡の地鎮遺構（東京都教育委員会提供）
- 図14 同地鎮遺構から出土した金銭（東京都教育委員会提供）
- 図15 汐留遺跡の土留め遺構の分類（東京都埋蔵文化財センター，2000.『汐留遺跡II』より）
- 図16 伊達家の舟入場跡（東京都教育委員会提供）
- 図17 埋桶式便槽（東京都教育委員会提供）
- 図18 仙台藩邸内に配管されていた上水樋（東京都教育委員会提供）
- 図19 上水木樋の継手（東京都教育委員会提供）
- 図20 上水枡（東京都教育委員会提供）
- 図21 素掘りの穴蔵（真砂遺跡調査会，1987.『真砂遺跡』より）
- 図22 都立一橋高校地点から検出された木製穴蔵（東京都教育委員会提供）
- 図23 『安政見聞誌』にみえる穴蔵

- 図 24 汐留遺跡から出土した徳利（東京都教育委員会提供）
  - 図 25 仙台藩邸内の大池（東京都教育委員会提供）
  - 図 26 龍野藩邸跡から出土した鍋島焼（東京都教育委員会提供）
  - 図 27 楽々園焼と印銘（東京都教育委員会提供）
  - 図 28 高松藩邸跡から出土した理兵衛焼（東京都教育委員会提供）
  - 図 29 徳島藩邸跡から出土した注連縄文碗（東京都埋蔵文化財センター，1994.『丸の内三丁目遺跡』）
  - 図 30 焼塩壺（新宿区新宿歴史博物館提供）
  - 図 31 東京大学本郷構内「池」遺構から出土した木簡（東京大学埋蔵文化財調査室提供）
- 表 江戸の人口密度（内藤 1966 より）

住 区 種 別	概 算 人 口	面 積 (km <sup>2</sup> )	人口密度 (人/km <sup>2</sup> )
武 家 地	65 万人	38.653	16,816
寺 社 地	5 万人	8.799	5,682
町 人 地	60 万人	8.913	67,317
総 計	130 万人	56.365	23,064

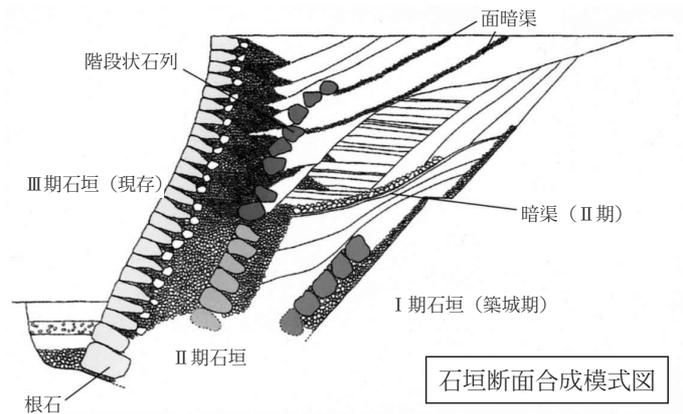


図 1

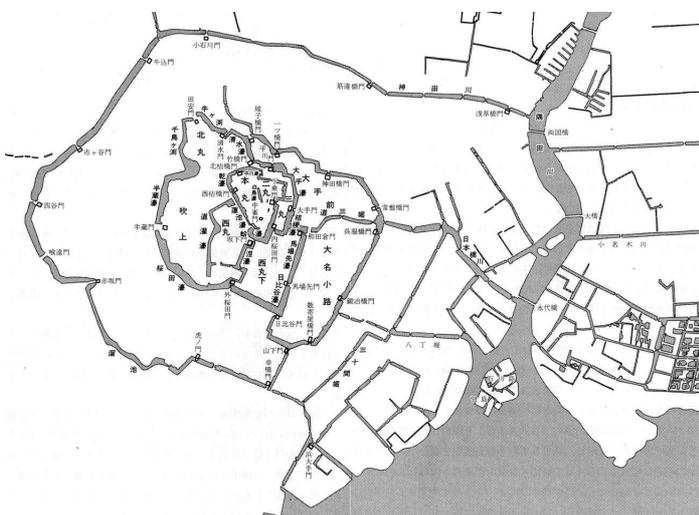


図 2

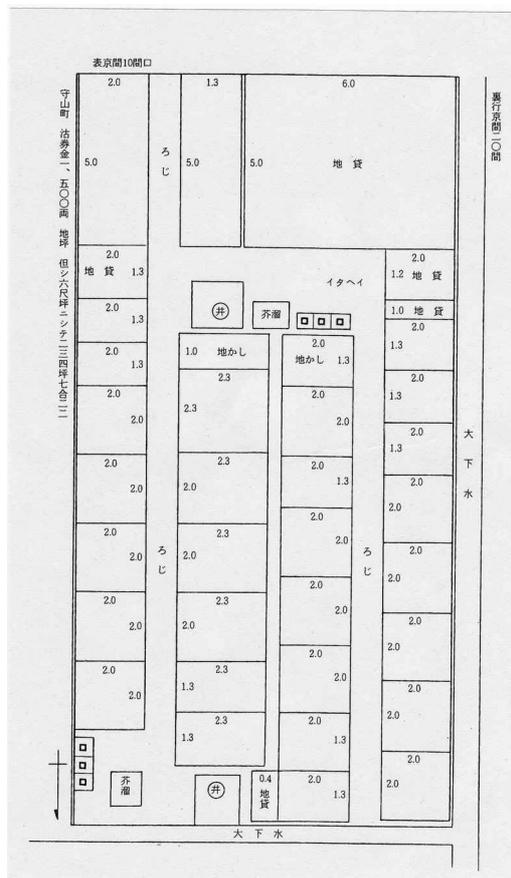


図 4



図 3



図 5

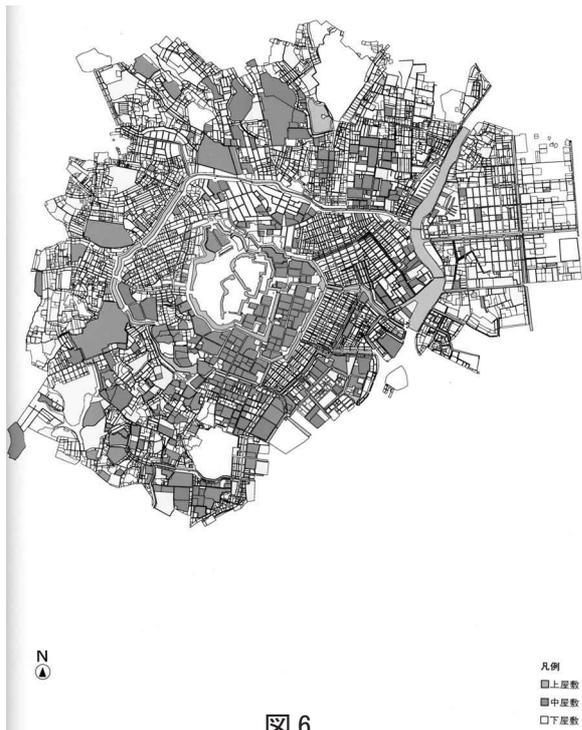


図 6

凡例  
 ■ 上屋敷  
 ■ 中屋敷  
 □ 下屋敷



図 7



図 8

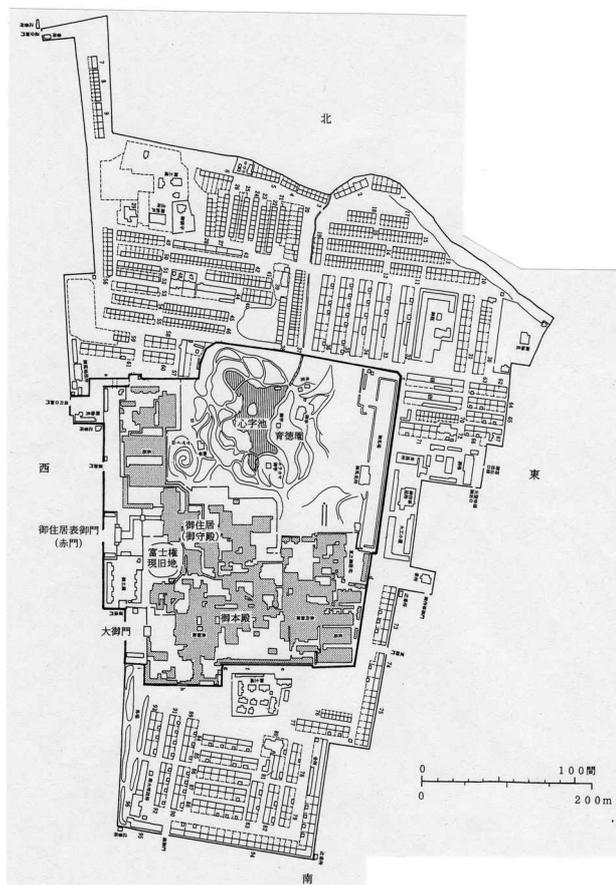


図 9

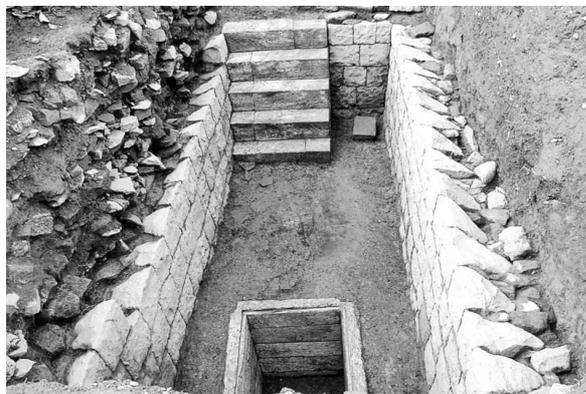


図 10

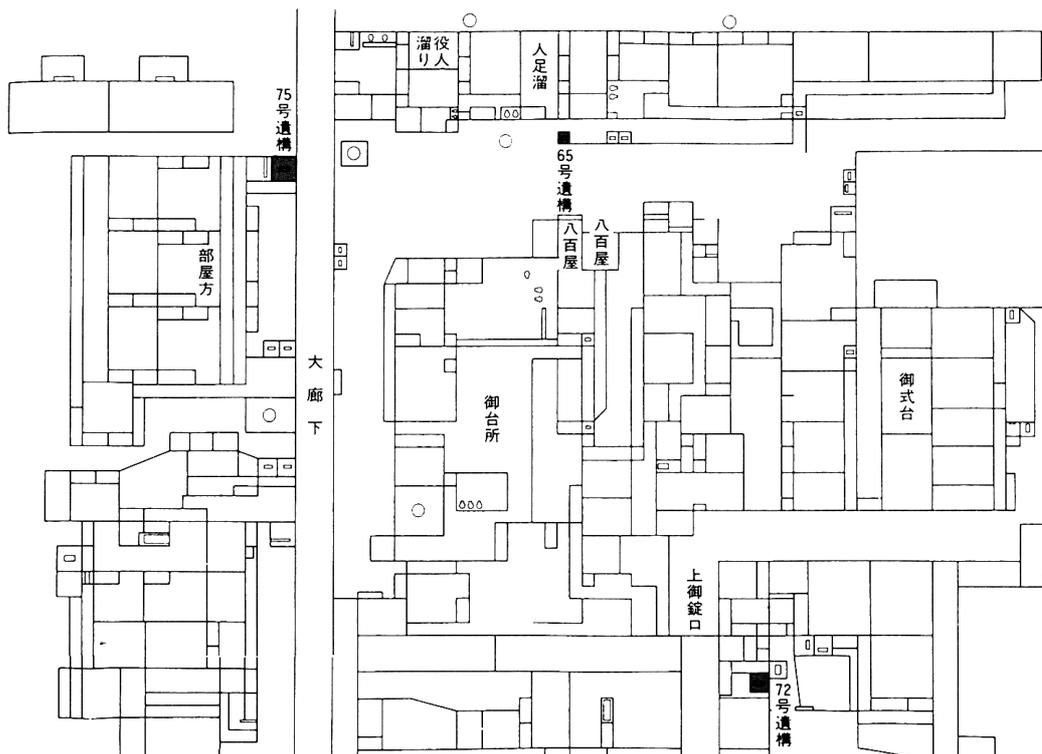


図 11

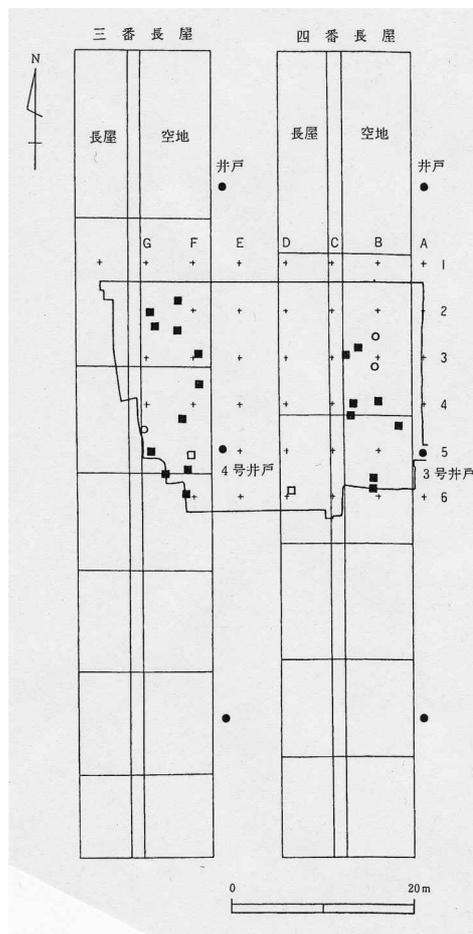


図 12



図 13



図 14

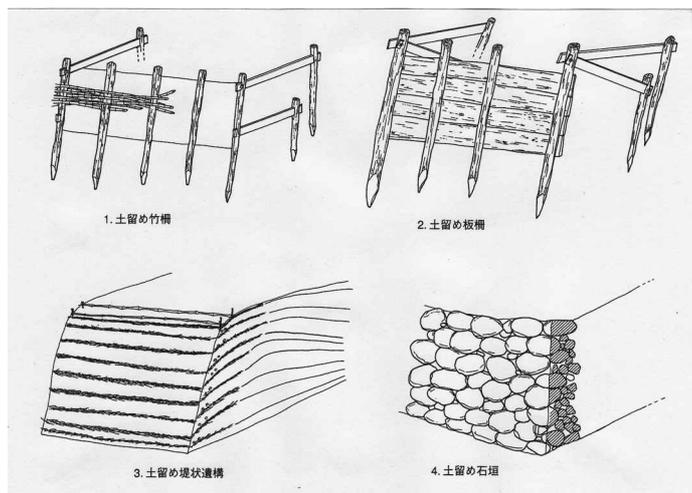


図 15



図 16



図 17



図 18



図 19



図 20

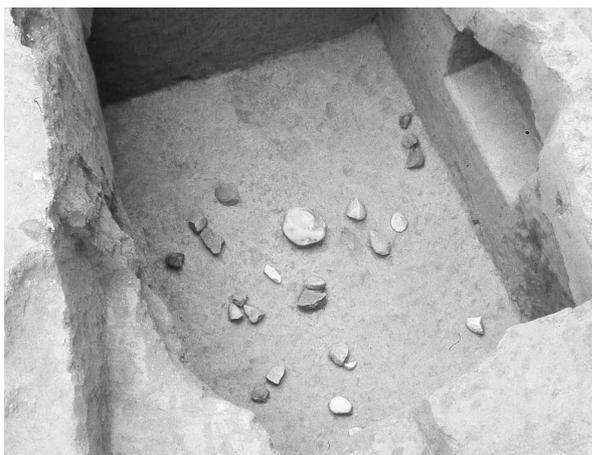


図 21



図 22



図 23



図 24



図 25



図 26

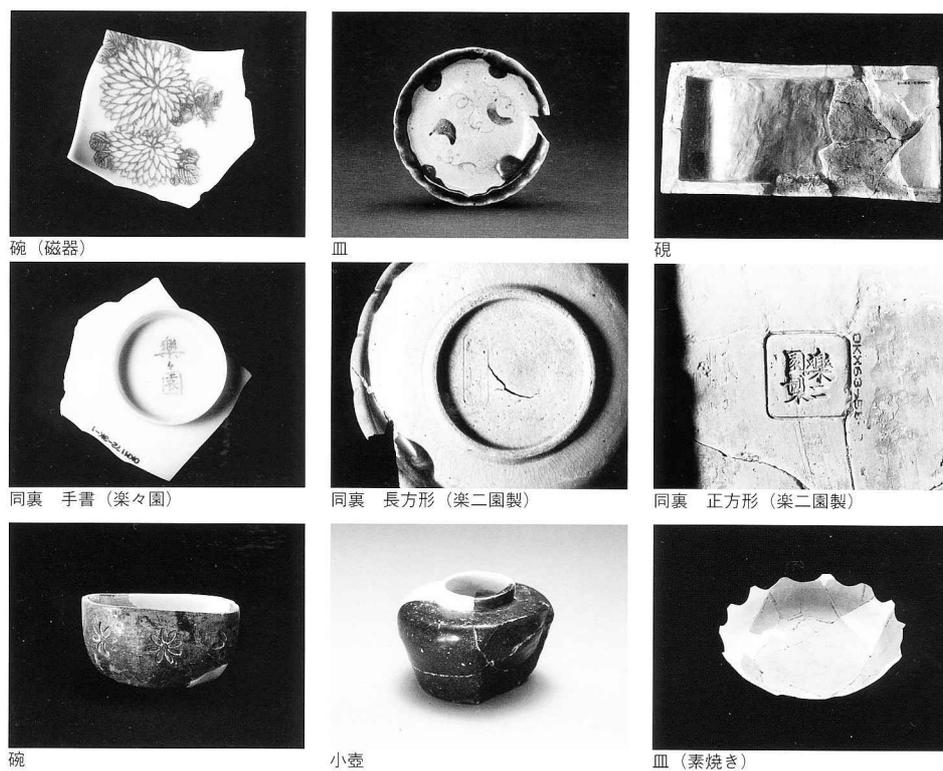


図 27



図 28

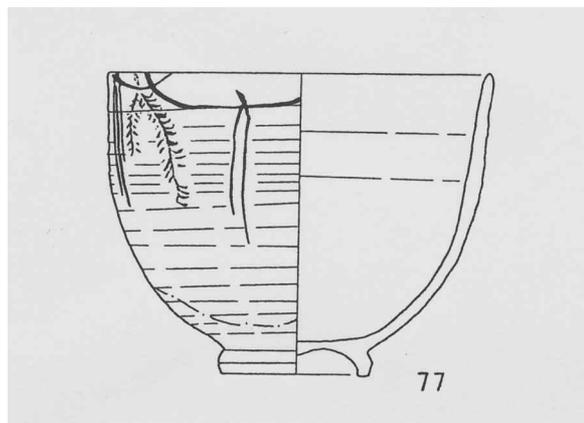


図 29



図 30

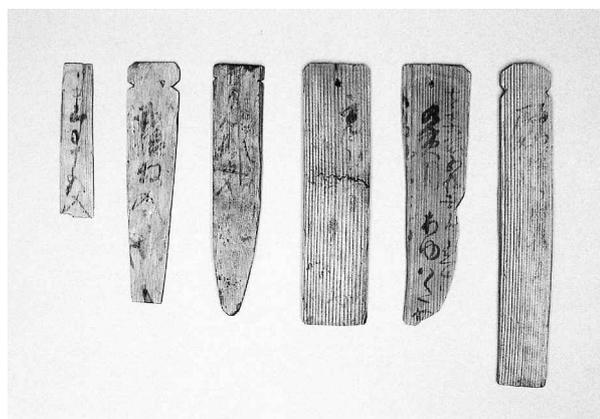


図 31

# 秋田県内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定（2007年度）

小林謙一<sup>\*1</sup>・坂本稔<sup>\*1</sup>・遠部慎<sup>\*1</sup>・小林克<sup>\*2</sup>

## 概要

これまでに秋田県埋蔵文化財センター所蔵資料である虫内Ⅰ遺跡、柏子所Ⅱ遺跡、中屋敷Ⅱ遺跡、向様田A遺跡、向様田D遺跡ほかの出土土器付着物の加速器を用いた年代測定を行い報告してきた。2007年度は、虫内Ⅰ遺跡・戸平川遺跡、奥椿岱遺跡、物見坂Ⅲ遺跡について、保留していた試料の測定を行った。

試料の前処理は、炭素年代測定グループが行い、測定はパレオラボ社によるものである。測定結果は計測値(補正)とともに実年代の確率を示す較正年代値を示す。

試料については、一覧を表1に付す。このうち AKT-094 は以前に測定した資料について、同一試料を前処理後保管してあった試料を別機関で再測定した測定値(rt)である。

## 1 測定資料の概要

第3図に各報告書から引用した測定試料採取の土器実測図を掲げる。

物見台Ⅲ遺跡出土土器（AKT1、AKT2）は同一の土坑内（SK327）で共伴した資料である。

AKT1は波頂部の2つを失うが、口縁の描くカーブから3単位の波状口縁深鉢と判断される。胴下部から底部も欠損するが、口縁下から直線的におり、胴部半ばからわずかにカーブしておりて尖底部に続く砲弾形のプロフィールを示すものと推定される。器高の1/3ほどにあたる口縁部から胴上部にかけてが沈線による文様が施される部位で、縄文を地紋として施した上に二条一組の沈線で大きな山形区画を連続して作り、区画内には9～10数条の横位平行沈線が充填される。また、胴半ばにも5条一組の平行沈線が器面を巡る。地紋縄文は胴上半の沈線による山形区画文の施される範囲ではRL縄文の横位回転施文であり、胴下半ではRLとLRの二種を用いた羽状縄文である。AKT2は深鉢の尖底部である。直線的におりる胴下半から底部は逆円錐形のプロフィールとなる。器面にはRL縄文を横位、縦位に施し、底部から7cmほどの間は角棒状工具を上から下に押し当てての押し引き文列が施される。以上は、縄文時代前期初頭の早稲田6類に比定される。

戸平川遺跡出土土器（AKT108）は小波状口縁の深鉢形土器である。口縁はやや内湾して立ち上がり胴上半部で膨らんで胴下半まで緩やかなカーブをもって下りる。底部は欠損する。口縁下には数条の沈線が施され、胴部にはRL縄文が横位回転施文される。大洞C1式に比定される。

奥椿岱遺跡出土土器（AKT114）は小波状口縁の深鉢形土器である。緩く外傾して立ち上がる口縁部は無紋で、胴部との境で段をもって屈曲する。胴部はその上半部分で緩く膨らみ、下半から底部にかけては、直線的に下りる。胴部にはLR縄文の原体を左上－右下の方向で回転した横走縄文が施される。底部近くは調整され無紋となり、底部端は外側にやや張り出す。遺構外出土として報告された土器であるが、遺跡では変形工字文を施した鉢形土器やそれに伴う時期の粗製深鉢形土器を出土した複数の土坑が確認されている。本資料もそれに類した土坑の脇から出土している。横走縄文が施文されている点からしても、変形工字文を特徴とする大洞A'式に伴う粗製土器と判断される。

\*1 国立歴史民俗博物館

\*2 秋田県埋蔵文化財センター北調査課長

虫内 I 遺跡出土土器 (AKT094) は口縁部が直立し、胴部がわずかながら膨らんで底部に続く深鉢形土器である。平縁の口縁近くでは LR 縄文が横位に施文されるが、以下は底部近くまで縦位に回転施文される。底部近くはナデ調整が施され、底部底面はわずかながら上げ底となる。内面はナデ調整される。虫内 I 遺跡は縄文時代後期末入組文段階から晩期前葉大洞 BC 式の土器が出土し、埋設土器 (土器棺) 204 基が確認されて、当該時期の墓域と評価されている遺跡である。本資料もそれら土器棺の一つであるが、大半は大洞 B 式に比定される。

## 2 炭化物の処理

試料の前処理・調製の方法については、これまで報告してきたとおりである (小林他 2006a ほか)。今年度の資料については、歴博で AAA 処理を行った後、試料調製・グラファイト化はパレオラボ社に委託した。

## 3 測定結果と暦年較正

表 2 に測定機関、<sup>14</sup>C 値、 $\delta^{13}\text{C}$  値、較正年代をまとめる。AMS による <sup>14</sup>C 測定は、パレオラボ社 (機関番号 PLD) に委託した。測定結果は、同位体効果を補正し、暦年較正年代を算出した。 $\delta^{13}\text{C}$  値は、AMS で同位体効果補正のために測定した数値しかない例は、参考値として ( ) で示した。

なお、前回 (小林他 2005a, 2006) までに年代値を報告した資料について、AAA 処理後の試料に測定用以上 (3mg 以上を基準とした) に量的に余裕があり保存してあった分、改めて昭光通商に委託し安定同位体質量分析計で測定した。その  $\delta^{13}\text{C}$  値を表 4 に掲載する。

## 4 測定結果の解釈と暦年較正年代の解釈

安定同位体比  $\delta^{13}\text{C}$  値を見ると、AKT094、1、2 は、-23‰代で、海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性がある。秋田県内では、これまでの測定でも一定数の海洋リザーバー効果の影響が疑われる  $\delta^{13}\text{C}$  値が -20～-24‰の土器付着物が、内面付着お焦げを中心に一定量認められ、海産物やサケ・マスなどの盛んな利用が反映している可能性がある。また、秋田県は青森県とともに、古い大気を溶け込ませる深層水の上がってくる地点や北方海域から流れ込んでくる海流が近くを通る関係等から、海洋リザーバー効果の影響の現れ方が、より南の地域に比べ大きい可能性 (北海道では 1000 年近く古くなる場合があることが確認されている) があり、ゴツ煮にするなど調理の方法や海産物の内容とも合わせ、海洋リザーバー効果の影響の現れ方について検討していく必要がある。いずれにせよ、これらの  $\delta^{13}\text{C}$  値が重い試料には、実際の年代よりも古い年代が測定されている可能性がある。

なお、これまでに報告した測定資料のうち、あとから同一試料 (AAA 処理後保管してあったもの) で安定同位体比として  $\delta^{13}\text{C}$  値のみを測定した試料があるので、表 4 に記しておく。AKT113 が -23.7‰ (岱 II 遺跡青木畑式深鉢外面煤) など、-24‰よりも重い (絶対値が小さい) 試料は、海洋リザーバー効果の影響を受けている可能性がある。

虫内 I 遺跡出土大洞 B 式深鉢付着物の AKT094 は、2004 年度に歴博年代測定実験室で前処理後、加速器分析研究所に委託して測定し (小林他 2005a)、 $3030 \pm 40$  (IAAA40520) <sup>14</sup>CBP、較正年代で前 1405-1190cal BC に含まれる確率が 91.5%の結果が出ている。今回の再測定では、1 $\sigma$ の誤差範囲では 5 炭素

年の差でわずかに外れるが、較正曲線の波行があるためのばらつきと考えられ、おおそ整合的な測定値と見てよいと考えられ、実際に較正年代確率分布では1400～1310cal BCの年代幅では高い確率で重なっている。なお、前述のように $\delta^{13}\text{C}$ 値から海洋リザーバー効果の影響が考えられ、実際の土器使用時よりも古い較正年代である可能性がある。

戸平川遺跡大洞C1式比定鉢形土器の口縁～胴上部外面付着物AKT108は、 $2890 \pm 20^{14}\text{CBP}$ 、較正年代で前1130-1005cal BCに含まれる確率が93.5%である。これまでに測定してきた向様田A(AKT145, 152, 164)(小林他2004b)・D遺跡(AKT215, 217, (216は海洋リザーバーか)) (小林他2005a)、中屋敷Ⅱ遺跡(AKT0400-N13, N31ab, T10, T13ab, T2)(小林他2005b)の大洞C1～2式土器付着物の結果と齟齬はない。

奥椿岱遺跡大洞A'式鉢形土器内面付着物のAKT114は、 $2560 \pm 20^{14}\text{CBP}$ 、較正年代で前800-595cal BCの年代幅の中に含まれる確率が95.5%である。これまでに測定してきた中屋敷Ⅱ遺跡(AKT0400-N20, N24, T4ab)の大洞A'式土器付着物とほぼ同じ頃で、岱Ⅱ遺跡の弥生前期青木畑遺跡出土土器付着物(AKT113,  $2290 \pm 40^{14}\text{CBP}$ , 較正年代400～205cal BCの中のいずれかの年代であることが95%) (小林他2005a)の結果よりも若く、整合的であると考えられる。ただし、大洞A'式、すなわち晩期最終末としてみると、これまでの新潟県青田遺跡や岩手県北上市内遺跡などでの結果(小林2004ほか)と重ねると、やや古い測定結果とも思われる。土器の位置づけの検討や、類似試料の測定の蓄積など、検討していく必要がある。

縄文早期について、物見坂Ⅲ遺跡の早稲田6類土器内面付着物2点を測定できた。AKT1・2ともに $\delta^{13}\text{C}$ 値がやや重く、海洋リザーバー効果の影響も考えられる。その影響の度合いが異なるためか、AKT1が $5780 \pm 20$ 、AKT2が $5595 \pm 20^{14}\text{CBP}$ で、測定値間に誤差以上の差がある。

縄文前期初頭早稲田6類土器の測定例として、青森県三沢市根井沼(3)遺跡3号焼土内出土土器の内面付着物AOMS6aは、 $5725 \pm 45^{14}\text{CBP}$ 、較正年代で前4685-4485cal BCに含まれる確率が92%であった( $\delta^{13}\text{C}$ 値は加速器での測定のみ)。測定値は、おおそAKT1と2の中間値である。また、土器型式の上でやや古いと考えられる例として、青森県野辺地蟹田(10)遺跡の縄文早期末赤御堂式～早稲田5類土器内面付着物AO-002が $6600 \pm 40^{14}\text{CBP}$ ( $\delta^{13}\text{C}$ 値-23.7%) (小林他2003)、青森県八戸市潟野遺跡早稲田5類かと考えられる土器口縁外付着物AOMB-71が $6870 \pm 50^{14}\text{CBP}$ ( $\delta^{13}\text{C}$ 値は加速器での測定のみ) (小林2007b)で、早稲田6類土器付着物よりはいずれも古く、齟齬はない。海洋リザーバー効果の影響の有無を含め、より確実な年代推定は、今後とも測定を重ねて検討する必要がある。

この測定は、科学研究費補助金基盤研究(A・1)(一般)「縄文弥生時代の高精度年代体系の構築」(研究代表今村峯雄 課題番号13308009)、平成19年度科学研究費補助金(学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築」(研究代表西本豊弘 課題番号16GS0118)、平成18年度科学研究費補助金(C)「AMS炭素14年代を利用した東日本縄紋時代前半期の実年代の研究」(研究代表小林謙一)の成果である。暦年較正については今村峯雄の方法に従う。資料については北上市埋蔵文化財センターにご教示を得た。本稿は、1を小林克、その他を小林謙一が執筆した。

#### 【参考文献】

今村峯雄編2004『課題番号13308009基盤研究(A・1)(一般)縄文弥生時代の高精度年代体系の構築』

遠部慎・小林謙一・坂本稔・尾寄大真・宮田佳樹・新免歳靖・松崎浩之 2006 「岩手県北上市大橋遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定」『大橋遺跡』埋蔵文化財調査報告書第 481 集,岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

小林謙一 2004 「東日本」『弥生時代の実年代』(春成秀爾・今村峯雄編) 学生社

小林謙一 2004 『縄紋社会研究の新視点—炭素 14 年代測定の利用—』六一書房

小林謙一 2007a 「縄紋時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集 国立歴史民俗博物館

小林謙一 2007b 「青森県潟野遺跡の<sup>14</sup>C年代測定」『潟野遺跡』II 青森県埋蔵文化財調査報告書第 431 集 青森県教育委員会

小林謙一・今村峯雄・坂本稔 2003 「第 3 章野辺地蟹田(10)遺跡出土試料の炭素年代測定」『野辺地蟹田(10)遺跡 II 野辺地蟹田(12)遺跡 向田(34)遺跡 -国道 279 号有戸バイパス建設事業に伴う遺跡発掘調査報告-』青森県埋蔵文化財調査報告書第 343 集、青森県教育委員会、pp.42-43

小林謙一・今村峯雄・坂本稔・松崎浩之 2004a 「秋田県神岡町茨野遺跡出土土器付着炭化物の<sup>14</sup>C年代測定」『茨野遺跡』神岡町文化財調査報告書,神岡町教育委員会

小林謙一・今村峯雄・坂本稔・陳建立 2004b 「森吉町向様田 A 遺跡出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『向様田 A 遺跡』秋田県文化財調査報告書第 370 集,秋田県教育委員会

小林謙一・坂本稔・尾寄大真・新免歳靖・松崎浩之・小林 克 2005a 「秋田県内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定」『(財)秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第 19 号, (財) 秋田県埋蔵文化財センター

小林謙一・坂本稔・尾寄大真・新免歳靖・松崎浩之・石澤宏樹 2005b 「中屋敷 II 遺跡第 2 次調査出土土器付着物の<sup>14</sup>C年代測定」『中屋敷 II 遺跡』秋田県文化財調査報告書第 384 集, 秋田県教育委員会

小林謙一・小林 克 2006 「秋田県内出土試料の<sup>14</sup>C年代測定結果について」『研究紀要』秋田県埋蔵文化財センター 第 20 号

西本豊弘編 2005 『科学研究費補助金学術創成研究費(2) 弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—(課題番号 16GS0118) 平成 16 年度研究成果報告』

Reimer, Paula J.; Baillie, Mike G.L.; Bard, Edouard; Bayliss, Alex; Beck, J Warren; Bertrand, Chanda J.H.; Blakwell, Paul G.; Buck, Caitlin E.; Burr, George S.; Cutler, Kirsten B.; Damon, Paul E.; Edwards, R Lawrence; Fairbanks, Richard G.; Friedrich, Michael; Guilderson, Thomas P.; Hogg, Alan G.; Hughen, Konrad A.; Kromer, Bernd; McCormac, Gerry; Manning, Sturt; Ramsey, Christopher Bronk; Reimer, Ron W.; Remmele, Sabine; Southon, John R.; Stuiver, Minze; Talamo, Sahra; Taylor, F.W.; van der Plicht, Johannes; Weyhenmeyer, Constanze E. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).

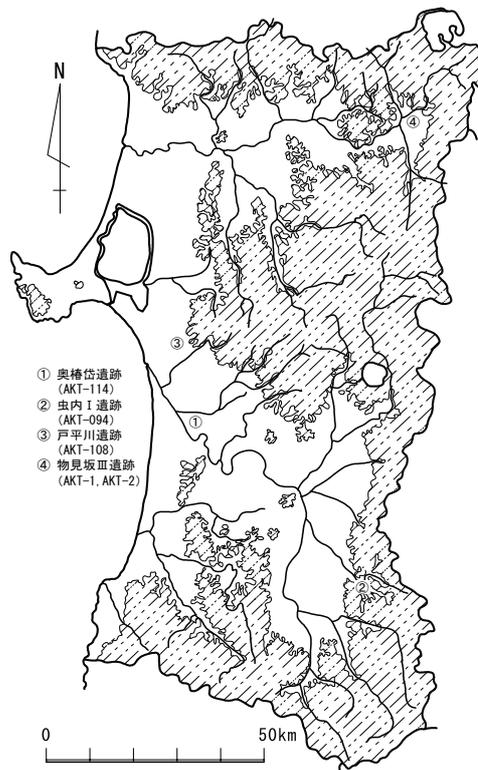


図 1 2007 年度年代測定試料遺跡位置図

表1 秋田県内の資料2007年度年代測定用試料一覧

試料No.	遺跡	報告書番号	時期	種類	出土区	付着位置	備考
AKT-114	奥椿岱遺跡	52図195	大洞A'式	土器付着物	50TTRP05	口縁内面	
AKT-094 (rt)	虫内I遺跡	274集255図	大洞B式	土器付着物	SR72,SR2072	胴下部内面	再測定
AKT-108	戸平川遺跡	未使用	大洞C1式	土器付着物		胴外面	
AKT-1	物見坂III遺跡		縄文前期早稲田6類	土器付着物	SK327-P3	口縁内面	
AKT-2	物見坂III遺跡	11・12図	縄文前期早稲田6類	土器付着物	SK327-P1	底内面	

表2 秋田県内2007年度年代測定用試料炭素含有量

	採取量	処理量	回収量	回収/処理	燃焼量	CO <sub>2</sub>	炭素含有率	CO <sub>2</sub> /燃焼
AKT-114	256.44	108.63	17.10	15.7%	5.80	3.16	54.5%	8.6%
AKT-094	73.64	46.39	21.09	45.5%	3.10	1.94	62.6%	28.5%
AKT-108	17.30	17.20	3.03	17.6%	2.80	1.38	49.3%	8.7%
AKT-1	120.02	83.43	19.02	22.8%	6.50	3.23	49.7%	11.3%
AKT-2	128.86	101.63	11.01	10.8%	5.00	2.33	46.6%	5.0%

量はmg単位、CO<sub>2</sub>は二酸化炭素の炭素相当量(mg換算)、炭素含有率はCO<sub>2</sub>/燃焼量(%)

表3 測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	$\delta^{13}\text{C}\text{‰}$	<sup>14</sup> C BP (補正值)	暦年較正 cal BC	確率密度 (%)
AKT-114	PLD-8229	-26.1	2560 ±20	800-755	78.7%
				685-665	14.0%
				610-595	2.8%
AKT-094 (rt)	PLD-8230	-23.1	3095 ±20	1420-1365	59.1%
				1365-1310	36.3%
AKT-108	PLD-8231	(-26.3±0.1)	2890 ±20	1190-1180	1.0%
				1155-1145	1.0%
				1130-1005	93.5%
AKT-1	PLD-8232	-23.0	5780 ±20	4690-4550	94.8%
AKT-2	PLD-8233	-23.9	5595 ±20	4460-4360	95.5%

表4  $\delta^{13}\text{C}$ 値再測定

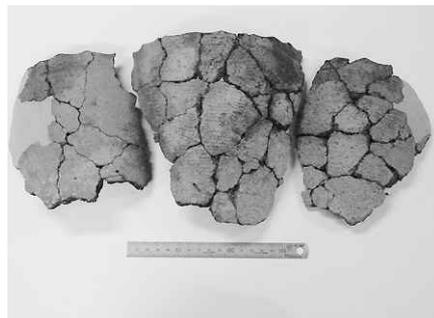
試料番号	測定機関	$\delta^{13}\text{C}\text{‰}$	遺跡名
AKT-113	昭光通商	-23.6	岱II遺跡
AKT-77	昭光通商	-22.8	茨野遺跡
AKT-78	昭光通商	-24.8	茨野遺跡
AKT-79	昭光通商	-24.2	茨野遺跡
AKT-118	昭光通商	-25.8	漆下遺跡
AKT-121	昭光通商	-26.3	漆下遺跡
AKT-124	昭光通商	-25.3	漆下遺跡
AKT-118	昭光通商	-25.8	漆下遺跡
AKT-145	昭光通商	-25.8	向様田A遺跡
AKT-163	昭光通商	-26.0	向様田A遺跡
AKT-062	昭光通商	-20.4	柏子所II遺跡
AKT-065	昭光通商	-27.5	碎淵遺跡
AKT-089 a	昭光通商	-23.2	虫内I遺跡
AKT-091	昭光通商	-23.5	虫内I遺跡
AKT-N31 a	昭光通商	-27.4	中屋敷II遺跡
AKT-N31 b	昭光通商	-26.6	中屋敷II遺跡
AKT-N41	昭光通商	-26.7	中屋敷II遺跡
AKT-T10	昭光通商	-26.8	中屋敷II遺跡
AKT-T13 a	昭光通商	-27.4	中屋敷II遺跡
AKT-T13 b	昭光通商	-26.4	中屋敷II遺跡
AKT-T2	昭光通商	-26.0	中屋敷II遺跡



AKT94



AKT108



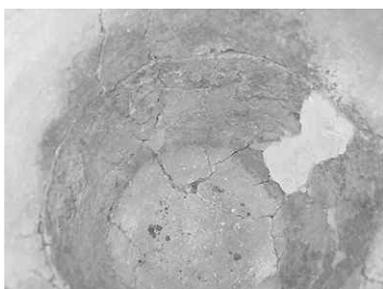
AKT114



AKT1



AKT2



AKT94 洞内



AKT108 洞外



AKT114 口縁内

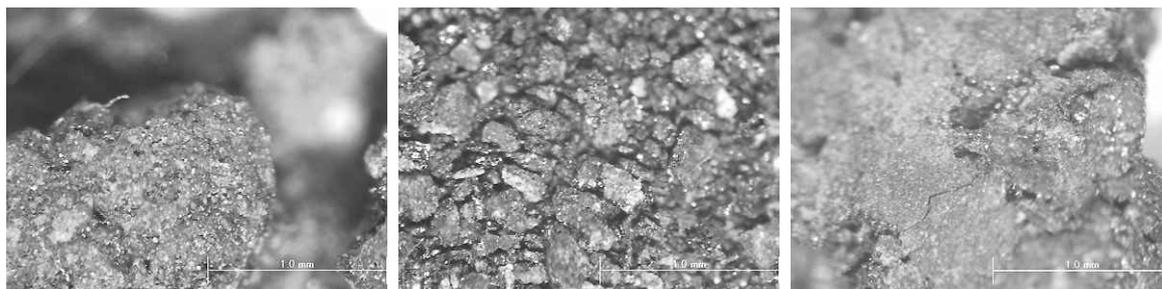


AKT1 洞内



AKT2 洞外

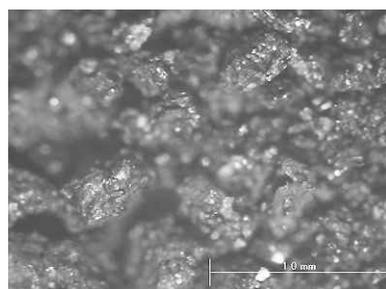
写真 1 測定試料と土器付着物の状況 (1)



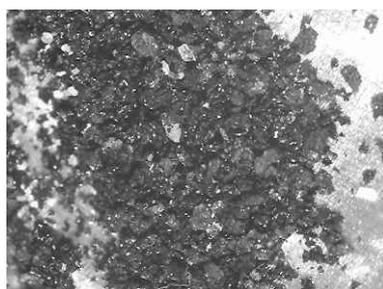
AKT94 前処理前約 24 倍

AKT108 前処理前約 24 倍

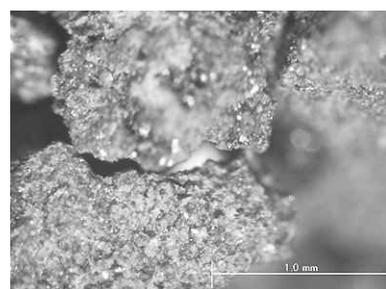
AKT114 前処理前約 24 倍



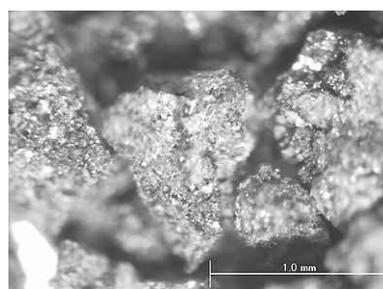
AKT94 前処理後約 24 倍



AKT108 前処理後約 24 倍



AKT1 前処理前約 24 倍



AKT2 前処理前約 24 倍

写真2 土器付着物の状況(2)

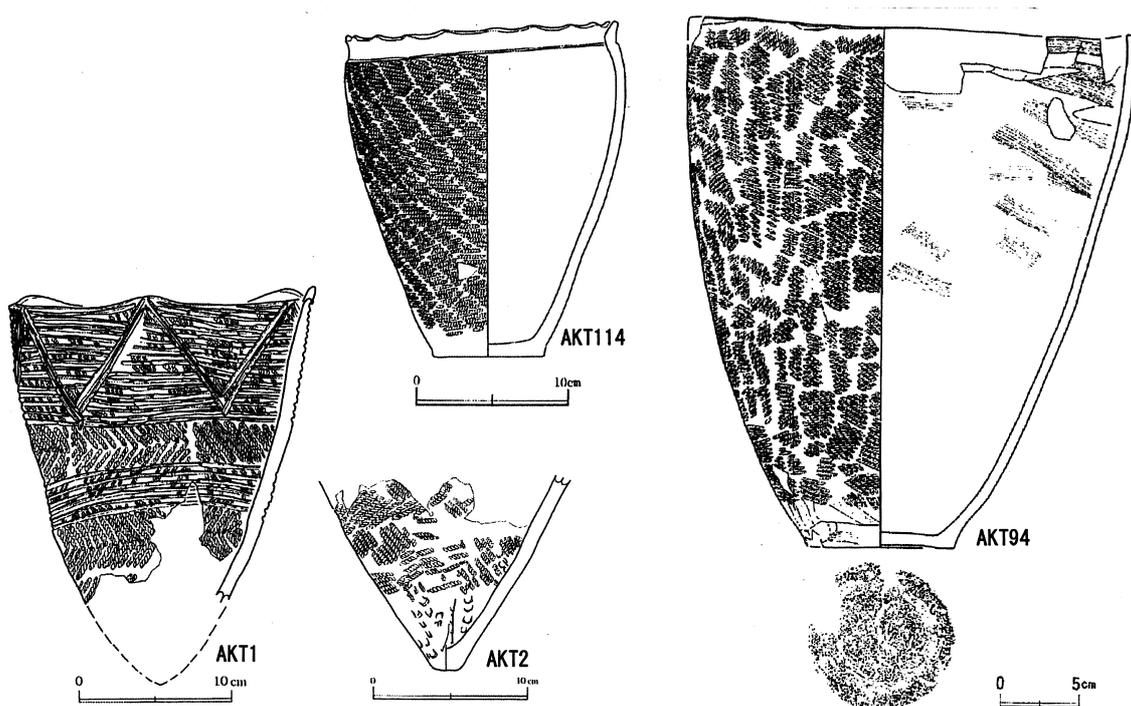


図2 測定試料土器実測図(各報告書より)

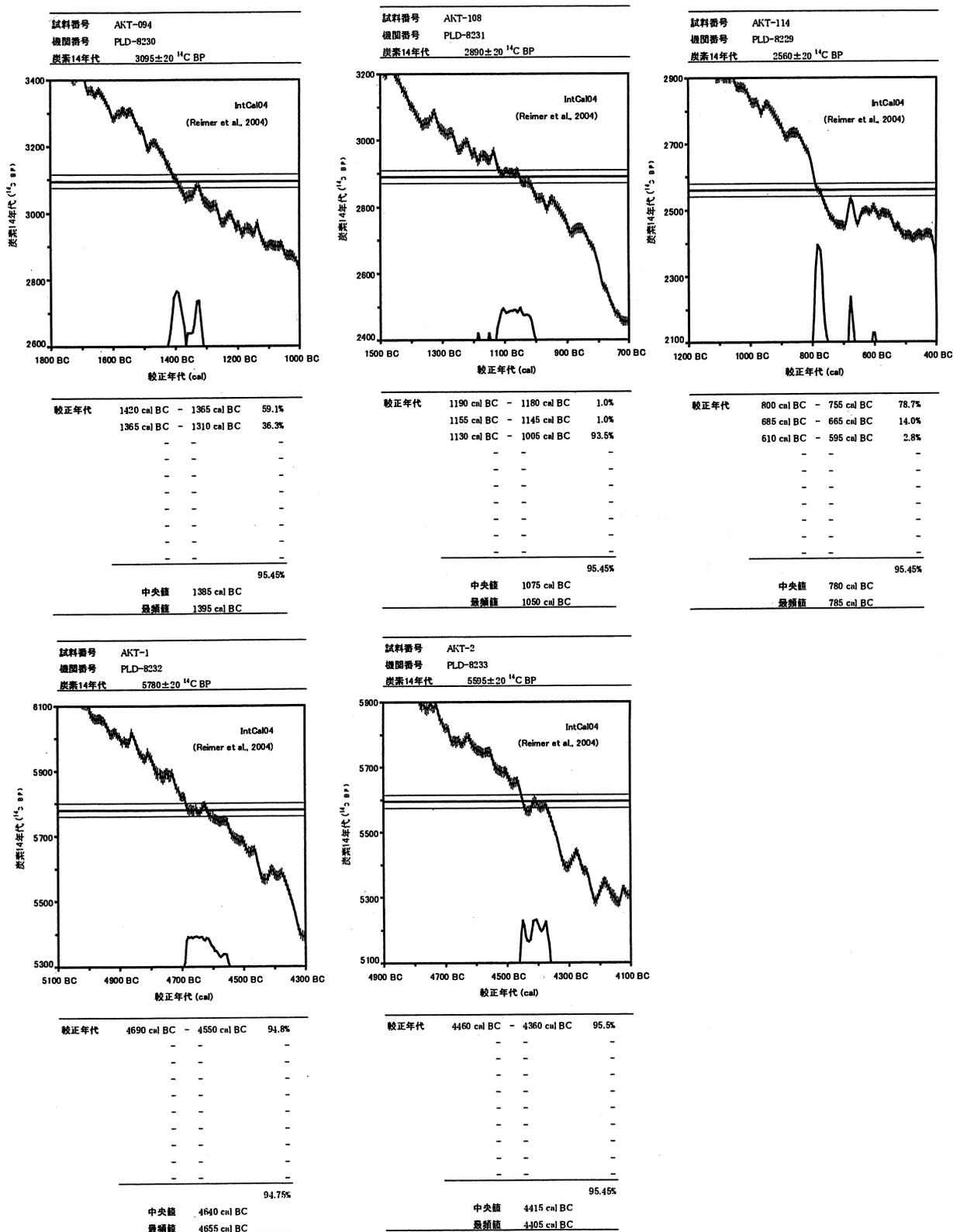


図3 秋田県内測定試料 (2007年度) の較正年代確率分布

# 能代市杉沢台遺跡の土坑埋納土偶

— 遺体変形と土偶祭祀 —

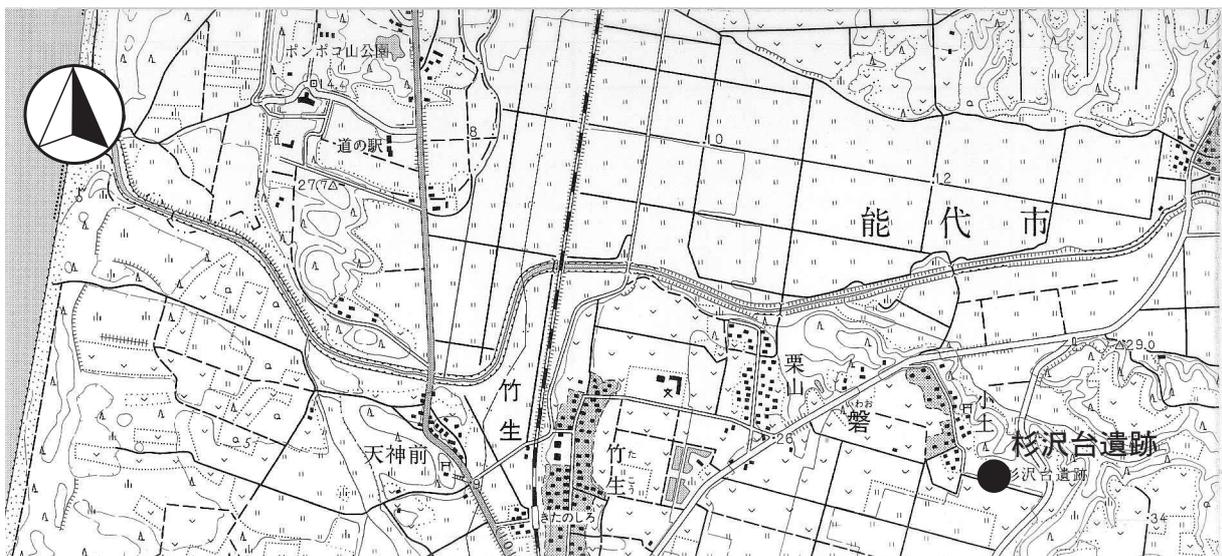
播摩芳紀<sup>\*1</sup>・小林 克<sup>\*2</sup>

## はじめに

本稿で紹介する土偶は能代市の杉沢台遺跡で、2004（平成 16）年度に行われた発掘調査によって見つかった土坑内出土の土偶である。

女性の身体をかたどった縄紋時代の土偶は、頭・腕・胴・脚部などが破片となって遺跡内に散在して見つかる場合が多い。こうした出土状態については従来、偶然の損壊あるいは故意の破壊の両説があった。特に後者については、女性神殺害とその遺体損壊によって食物を得たとする、ハイヌヴェレ型の食物起源神話（「古事記」の大気都比売神の逸話など）に重なって、土偶の故意破壊で豊穡を期待する縄紋時代の祭祀に結びついた説として解釈されるなどしてきた（吉田 1986）。一方、土坑を含め遺構内から出土することはまれであるが（金子 2001）、これまでも例外的に遺構内の出土例が知られ（江坂 1960, 野口 1964・1965, 中村 1989 など）、特に土坑（墓坑）内の副葬土偶の出現をもっては死者儀礼を巡る女性原理の明徴化とし、土偶をめぐる祭祀の性格が変化することが指摘されている（設楽 1996）。

杉沢台遺跡の土偶は縄紋時代晩期の土偶であるが、秋田県内の出土例としては初めて土坑内に埋納された状態で見つかった。既に報告書によってその概要を知ることができるが（能代市教委 2006）、後述するように土偶そのものの特徴およびその特異な出土状態は、遺跡の位置する秋田県北部、米代川中下流域の他の縄紋時代の遺跡、特に後晩期の墓地遺跡と比較することで、この地域の葬送を巡る儀礼習俗に土偶祭祀にも現れる独特の観念があった可能性を示唆する。縄紋時代の死者儀礼を考える上で興味深い視点を与えてくれる事実である。調査状況について再度報告し、杉沢台遺跡の土偶からこの葬送観念の一端を考え、土偶の故意破壊説について考えたい。なお、以下の 1 から 2 は調査者の一人播摩が、それ以外を小林が分担した。



第 1 図 杉沢台遺跡位置図（国土地理院 1/25,000『羽後水沢』）

\* 1 能代市教育委員会

\* 2 秋田県埋蔵文化財センター 北調査課長

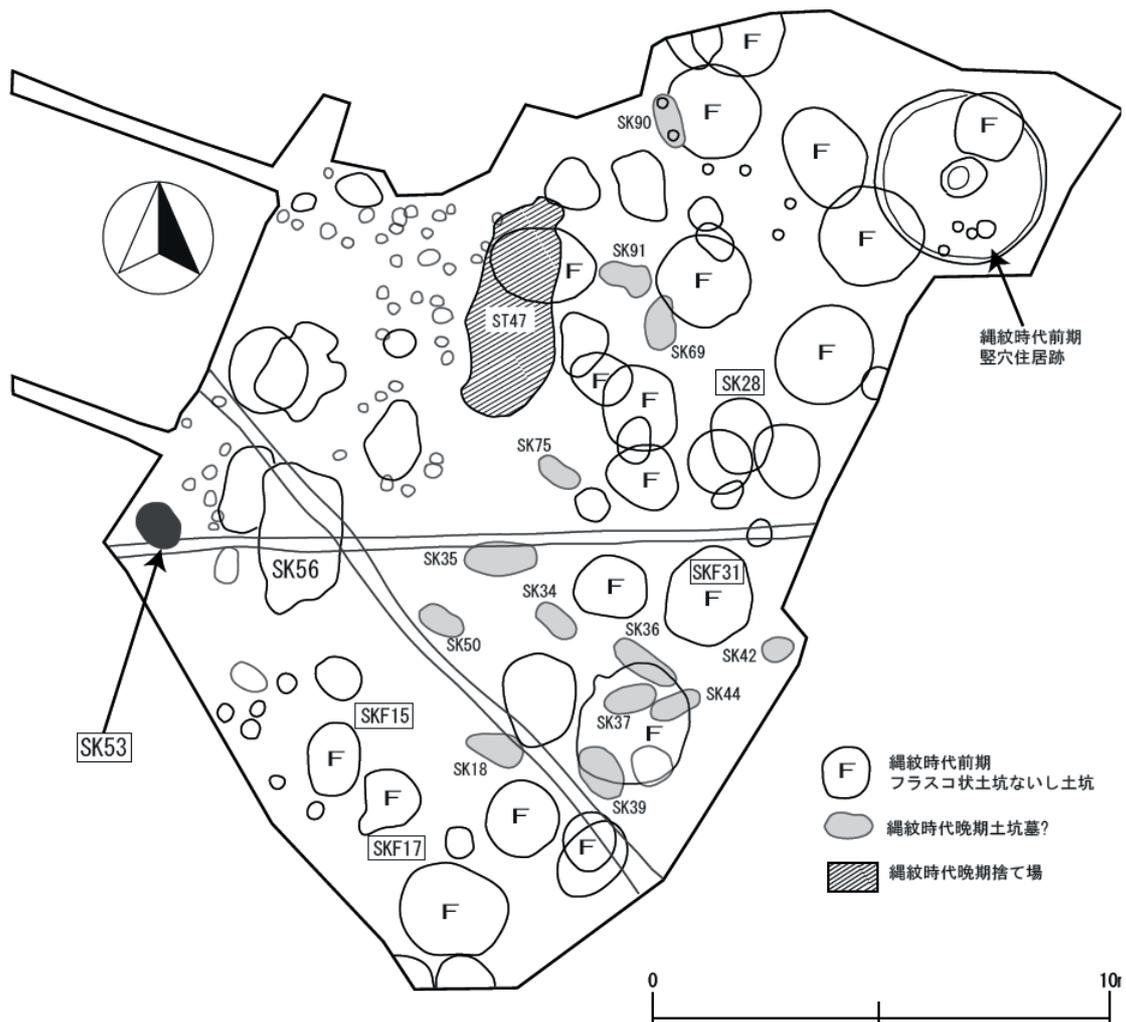
## 1 杉沢台遺跡の位置と平成 16 年度発掘調査

杉沢台遺跡は、能代市を東西に貫流する米代川の北に広がる東雲台地の北縁に位置する。標高は30～35mで、日本海汀線までは3.3kmである。遺跡のある台地は北側の竹生川に面して段丘崖を形成し、かつて縄紋時代前期の最温暖期には直接に海に面していたことが想定されている（永瀬 1987）。

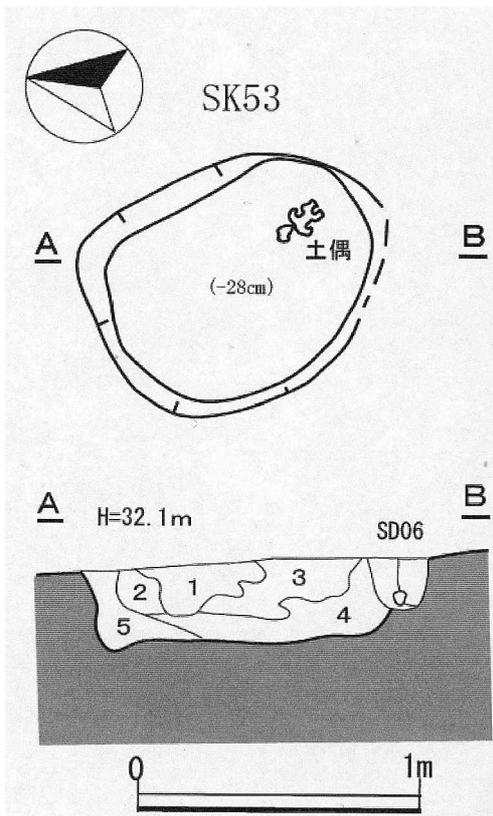
本遺跡は、昭和 55 年に国営圃場整備にともなって発掘調査され、大型竪穴住居跡 4 軒を含む竪穴住居跡 44 軒、フラスコ状土坑群などが見つかり、国史跡に指定された。平成 16 年度の発掘調査はこの史跡範囲の東側 50m ほど離れた地点で行われた。

調査区の東は崖となって落ち込み、谷底には遺跡の名前ともなった杉沢が流れている。調査区内では縄紋時代の竪穴住居跡やフラスコ状土坑、小判形（長円形）の土坑、そのほか多量の縄紋時代晩期の土器を包含する土坑などが検出された。弥生土器や土師器・須恵器も出土しており、弥生時代については隣接する杉沢野遺跡との関連が示唆される。

調査区では、縄紋時代前期のフラスコ状土坑が多数検出されている。検出されたフラスコ状土坑には、その覆土に、焼土層など使用の過程で火が用いられた痕跡を残すものがある。SKF15 では覆土の中ほどの高さに、隣接する SKF17 では底面に近い層に焼土が見られた。SKF15 からは焼土層に近いレベルから、長さ40cm ほどの礫 2 個が出土している。また、SKF31 からは底面壁際ピットに被熱痕跡がみられた。そのほか、底面に近いところで礫が散在するものや、覆土中に集石がみられるものなどがあり、そ



第 2 図 杉沢台遺跡平成 15・16 年度調査区と SK53 の位置



第3図 SK53 土坑平面および断面図  
(能代市教委 2006『杉沢台遺跡』より)



SK53 土坑全体と土偶位置

土偶の位置は土坑の南東側壁に寄った底面上。頭部は南東壁から35cmほど離れ、胴体の軸は土坑長軸よりも10°ほど西に傾いたN-48°-Wである。



SK53 土坑の断ち割り

図のA-Bライン西側を断ち割って覆土堆積状況を確認。この段階ではまだ土偶は出土していない。



土偶全身の出土状況

覆土をすべて除き、土偶全身が現れた状況。頭部は仰向けの胴体から離れ、顔面をうつぶせにし、頭頂を斜めに胴体側に向けて置かれている。



土偶頭部の出土状況

東側に残った覆土を北側から崩してゆき、土偶頭部が底面で出土した状況。頭部は一度取り上げてから撮影し直している。

写真1 SK53 土坑と土偶出土状況

のなかには墓として使用されたものが含まれると推察される。なお、本調査区からは骨が出土している(SK28)が、分析等はおこなっておらず、詳細は不明である。これらのフラスコ状土坑のあり方から、本調査区には、縄紋時代前期の墓域が形成されていた可能性も考えられよう。

前期の遺構よりも新しい土坑の中に、フラスコ状土坑を切る数基を含む、一定の形態が想定される長軸の長さが幅の1.5倍以上ある長円形の土坑が12基(平成15～17年調査全体では20基を超える)検出されている。土坑からは晩期の遺物が出土したものが含まれる。出土した遺物や遺構の形態から晩期の土坑墓であることが想定される。米代川中下流域において縄紋晩期の墓坑は、柏子所貝塚の人骨が出土した土坑や藤株遺跡の土坑群など前葉に位置づけられる楕円形の形状が知られている。さらにそれとは異なる形態の土坑が調査区内で検出された。土偶の出土した土坑SK53である。平面形が円形の土坑は、鹿角市柏木森遺跡や北秋田市向様田A遺跡で検出された土坑墓の形態にみられる。また、上流域では、大館市家ノ後遺跡の楕円形の土坑から、ベンガラを検出された例が知られており、土壙墓と考えられている。発掘調査報告書では後期末～晩期中葉の時期を想定している。

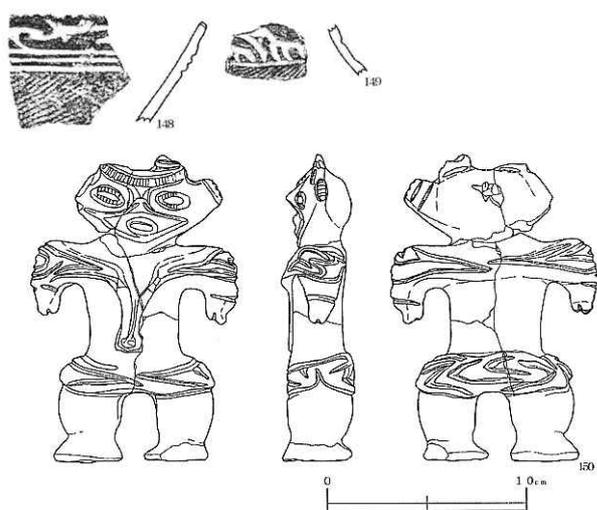
土坑群が墓域を形成していると考えれば、長円形の土坑やこのSK53以外にも同様の機能をもってつくられた遺構(墓坑)はまだあるかもしれない。また、検出された中には、SK53と関係した機能を持つ遺構も含まれていると推測している。同調査区では覆土に多量の土器を包含した遺構が検出された(ST47)。溝状とも呼べる長軸約4.6m、短軸約2mの掘り込みに、多量の土器が廃棄されている(36 $\frac{1}{2}$ コンテナ2.5箱分)。自然の谷を利用した捨て場や、向様田A遺跡、向様田D遺跡にみられる盛土状の捨て場とは異なる形態ではあるが、捨て場として使われたものと捉えている。家ノ後遺跡では、自然の凹地を捨て場として利用したと考えられる遺構が2基検出されており、小規模な廃棄機能を持つ遺構として共通性を認めることができよう。SK53とST47の間には、浅い掘り込みに土器が包含された遺構(SK56など)も検出されており、一連の複合的な機能を持っていた可能性もあろう。

なお、竹生川流域では、晩期の集落は見つかっておらず、様相は不明である。周辺には、杉沢を挟んで対岸に金ヶ沢Ⅱ遺跡、その台地続きで北側に金ヶ台遺跡が晩期の遺物散布地として知られている。杉沢の沢頭には弥生時代の杉沢野遺跡があり、晩期からの生活の場の連続が想定されよう(永瀬 1982)。

## 2 SK53 土坑の土偶出土状態

土坑の規模は略円形を呈し、長軸がN-37°-Wにあり、長軸108cm、短軸は推定で84cmである。深さは29cmで、底面はほぼ平ら、壁はほぼ垂直に立ち上がる。土坑の長軸端、南東壁から18cmほど離れた坑底部から土偶が出土した。全身が土坑長軸に沿う方向で脚部を南東に頭部側を北西に向けて出土した。埋土観察のため長軸に沿った南東側半分を断ち割った後、残った北東側埋土を西側から順次崩しつつ掘り上げていったところ、頭部がまず先に見えた。頭部が離れ、向きが変わっているものの、体部は足の向きが南東の仰向けの状態で出土した。土偶は顔面右側の突起および首元が欠けているほか、左の足首より下がわずかに欠けている。大きくは頭部が体部と離れての出土であったが、接合することができた。体部は出土後に割れたものであり、出土したピースとしては頭部と体部の2点であった。頭部には後頭部に穴があげられ、体部が中空であるために股下まで貫通した状態となっている。

共伴する遺物は報告書に掲載された土器2点のほか、20点あまりが出土しているが、多くは小片である。掲載された遺物以外では、羊歯状文か列点文と思われる文様のある破片が2点、沈線文のある破片



第4図 SK53 出土土器と土偶  
(能代市教委 2006『杉沢台遺跡』より)



写真2 SK53 出土土偶

写真上段右  
後頭部の穿孔  
写真上段左  
右頭頂部の欠損と右眼窩および眉上部のベンガラ

が2点ある。記録としては残していないが、掘り上げる過程では土器の出土は埋土の上～中ほどに集中していた。調査段階では層毎に取り上げることはしていないが1～3層に包含されたものであった可能性が高い。地山ブロックが混入し、埋め戻しと考えられるこれらの層には、縄紋晩期前葉の土器が含まれていることが確認できる。

ほかにも数基の土坑が晩期に属すると考えられるが、このような円形を呈し、壁がほぼまっすぐに立ち上がり底面が平らな土坑は、調査区で1基のみである。しかしながら検出された場所は調査区の西南隅であり、調査区外に広がっている可能性を残している。能代山本地域で見られる縄紋時代晩期の遺構はそれほど多くはない。縄紋晩期の墓域として知られる能代市柏子所貝塚の墓坑は楕円形を呈しており、また屈葬による埋葬であるため、本遺構の規模では埋葬形態が異なることが考えられる。もし同様の埋葬形態(屈葬)とすれば被葬者の身長はそれほど大きくないことになり、成長過程にある年齢に限定されよう。

土偶の大きさは、高さ155mm、幅105mm、厚さ(腰部)34mmである。頭部の割合が大きく、やや腰が張り、肩が水平に一直線に形成され、その両端に腕が垂直に垂れ下がるフォルムは遮光器土偶に類似する。股の下から頭部にかけて空洞となっており、頭部と体部上半は中空で、下半部は棒状の空洞となる。同様の形態の芯が成形・焼成の際に用いられたことがそこから想定できる。後頭部への穿孔により体の中心を貫通する空洞が形成されている。腰回りと腕部の文様は沈線で描かれ、腕部からの隆帯が小さな乳房を形成し、更に伸びてヘソ部分を折返し点とするV字状を呈する。胎土は密であり、1mm以下程度の粗砂を含む。焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。頭部や

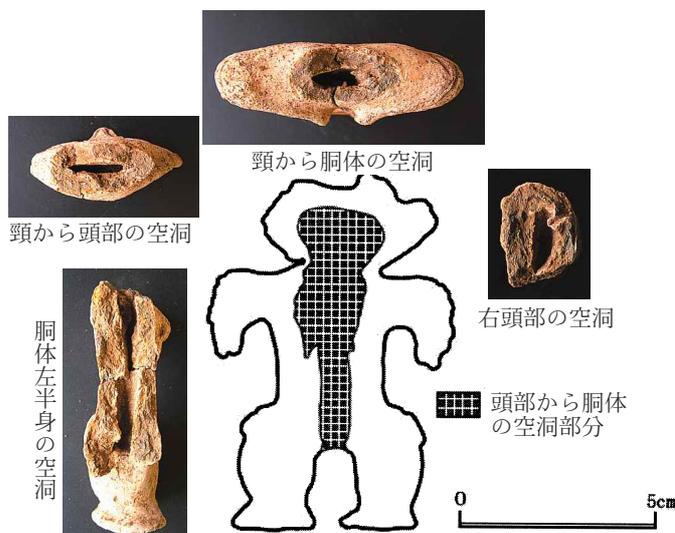


写真3 土偶の内部構造  
(写真・図とも山崎和夫作成)

目、紋様を構成する沈線の溝に赤色の着色料の痕跡が見られる。地紋となる縄紋は見られない。

### 3 縄紋時代晩期土偶の土坑埋納

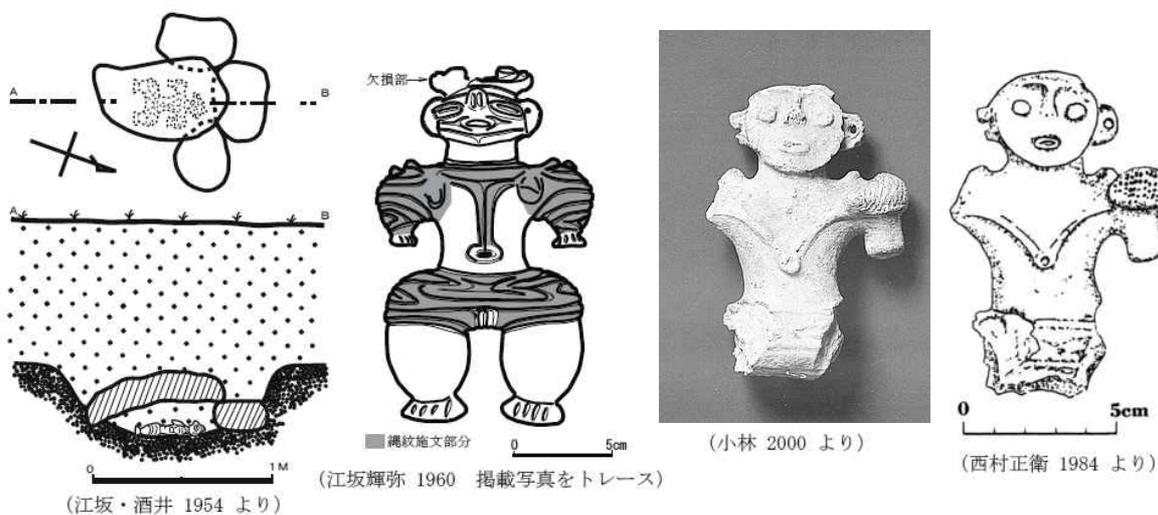
杉沢台遺跡出土の土偶は発掘調査による縄紋時代晩期の土坑内埋納の確認例として、きわめて希有かつ貴重な例となった。縄紋時代を通し特異な出土状態を示す土偶については比較的早い時期から注意が払われ（江坂前掲、野口前掲）、近年でも北海道から中部地方にかけて、遺構に伴う土偶の確認例のいくつかが集成されて（中村 前掲）、縄紋時代から次の弥生時代にかけて土偶を巡る祭祀構造が変化することが指摘されている（設楽 前掲）。果たして東日本の晩期の土偶出土状態にそうした性格の変化が認められるものか、それを考えるに先立ち、ここでは杉沢台遺跡例に関連する晩期後半の土偶埋納例について見る。

#### 山形県遊佐町杉沢遺跡

土坑内埋納例が紹介されている（第5図）。住宅建設に伴う不時発見であり正式な発掘調査を経たものではないが、江坂輝弥・酒井忠純両氏によって公表され（江坂・酒井 1954）、江坂氏や野口義磨氏によって広く紹介されている（江坂 1960、野口 1964・1965）。地表下60cmほどにあった土坑北壁の底部近くに三個の礫が置かれ、その中に上半身が収まるように土偶が仰向けに納められた上で蓋石がかぶせられている。納められた土偶の頭位は北から40度ほど西に傾いている。

土偶自体は、高さ18.3cmで、右の頭髮部、左側乳房の先端、右足指先を若干欠損するほかは、ほぼ完形で、中空の作りである。乳房および性器表現から女性であることがわかる。晩期前半の遮光器状の形から変化した細長い眼があり、肩や腰には縄紋を施文した後に深い沈線を抉り込み、部分的に磨り消して装飾する。腹部中央の正中線は肩の付け根に施された両乳房からT字形に降り、臍の部分に開けられた焼成前の穿孔を囲んで閉じる。股間部には女性器表現が腰の磨り消し縄紋にとりこまれて施されている。また、晩期後半の土偶に特徴的に現れる後頭部文様に取り込まれた一対の穿孔があることが、江坂氏が示した写真（江坂前掲）や磯前順一氏による土偶の文様帯を解説する写真（磯前 1994）に示されている。

杉沢例について紹介した野口氏は、「群馬県郷原、山形県杉沢、宮城県里浜貝塚、福島県大沼郡三島



第5図 山形県遊佐町杉沢遺跡土偶と埋納状態

第6図 千葉県成田市  
荒海貝塚C地点出土土偶

町檜原（晩期）、神奈川県足柄郡大井町中屋敷（弥生）など比較的完全にちかいのであるが、わずかの欠損が認められ」（野口 1965）と土坑を含め遺構に伴って出土する土偶のすべてが破壊されている点に注目した<sup>(註1)</sup>。そして、そこから土偶の故意破壊説を導くのであるが、あたかも遺体を埋葬するかの如くに石囲いの土坑内に納められた土偶がその右頭部を欠損している点は、杉沢台遺跡の土偶とも共通する。なお、大洞C2式期の女性性を強調した性器表現のある土偶は、秋田県内においても横手市平鹿遺跡<sup>(註2)</sup>や秋田市地方遺跡<sup>(註3)</sup>で確認されている。

#### 千葉県成田市荒海貝塚C地点

西村正衛氏によって調査された第3次調査によって、C地点貝塚に入れられたAトレンチから第6図に示した土偶が出土している。Aトレンチの斜面上方から2mずつ区切られた区画のうち上から2番目にあたる2区の褐色土層から、「網状撚糸文を胴腹に施した大洞C2式比定の大形土器片と同式に属する土偶が相接して横たわり、さらにすこし斜面を下がった箇所幼児の頭蓋骨が顔面を東方に向け横臥し、その近くからわずかに他の体の骨とシカ、イノシシの獣骨が土中につき刺さったかたちで発見された。一中略一前記土偶の出土した場所に径35cmのピットが見付つかり、そのなかから前浦式と大洞C2式土器各1片と無文土器の破片がとり出された」と報告されている。また、土偶自体については「破損の箇所もあるが、顔面、手や胴部の状態は、あきらかに認められ、かつ全体にベンガラが塗布されていた痕跡を所々に留めている。顔面の様相、胸から腹部にかかるV字状の隆起線文、および後頭部と腰部の施文手法から大洞C2式に伴う」と型式比定された（西村 1984）。

筆者の一人である小林もこの荒海貝塚C地点出土土偶について顔面輪郭や眼の特徴には、関東地方晩期の木菟形土偶の面影を残しながらも、肩部や腰部の文様は南東北の大洞C2式に近いと紹介したことがある（小林 2000）が、土偶とその出土状況を引いて日本列島の晩期終末社会を論じた鈴木正博氏は、土偶と共伴した「大形土器片」を東北地方南部の大洞C2式の新段階に比定した上で、大洞C2式古段階に並行する安行d式で終わる安行式文化を脱した後の所産、すなわち、「祭式土偶」である木菟形土偶とは異なった性格、「葬式土偶」としての性格を帯びたものとした。その上で、幼児骨と共伴した出土状態を「祭式を中心とした土偶から葬式に参画する土偶への変質であり、極めて特定の幼児に対して副葬された可能性が高い」と評価した（鈴木 1993）。

#### 4 土偶の形態上の特徴

前項にあげた杉沢遺跡の埋納土偶を紹介した江坂輝弥氏は、併せて東北地方の晩期土偶を第一類から第六類に分けて論じた。このうち、杉沢遺跡の土偶は第四類にあたり、その特徴を①土偶の小型化（高さ20cm未満）、②眼の表現の矮小化、③②に伴う顔面全体の小形化、④体部文様の大洞C2式土器との共通性、⑤頭頂開口部が閉じたことによる内部空洞の封鎖、⑥結髪を示す左右に開く角状突起、として示し、杉沢遺跡土偶の他、岩手県大洞貝塚土偶、青森県床冨遺跡土偶、同県亀ヶ岡遺跡土偶（胴部以下半身）、宮城県鍛冶屋敷遺跡土偶を例示した（江坂 1960）。

また東北地方から北海道の大洞C2式の土偶を集成し、「安堵屋敷 a, b 形態」「杉沢形態」「東裏形態」「釜淵形態」「今津形態」等と指標となる遺跡名を冠して、その空間分布、変遷を明らかにした金子昭彦氏は、140点が報告された安堵屋敷遺跡の土偶の顔面表現の変化を古～新の三段階に分けて説明した。a 鼻位置が次第に眼よりも上に上がること、b 新段階で口は粘土紐貼付・沈線描画に明確に表現されるこ

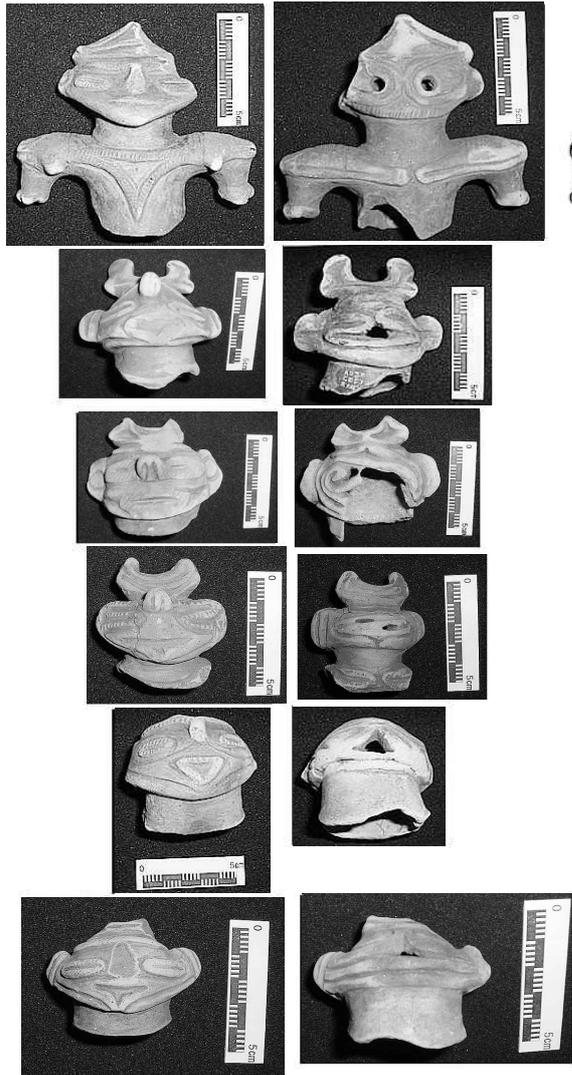
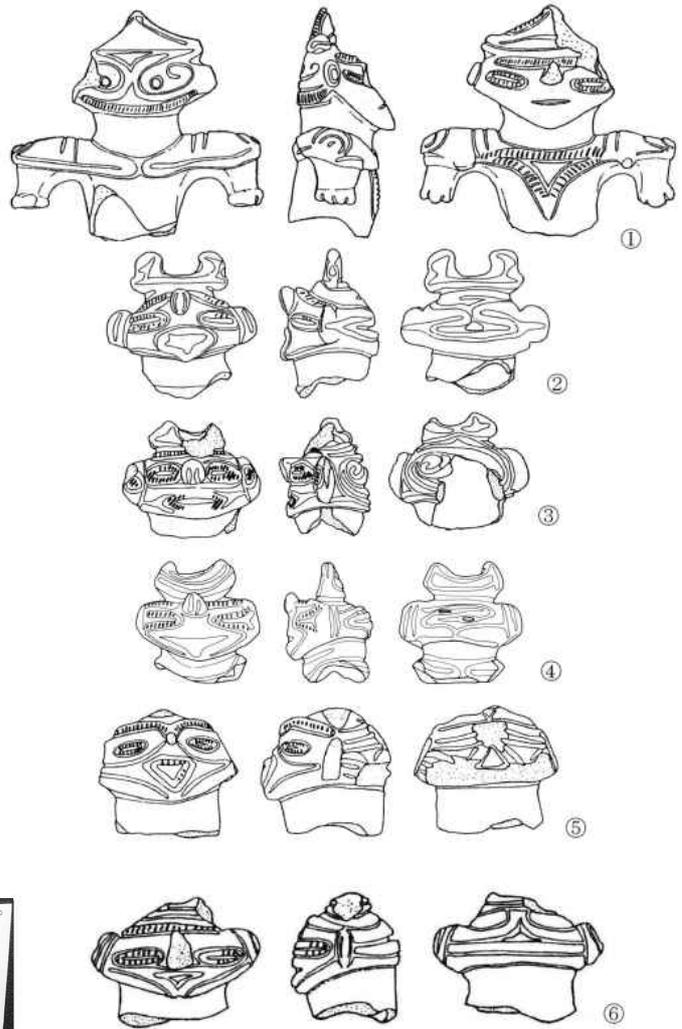
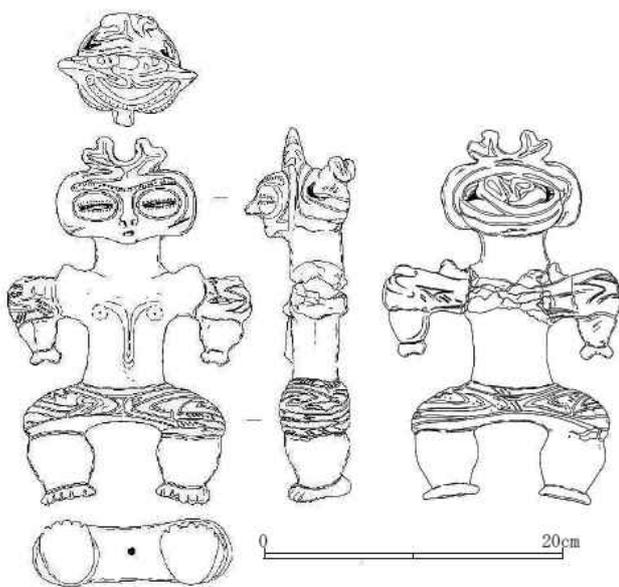


写真4 安堵屋敷遺跡の土偶  
(小林撮影)



第7図 安堵屋敷遺跡の土偶  
(岩手埋文1984『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』より)



第8図 二枚橋(2)遺跡の土偶  
(大畑町教委2001『二枚橋(2)遺跡発掘調査報告書』より)



南郷村荒谷遺跡

名川町平遺跡

写真5 青森県内の大洞C<sub>2</sub>式土偶  
(鈴木克彦1978『青森県の土偶』より)

と、c 同じく新段階で口周囲に対向三叉文あるいは三角形区画の沈線等を配すること、d 耳位置には新段階で縦沈線が入られること、がその変化である。また、後頭部の文様については、e 晩期前半土偶（「亀ヶ岡形態」）の王冠状表現から変化する1～2の貫通孔、f いずれ工字文に変化する渦巻状沈線文の2つがあることを指摘した。そして、この安堵屋敷遺跡の土偶のうち、全身が分かるものについて杉沢遺跡土偶との共通性を認め（「杉沢形態」）、その晩期土偶全体の流れのなかでの特徴を、g 体部文様の肩部・腰部への分化と胴部の無紋化、と指摘した（金子 1993）。

さらに藤沼邦彦氏は、晩期前半の遮光器土偶後の土偶について、ア遮光器状の眼から小さな眼への変化、イ横長の顔面輪郭と頭頂部の一対の角状突起、ウ腕の小形化と逆に両脚が広がること、エ両肩からへそにかけての三角形状の隆帯、オ隆帯上ないしその両脇に表現された小さな乳房、カ両肩・腰・後頭部に集中する沈線文・渦巻文、とその特徴をまとめた（藤沼 1997）。

杉沢台遺跡で出土した土偶は、前々項で記したように遮光器土偶の形態に類似した中空土偶であり（江坂氏指摘の⑤）、後頭部に穿孔があり（金子氏指摘のe）、文様は腰回りと腕（肩）部に沈線で描かれ（金子氏指摘のg、藤沼氏指摘のカ）、体部正面にV字状を呈する隆帯があり（藤沼氏指摘のエ）、隆帯上に小さな乳房がある（藤沼氏指摘のオ）、という特徴がある。さらに顔面ないし頭部では、細い隆帯で表現された小さな眼（江坂氏指摘の②、藤沼氏指摘のア）、眼と同じかやや高い位置に付けられた鼻（金子氏指摘のa）、隆線で表現された口（金子氏指摘のb）の両脇に沈線による対向三角形文が描かれ（金子氏指摘のc）、耳の部分に前面1条、後面2条の縦沈線がある（金子氏指摘のd）。以上のことから、江坂氏分類の「第四類土偶」あるいは金子氏の「安堵屋敷形態」「杉沢形態」として大洞C2式の特徴を表すものと言える。

ところで、晩期前半の大形中空土偶の典型例が東北北部に限定されるのに対し、この大洞C2式に伴う土偶については、金子氏が「杉沢形態」の段階では精緻な作りで中心地域のもものと区別しがたいものもある」と指摘し、藤沼氏も「遮光器土偶とちがって、東北地方各地に分布し出土数も多い」と述べている。写真4、第7図には金子氏も分類に用いた安堵屋敷遺跡土偶を、写真5には青森県南部の太平洋側の二例を示した。安堵屋敷遺跡例には若干の変異が認められるが、全体として両者ともに杉沢遺跡土偶との共通性が高い。とくに青森県内の二例は頭部・顔面などにおいて杉沢遺跡土偶にきわめて近いと言える。これらはいずれも器壁が数mm程度の中空土偶である。

第8図には青森県下北半島二枚橋遺跡の土偶を示した。文様が肩、腰、後頭部に限定される点、体部正面にV字形隆帯がある点、さらに頭頂部にはっきりとした一対の角状突起が表される点、また、後頭部に描かれた相互に入り組む沈線文末端に一対の三叉状の穿孔が開けられる点も、同じく大洞C2式の土偶であることを示している。しかし、全身に対し顔面頭部が大きいこと、鼻位置が口と目の中間にあることなどに異なる点が認められる。また、後頭部の一対の穿孔、股間の穿孔が胴体を貫通してつながる点は中空であることを示すが、胴体の粘土は厚く数mmの器壁の杉沢遺跡土偶やその類例とは明らかに製作法で異なる。本例は杉沢台遺跡例と同じようにやはり棒状の芯をもって形づくった土偶と判断される。

杉沢台遺跡土偶の場合も首から下の胴体、手足に対し、顔面頭部が異様に大きく、そのため全体として杉沢遺跡の土偶とは趣のかなり異なったものとなっている。そして、さらにその違いを際立たせているのが、杉沢遺跡、安堵屋敷遺跡などの後頭部文様に取り込まれた貫通孔とは明らかに異なって、無紋地に傷付けられたかの如く、星形に押し開けられた穿孔である。写真5、第7図には安堵屋敷遺跡土偶

の後頭部の状況を示したが、双頭渦文の中に一对の円形孔の収まるもの（①）、入り組んだ双頭渦文に渦に沿った形の一对の穿孔が施されるもの（③）、工字文状に入り組んだ沈線文の上下二段に一对の扁平孔が穿たれるもの（④）、工字文の沈線が集まる後頭部中央に三叉状の単孔が開けられるもの（②、⑤、⑥）など、いずれも他の文様と組み合せて開けられた穿孔である。また、いずれの頭部も厚さ数ミリの薄い粘土板を繋ぎ合わせて成型された中空の頭部であるが、③の破損状況から見て成型時の継ぎ目に穿孔を施す、あるいはあらかじめ穿孔位置を決めた上で粘土板を繋ぎ合わせている。したがって、穿孔は製作過程に組み込まれた工程である。しかし、杉沢台遺跡土偶の穿孔は分厚い粘土板を顔面側と後頭部側二枚合わせ完全に密封した上で、焼成前に斜め上からへら状の工具で開けられる。その際数回の工具の押し当てが、結果星形の形状に開いたもので頭部空洞の断面には押し出された粘土がまくれ出ている様子を見てとれる（写真3）。頭部は中空であるため完全にふさがれた状態で焼成することは無理であり、当然、穿孔を必要としたであろうが、他例が土器の透かし文のように後頭部の文様の一部として孔が開けられるのに対し、杉沢台遺跡例は穿孔後の調整すら施されることがない。すなわち、少なくとも焼成前の形として一旦完成された土偶に対し別に加えられた孔であり、人体をモデルとした粘土造形の最後に施された変形である。

## 5 土偶埋納・後頭部穿孔のもつ意味

杉沢台遺跡の土偶の土坑内での出土状態は、埋めるにあたりあらかじめ外した頭部の位置を置き換えるという特異なものである。そして、その際、胴体は仰向けのまま、後頭部の穿孔部位が上面を向くよう顔面はうつぶせの状態としている。土偶に施された穿孔自体も前項に記したようにきわめて特異な開け方であるが、埋納にあたっての頭部切断ないし取り外しと、その位置の置き換えという行為は、土偶にこの特異な頭部穿孔を施したことを埋納時に再び強調する意識が働いた結果と解釈されるのではないか。土偶頭部を取り外さずに全身を仰向けで埋納しては、まるで印のように故意に施した穿孔が隠されてしまう。ほぼ完全な全身を故意に壊し、人体モデルにとって重要な要素である顔面を下にしてまで後頭部穿孔を坑口側に向けることには、土偶埋納という儀礼に参加した全員が土坑の埋め戻される瞬間まで続いた共通した意識の中に、明らかに穿孔されていることを認めなければならない必然があったことを示している。そして、この意識は杉沢台遺跡と同じ能代市の縄紋時代晩期の墓地遺跡で発見されていた人骨にも同様に確認される。

### 柏子所貝塚埋葬人骨の頭蓋穿孔

杉沢台遺跡からは南に5 km、米代川河口部左岸の段丘上にあるこの遺跡は昭和30年～32年に能代市教育委員会、大和久震平氏によって発掘調査がなされ、8体の埋葬人骨が確認されている。墓域の構成を第9図に示す。遺体が身に着けた装身具があること、抜歯があることのほか、頭部にベンガラを塗布した例があり、そのなかの二体、成人男性とされた1号人骨と12～13才の性別不詳の4号人骨の頭部に穿孔が認められた。調査した大和久震平氏は「穿孔は4号が大きく、孔の形は1号が円く均整がとれている。孔の縁辺は顔料で保護されていたためか、真新しい状態を示し、石斧の先端ででも開孔したものの、鋭い割れ口を示して、骨の増殖は認められない。恐らく埋葬前に施したものであろう」と述べ（能代市教委・秋田県教育庁 1966）、また、この二体を含む計五体の頭部ベンガラ塗布の人骨と塗布のない人骨との対照性について「赤色人骨には赤色顔料が塗布してあるだけでなく、穿孔、服飾品、土器

随伴など、何か変わった事実がみられるに反し、顔料を施していない各人骨は単に埋葬されているに過ぎない」と記述した（秋田県 1977）。

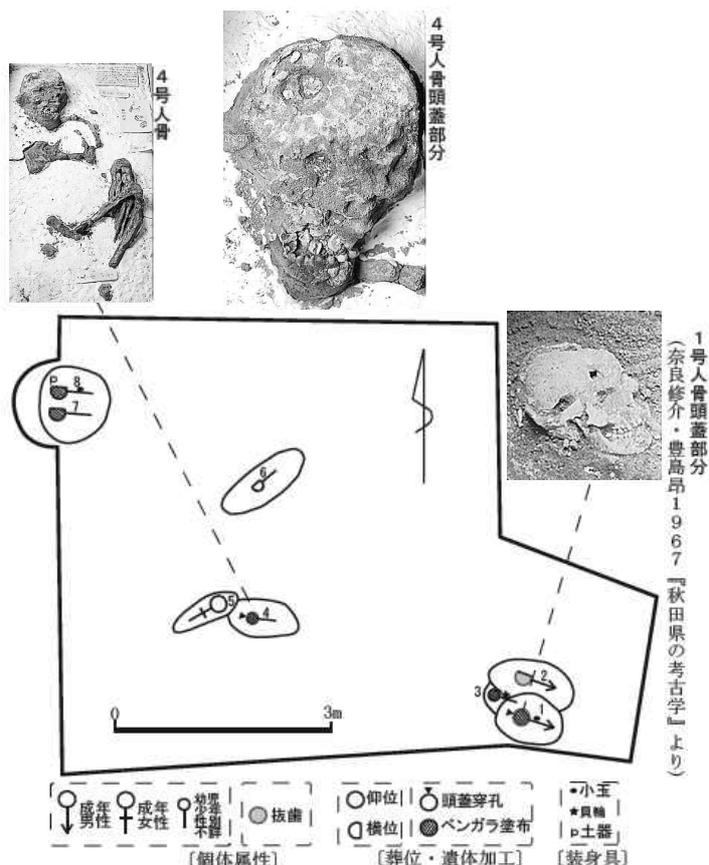
第1号人骨は鈴木尚氏の鑑定に供されたため、現在、能代市にはない。しかし、第4号人骨は遺跡から土ごと切り取られた状態で保管されている。既に調査後半世紀近く経過しており、発掘中の写真と比較すると頭蓋全体が潰れたようになっているが、孔の開けられた部分は明らかにそれを見てとれる。前額部に認められる孔はやはり骨の増殖はなく、死後に開けられたものであることが分かる。外側陥没部分の直径が4cmで、中にさらに一回り小さい径2cmほどの凹みがあって、したがって、完全に頭蓋内に開いた孔というよりは衝撃によって頭蓋内に陥没した痕跡と言った方が正しい。

しかし、大和久氏の推定、石斧の先端を用いたとの推定は、径2cmほどの凹みを直接先端があたった部分、外側の4cmほどを衝撃で落ち込んだものと見れば、十分に頷くことができる。インカやマヤの頭蓋穿孔のような剥片石器を用いての穿孔ではなく、石斧のような鈍器を打ち当てたことによる衝撃で開けられたことが改めて理解できる<sup>(註4)</sup>。

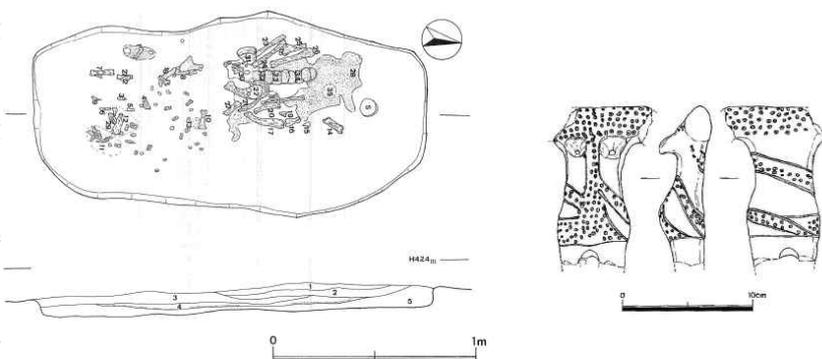
柏子所貝塚で発見された人骨のうち穿孔の行われているのは2体であり、すべての遺体に施された遺体変形ではない。大和久氏の人骨観察の記述は、埋葬人骨のその他の属性とも絡み、葬送において特別な扱いをうけた被葬者のあることを指摘しているが、頭蓋穿孔もそうした特別な扱いのひとつである。すなわち、葬送において被葬者の属した社会が複雑化した社会であることを指摘している訳であるが、柏子所貝塚のように複雑な社会の特定個人に対し明らかに特異な葬り方が行われた事例は、米代川流域の他の縄紋時代晩期墓地にも認められる。

藤株遺跡の首無し火葬骨と無頭土偶

米代川を上った北秋田市藤株遺跡では1980年の調査でSK05とされた土坑内から縄紋時代後期後葉～晩期の火葬骨が確認されている（秋田県教委1981、第10図左）。成年あるいは熟年の女性と推定されるこの火葬骨は、長径193cm、短径95cmの土坑内に焼土と灰、そ



第9図 柏子所貝塚墓地構成と頭蓋穿孔人骨  
 (能代市教育委員会・秋田県教育庁社会教育課1966『柏子所貝塚』より作成  
 4号人骨写真は小林・山崎・播摩撮影)



第10図 藤株遺跡SK05 火葬墓と首なし土偶  
 (秋田県教委 1981『藤株遺跡発掘調査報告書』より)

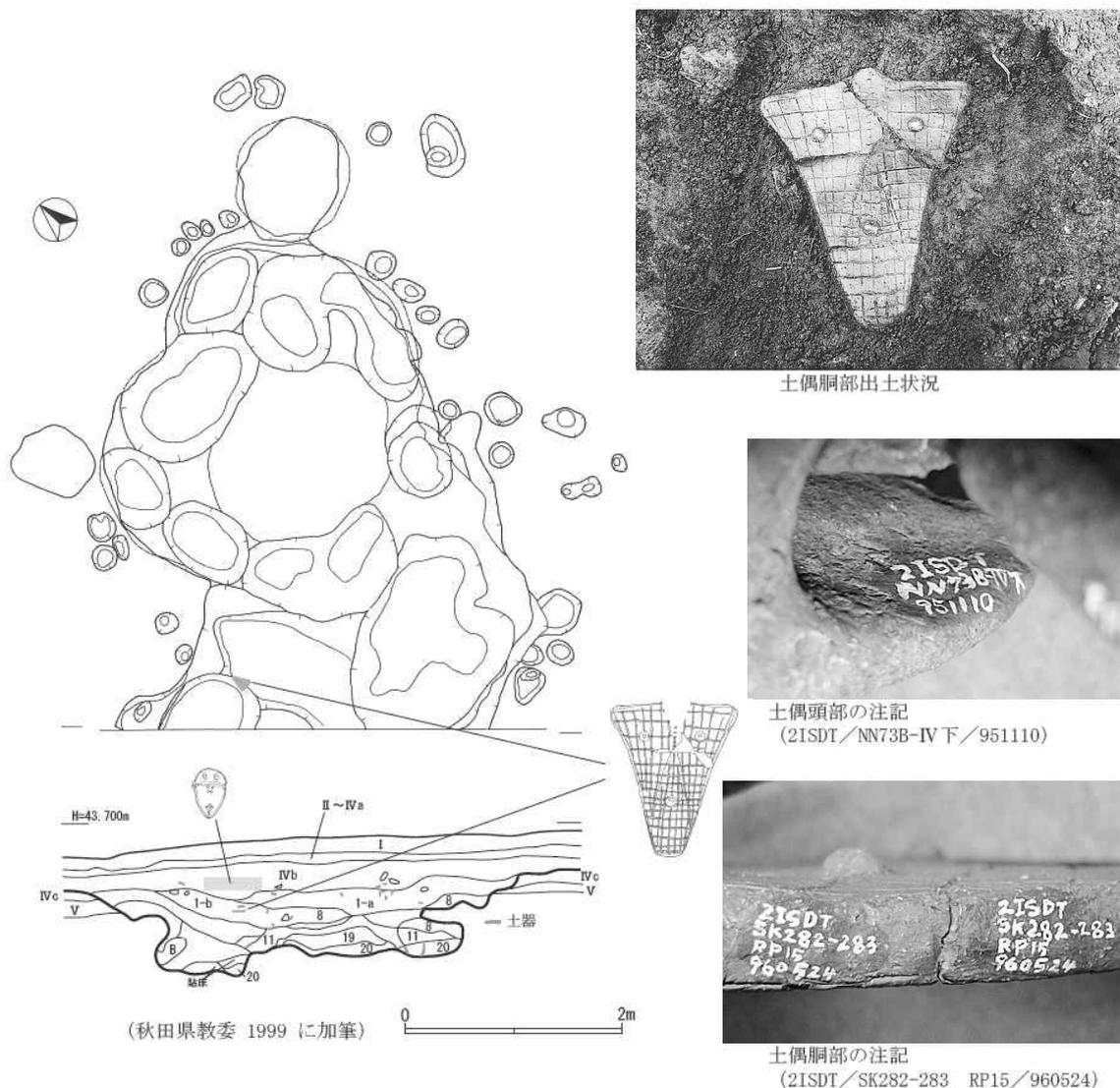
して木炭とに覆われて検出された。上半身を北北西に下半身を南南東にし、全身に火を受けて右上肢骨以外が小片、細片化した状態であったが、きわめて異様なことに土坑の北北西側にあるはずの歯骨および頭骨が破片としても確認されず、結局、他所で首を切り落とされた胴体及び四肢が土坑内で火葬されたと推定された（山口 1981）。

縄紋時代の火葬骨そのものは秋田県内においても後期の八木遺跡で確認されており、火葬という遺体処理法が既にこの時期に採られていたことが知られる（秋田県教委 1989）。しかし、火葬自体は遺体を骨化させる目的に行われる処理であって遺体そのものの変形であるとは言えず、それだけに頭部を除いて胴体のみが火葬されたこの藤株人骨の特異さが際だってくる。杉沢台遺跡の土坑内埋納の後頭部穿孔土偶、柏子所貝塚の頭蓋穿孔人骨から死者儀礼と土偶の特異な関係性を見たが、米代川流域の縄紋時代晚期社会が葬送の習俗において死者の頭部に異様にこだわっていたことは、藤株遺跡の首無し火葬骨と同じ調査で見つかった無頭土偶によっても示されている（第 10 図右）。

土偶は高さ 11.5cm で肩幅推定 8 cm の完全に近い形を残している。大きく隆起させ垂れ下がった乳房とそれと同じくらいに膨らんだ腹部をもち、体部に一段高く隆帯状に施された部分に円形竹管文が施される。両手、両足は欠損するが首は最初から作られていない。本来、首が繋がる位置で両肩を結ぶ線が上に曲がることなく全くの直線となったトルソー形の土偶である。土偶が人間の姿かたちをモデルとしながらも人間にはない特徴を強調することで、怪異性をもった神像としての性格を示したものであるとする渡辺仁氏は、藤株遺跡例を含めて全国で 11 例の無頭土偶を集めている。そして、「首無し」形土偶が人体象徴の一部である頭部を欠如させることによって、「ヒト形」でありながらもその怪異性をさらに強調したと説く（渡辺 1997）。また、東北地方の弥生期土偶について考察し、弥生期土偶の故意破壊例を積極的に認めようとする佐藤嘉広氏は、谷起島遺跡の無頭土偶 2 例について、特殊例としながらも頭部の故意破壊を製作上の意図に既に取り込んでいた例と見る（佐藤 1996）。藤株遺跡の無頭土偶もまた谷起島例同様の解釈をもって、土偶故意破壊の象徴的意味が込められていると見ることもできよう。しかし、さらには首無し火葬骨とともに見つかったことにより、一方で渡辺氏の説くような頭部欠失の怪異性は、葬送それ自体の怪異性となって出現している。

#### 伊勢堂岱遺跡の頭部切断土偶の埋納

藤株遺跡と同じ北秋田市には後期前葉の環状列石で知られる伊勢堂岱遺跡がある。伊勢堂岱遺跡や大湯環状列石など米代川流域の大規模な環状列石は後期前葉の共同墓地と評価されているが、伊勢堂岱遺跡には環状列石が作られる以前にも墓域とされたであろうことを示す特異な土坑がある。第 11 図は伊勢堂岱遺跡の環状列石 A の西側で見つかった土坑 SK282 とその中に収められていた板状土偶の出土状態を示したものである。土坑は北東—南西に 5.7m、直交しての北西—南東に 3 m ほどの範囲に確認され、中心部では径 3 m の円内に長軸 0.7~1.5m、最も深いもので地山面から 0.6m ほどの深さの楕円形土坑が 9 基環状に連なっている。図に示すように板状土偶はこの土坑の南西側、調査区際に重なる部分に上記とは別の土坑内で見つかったものである。図に示されるように調査区際に半分ほどあらわれた楕円形土坑の長軸東端部において、頭部は 1995 年の調査で土坑と確認される以前の上部包含層 IV 層下部から（顔面裏側の注記：2ISDT/NN73B-IV 下/951110）、胴部は翌 1996 年にそれより 20cm ほど下の土坑内埋土から（胴部側面の注記：2ISDT/SK282-283RP15/960524）出土した（五十嵐 2002）。調査区際の断面図で確認すると頭部の出土した IV 層下部の位置は本来土坑の掘り込み面よりもわずかに下であり、



第11図 伊勢堂岱遺跡SK282土坑内 土偶出土状況

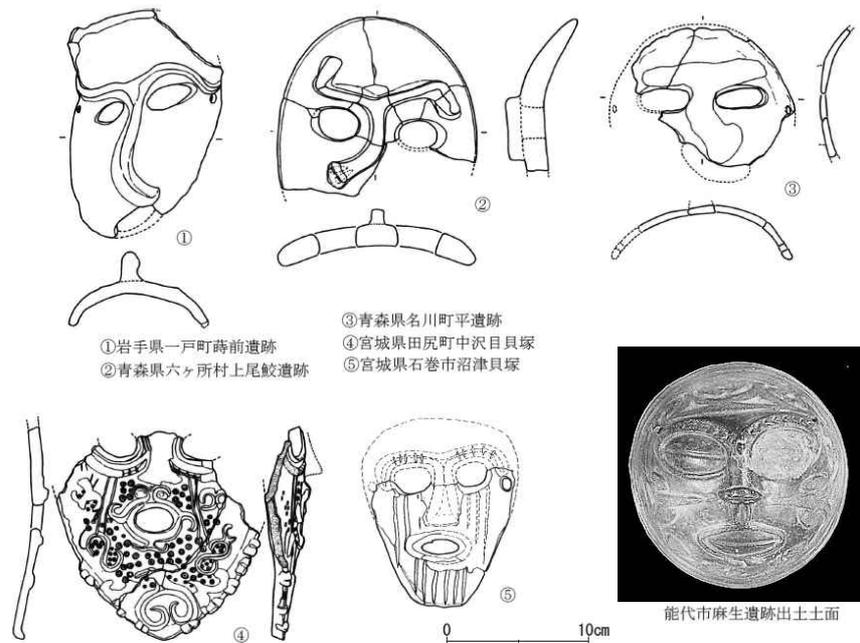
同じ土坑の埋め戻しに際して、頭部を切り離れた胴体部分のみが埋納され、次いで、頭部がほぼ同じ平面位置で埋納されたことを示している。すなわち、土坑の埋め戻しにあたり土偶の故意の破壊が行われ、それが時間的な隔たりをもって埋め置かれたことになる。なお、伊勢堂岱遺跡では本例の他にも土坑内から大形の板状土偶の胴体部分が破壊された状態で出土した例（報告書 SK135・SK282 出土土偶、第212図2）がある。

環状列石に伴う土坑には単独の土坑内に遺体を直葬した例ほか、再葬との関わりで考えられる上記のような土坑がいくつか知られる（小林 2007）。土偶の破壊が再葬に関係するかどうかはさらに検討を要するが、再葬という複数の段階を経て行われる葬送に際し、土偶の破壊、特にSK282例の場合には藤株遺跡と同じような、頭部への強い執着があったことが確認できる。なお、290点ほどの多量の土偶を出土したことで著名な岩手県花巻市立石遺跡はほぼ伊勢堂岱遺跡など同時期の後期前葉の遺跡であるが、この遺跡においても方形に組まれた石組の隅から土偶頭部のみが出土している（大迫町教委 1979）。

壊された土面・麻生遺跡出土土面

東北地方晩期社会、とくにその前半期を特徴づける遺物の一つに土製の仮面がある。各地に特有の様式があり、日本海側では遮光器土偶と同様の眼をもった「遮光型土面」が、太平洋側北部では眼および

口に大きく穴をあけ、鼻を屈曲させた「鼻曲がり型土面」が、さらに太平洋側南部では眼から両頬にかけて数条の沈線をあたかも涙を流す表情の如くに描いた「流涙型土面」が分布する。こうした土製仮面は何かの儀式に際し用いられたと考えられているが、うち「鼻曲がり型土面」「流涙型土面」はほぼ例外なく顔面の一部が欠損している。「鼻曲がり型土面」では口から下顎部にかけて、「流涙型土面」においては前額部ないし下顎部である。こうした土製仮面の破壊の意味は何か？杉沢台遺跡と同じ米代川下流域にも著名な土面がある。



第12図 壊された「鼻曲がり型土面」「流涙型土面」と麻生遺跡出土土面

杉沢台遺跡から米代川を約25km上った左岸には同じ晩期の麻生遺跡があり、亀ヶ岡文化の呪物として著名な土面によって知られている。直径14.7cmの浅く湾曲するこの土面は晩期中葉を示す雲形文が描かれ、大洞C1式の特徴をよく表している。額両側に紐を通したと思われる耳孔があるものの、その大きさおよび湾曲の程度からは着装する人物の顔面前面を覆った「被り仮面」ではなく、壁や木柱に付ける「飾り仮面」あるいは着装するとしても間接的な「当て仮面」であろうと推測されている（磯前1994）。ところで、この仮面に表現された左眼は大きく剥落し、中央に横一線で伸びる遮光器状のスリット線痕跡がわずかに残されているのみである。そして、そこから連続するB突起の付された鼻の高まりにもヒビが走る。この左眼の欠損について、磯前順一氏は「偶然の剥離が想定しにくい部位のため、意図的な破壊のおこなわれた可能性もある。もしそうであれば、鼻梁を斜めに走るヒビも、そのさいの衝撃で生じたのかもしれない」（磯前2007）として、人為的な左眼剥除の可能性を述べている。

縄紋時代晩期の仮面は、「被り仮面」としても岩手県一戸町蒔前遺跡の鼻曲がりの土面や宮城県中沢目貝塚の繁縷な刺突列点で顔面を飾った土面など、人面からは遠く異様さを強調するものが多い。無論、その異様さは日常のものではなく、儀礼に際しての非日常性を強調したものである。そしてこの麻生土面にみるような部分剥除という行為によってさらに怪異性が高められたとすれば、その行為自体は土製のヒト形、土偶を形代とする人体変形同様の、土面を媒介しての人面変形の行為に他ならない。

以上、米代川流域のほぼ同時代の遺跡、柏子所貝塚、藤株遺跡、麻生遺跡の例と後期前葉の伊勢堂岱遺跡の例を通して、杉沢台遺跡の土坑埋納土偶の意味を考えてきた。人生の通過儀礼の最終点である葬送に関わり、杉沢台遺跡の土偶に見られるような人体、すなわち死者の遺体変形のメタファーとして施朱や後頭部の穿孔、頭部の脱着が見られるとすれば、それは、儀礼をとりおこなった者たちが異界に棲むべき者—祖霊神—として、死者に施したのと同じ印を与えたことを意味する。

## おわりに

土偶の土坑内埋納について、土肥孝氏は縄紋時代中期の中部地方、ハヶ岳山麓での棚畑遺跡、中ッ原遺跡、あるいは北海道江別の大麻3遺跡例などを引き、葬送観念との強い関わりで評価している（土肥2006）。その中で、性器表現によって明示される女性性、仮面によって日常性を覆い隠した怪異性を備えた中ッ原遺跡の土偶は、被葬者たる人（女と対となる男）とシンボル化された女神との合葬例であるとする。死後における人間と怪異的な超存在との合体が墓に表現されている、と解釈する訳である。そして、こうした特異な観念のもとに葬られた被葬者の存在は非平等な社会の反映であると結論する。

杉沢台遺跡の埋納土偶が属する晩期後半、大洞C2式期は、前述したように山形県遊佐町杉沢遺跡をはじめとし性器表現によって女性性を強調した土偶が見られる時期である。こうした女性性の強調が見られる時期に登場した杉沢台遺跡の土坑内埋納土偶の後頭部には、ほぼ同時期、同地域に存在した柏子所貝塚の頭部穿孔人骨に通じる特異な穿孔が認められた。そして、その穿孔部を強調するように埋納に際し故意の破壊、頭部を反転させる脱着が行われていた。杉沢台遺跡においては女性性の強調はなされずとも、一方の非日常性、怪異性は埋葬にともなってさらに強調されていたというべきであろう。

北方ユーラシア諸民族に伝わるヒト形神像の存在から、渡辺仁氏は縄紋時代土偶を「家神」として言い表した（渡辺前掲）。こうした言明は土偶の土坑埋納例が後期後葉をあたりから北海道内を中心に増える事実と符合する。そして、それは縄紋時代の葬送観念に密接に関わるものであれば、まさに「家神」としての祖先祭祀に関わるものであろう。杉沢台遺跡の土坑埋納土偶はそうした意味で北東北の一地域である米代川流域の後晩期社会もまた、広い北方世界に含み込まれることを教えている。おそらくは広汎な世界に連なって、この社会の観念や習俗も存在したことであろう。

発掘調査で呪術や儀礼に関係するであろうと推測される事象は、個々には理解不能な行為痕跡の断片としてしか映らず、単独でその存在理由を合理的に説明できることはほとんどない。しかし、それらを組み合わせることで、その配列がなんらかの意味あるものに見えることがある。土坑内に埋納され、頭部に特異な穿孔が施された杉沢台遺跡の土偶についてその調査の事実を改めて記述するとともに、秋田県北部の米代川中下流域の縄紋時代晩期の死者儀礼に絡んだ、呪術的側面を解釈してみた。

本稿を草するにあたり、以下の方々のご教示を得ました。記して謝意申し上げます。

山崎和夫、金子昭彦、小林圭一、五十嵐一治、高田一徳、小笠原雅行、中村良幸、新海和広

## 【註】

- 1 晩期前半の破壊された土偶が石囲い内で出土した例は里浜貝塚のほか岩手県雨滝遺跡にもある（江坂1960）。また、近年の確認例として以下に図示されている。  
秋田県教育委員会 2003 『向様田A遺跡 遺物編』（第42図a 2号捨て場（S T184）土偶出土状況）
- 2 秋田県教育委員会 1983 『平鹿遺跡』秋田県文化財調査報告書第101集 第171図278の土偶
- 3 秋田市教育委員会 1987 「地方遺跡」『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』第171図 110の土偶
- 4 渡辺誠氏は鈴木尚氏による愛知県保美貝塚の頭部穿孔人骨所見を引用し、縄紋時代の「シャーマン殺し」のモチーフを狩猟紋土器、独鈷石の出土状況から想定している。

## 【引用参考文献】

江坂輝弥・酒井忠純 1954 「山形県飽海郡遊佐町杉沢発見の大洞C2式の土偶出土状態について」『考古学雑誌』39-3

- 江坂輝弥 1960『土偶』校倉書房野口義麿 1964「土偶」『原始美術 2 土偶・装身具』  
野口義麿 1965「5 信仰」『日本の考古学Ⅱ』河出書房新社  
秋田県教育庁社会教育課・能代市教育委員会 1966『柏子所貝塚』  
奈良修介・豊島昂 1967『秋田県の考古学』吉川弘文館  
鈴木克彦 1978『青森県の土偶』  
大迫町教育委員会 1979『立石遺跡』  
永瀬福男 1987「古環境の復元」『能代山本地方史研究』第4号  
秋田県教育委員会 1981『藤株遺跡』  
山口 敏 1981「第3節 藤株遺跡 SK05 出土の人骨」『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会  
秋田県教育委員会 1981『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第83集  
永瀬福男 1982「能代市杉沢野遺跡採集の弥生式土器について」『能代山本地方史研究』創刊号  
西村正衛 1984「千葉県成田市荒海貝塚C地点（第3次調査）」『石器時代における利根川下流域の研究』  
吉田敦彦 1986『縄文土偶の神話学 殺害と再生のアーケオロジー』名著出版会  
中村良幸 1989「根室市初田牛 20 遺跡出土の土偶」『初田牛 20 遺跡発掘調査報告書』根室市教育委員会  
秋田県教育委員会 1989『八木遺跡発掘調査報告書』  
秋田県教育委員会 1992『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—家ノ後遺跡—』  
秋田県文化財調査報告書第229集  
金子昭彦 1993「大洞 C2 式の土偶」『古代』95号  
鈴木正博 1993「荒海貝塚文化の原風土」『古代』95号  
磯前順一 1994「付論一 中空遮光器土偶の変遷をめぐる覚書」『土偶と仮面・縄文社会の宗教構造』校倉書房  
佐藤嘉広 1996「東北地方の弥生土偶」『考古学雑誌』第81巻 第2号  
設楽博己 1996「副葬される土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集  
渡辺 仁 1997「縄文土偶と女神信仰-民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究（Ⅰ）-」『国立民族学博物館  
研究報告』第22巻4号  
中村 大 1998「亀ヶ岡文化における葬制の基礎的研究(1)—東北部の土壌墓について—」『國學院大學考古学資料館紀  
要』第14輯  
北海道考古学情報交換会・第20回記念シンポジウム実行委員会 1999『第20回記念シンポジウム発表要旨—北日本に  
おける縄文時代の墓制—』  
秋田県教育委員会 1999『伊勢堂岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第293集  
小林 克 2000「図版解説 千葉県, 荒海貝塚出土の土偶」『古代』108号  
金子昭彦 2001『遮光器土偶と縄文社会』同成社  
大畑町教育委員会 2001『二枚橋(2) 遺跡発掘調査報告書』大畑町文化財報告書第12集  
日本考古学協会 2001年度盛岡大会研究発表資料集『亀ヶ岡文化—集落とその実体—』晚期遺物集成Ⅰ・Ⅱ  
須藤 隆 2002「涙を流す土面・鼻曲がり土面」『Ominivids』No5  
五十嵐一治 2002「百聞如一見-伊勢堂岱遺跡の遺構(1)-」『研究紀要』16  
渡辺誠 2003「独鈷状石器の装着法」『史峰』31  
秋田県教育委員会 2003『向様田A遺跡 遺構編—森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ—』  
秋田県文化財調査報告書第346集  
土肥 孝 2006「縄文時代の葬送儀礼—縄文中期以降の土偶を伴う葬送儀礼—」  
御所野縄文博物館 2006『仮面展図録』  
能代市教育委員会 2006『杉沢台遺跡—農業用設備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』能代市埋蔵文化財調査報告  
書第17集  
小林 克 2007「環状列石(東北・北海道地方)」『縄文時代の考古学 11 心と信仰—宗教的観念と社会秩序—』同成社  
磯前順一 2007「土面」『東京大学総合研究資料館ホームページ』

## 中近世秋田における礫石経塚（2）

### －検討遺跡の集成－

今野沙貴子\*

筆者は前回、現在秋田県で把握されている中近世礫石経塚の地域的・時間的な様相を検討する機会を与えて頂いたが、前稿では検討に用いた個々の礫石経塚について遺跡名・所在市町村名といった大雑把な情報しか示すことができなかつた（今野 2007）。本稿では、それらの遺跡に関するより詳細なデータを公開することを目的としたい。本稿が、秋田県における民間信仰遺跡研究の一助になれば幸いである。

#### 【凡例】

- ① 本稿の集成は、国立歴史民俗博物館『経塚データベース』作成のため、平成 15 年度にまとめられた資料が基となっている。
- ② 今回紹介する事例の中には、筆者が未だ実見していないものも含まれており、そのような例については情報不足な点も否めない。ご了承願いたい。
- ③ 遺跡の種別は、1 を礫石経塚、2 を廻国納経塔とする。前稿の「表 3 礫石経塚一覧」を基に作成してあるが（今野 2007）、一部訂正した部分もある（注 1）。
- ④ 遺跡の現況欄には、現存するものには現在の形態を、既に消滅しているものにはかつて確認されていた形態を記した。形態に関する情報が残っていない、あるいは把握していない事例は「不明」とした。記号の詳細は、以下の通りである。
  - A 土抗などの地下施設に礫石経を埋納後、地上標識として経碑を建立してある。
  - B 土抗などの地下施設に礫石経を埋納後、地上標識としてマウンドを築造してある。
  - C 土抗などの地下施設に礫石経を埋納後、地上標識としてマウンドを築造し、その上に経碑を建立してある。
  - D 土抗などの地下施設に礫石経を埋納しているが、マウンドや経碑などの地上標識が特に見られない。
  - E 建物の床下に礫石経を埋納する、あるいは敷きつめてある。
  - F 礫石経を埋納せず、それ自体を積み上げたり、まいたりしている。
  - G 礫石経埋納を主たる目的としていない。

さらに、経碑をもつ A・C に関しては、経碑の形態で以下のように細分した。

a, 石仏・宝塔 b, 角柱型石碑 c, 自然石 d, 小規模な祠など、石碑・石塔以外のもの。

（注 1）「北-19 寺の沢経塚」を、廻国納経塔に訂正した。また、前稿では「南-36 明沢経塚」のみ中世の造営と記したが、造営が中世にまでさかのぼる事例としては、他にも「中-20 丁刃森経塚」「中-34 新山経塚」「南-12~15 貝沢拾三本塚 9~12 号墳」などが見られる。しかし、貝沢拾三本塚は礫石経埋納を主たる目的としていない事例であり、丁刃森経塚・新山経塚にもあらゆる可能性が考えられる。確実に中世の造営であり、礫石経の埋納を目的としてつくられているのは、現状では明沢経塚のみである。説明を追加して、訂正したい。

※前秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員（現在：（財）福島県文化振興事業団遺跡調査部嘱託）

(1) 県北地区

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
北-1	石野経塚	鹿角市十和田瀬田石字白根	1	不明			マウンドをもっていたと考えられるが、調査時にはその大部分は消滅していた。礫石経が出土している。	1
北-2	小真木の山神社経塚	鹿角市十和田瀬田石字白根	1	不明			白根金山の跡。経碑らしいものはないが、礫石経が出土していると言われる。	2
北-3	高清水経塚	鹿角市十和田山根字高清水	1	不明			礫石経が出土している。	3
北-4	柏野経塚	鹿角市十和田毛馬内字柏野	1	A-c	正徳5(1715)	「奉納大乘妙典一字一石 奉写部冊四部 其一於此安置」	山本家墓地に所在。建立の関係者については、「経塚幹縁 山本九一郎 兵衛一林謹記 化主接待 宗碩七十一歳 書於八戸県」とある。	4
北-5	仁叟寺経塚1号	鹿角市十和田毛馬内字番屋平	1	A-b	天保3(1832)	「三界万霊塔」	来満街道沿い、曹洞宗・凱翁山仁叟寺への参道入口に所在。碑側面に「大乘妙典経・・・」「石字一石・・・」の銘がある。仁叟寺17世「旭嶺和尚」の建立。	5
北-6	仁叟寺経塚2号	鹿角市十和田毛馬内字番屋平	1	A-c	宝暦7(1757)	「奉書写大乘妙典一字一石供養塔」	来満街道沿い、曹洞宗・凱翁山仁叟寺への参道入口に、1号と並んで所在。仁叟寺の隠居「覚秀」が願主。	5
北-7	中野墓地経塚	鹿角市十和田毛馬内字三ノ丸	2	A-c	明和3(1766)	「奉納大乘妙典 日本廻国六十六部供養塔」	中野集落の墓地入口に所在。願主は中野の「祐遷」。	2
北-8	本光院経塚	鹿角市十和田毛馬内	1	不明			本光院境内に所在。御祖師碑の近くで、礫石経を拾うことができる。柏野経塚の経碑に「奉写部冊四部 其一於此安置」とあるが、この「四部」の一つが本経塚。	2
北-9	長年寺経塚1	鹿角市花輪字上花輪	2	A-c	明和4(1767)	「納経回国納経供養塔」	「鹿角郡花輪町 与一」が願主。	2
北-10	長年寺経塚2	鹿角市花輪字上花輪	1	A		「奉納大乘妙典一字一石供養塔」	建立関係者については、「願主沙門□□」「石工□□□」とある。	2
北-11	長福寺経塚	鹿角市花輪字下花輪	1+2	A	明和(1764-71)	「奉納大乘妙典一字一石 日本廻国六十六部供養塔」	曹洞宗・長福寺山門を入ったすぐ左に所在。願主は浅利孫五郎門。	2
北-12	隆昌寺経塚1	鹿角市花輪字八幡館	1	A	宝暦12(1762)	「奉書写大乘妙典一字一石供養」	願主「巨峯」。	2
北-13	隆昌寺経塚2	鹿角市花輪字八幡館	2	A	宝暦14(1764)	「日本廻国六十六部供養塔」	曹洞宗・隆昌寺山門の外に所在。	2
北-14	隆昌寺経塚3	鹿角市花輪字八幡館	1	不明	宝暦(1751-63)		礫石経と供に出土した蓋石に、宝暦の餓死者のために経塚をつくったことが記されていた。	2
北-15	下夕町経塚	鹿角市花輪字下夕町	2	A	宝暦11(1761)	「奉納大乘妙典日本廻・・・」	庚申塔と供に、集落のはずれに所在。福土川の土手。「永井仁兵・・・」が願主。	2
北-16	柴内経塚	鹿角市花輪字柴内	2	A	明和8(1771)	「奉納聖大乘妙典日本廻国六十六部」	柴内金沢家向かいに所在。すぐ近くに庚申塚がある。	2
北-17	大日堂経塚	鹿角市八幡平字堂ノ上	1	A	天保12(1841)	「奉書写妙法蓮華経一字一石」	大日靈貴神社(大日堂)の宮司・安倍家の墓地。43~45代の墓碑周辺に、多量の礫石経が散らばる。墓石の側面に、礫石経埋納のことが記されている。「妙光院義行」「安倍藤吾藤原義直」のいう人名がある。	2
北-18	谷内経塚	鹿角市八幡平字谷内	1	不明	元文(1736-40)		谷内集落入口、八坂神社下に所在。カマス7つ半の礫石経が出土した。	2
北-19	寺の沢経塚	鹿角市	2	A	宝暦12(1762)	「奉納大乘妙典 日本廻国塔」	墓地入口に所在。願主は「貞證」、施主は「能代 山尾五兵衛」ら8名。	2
北-20	徳昌寺経塚	能代市向能代字金山	1	A-a	安永(1772-80)	宝篋印塔	曹洞宗・徳昌寺に所在。民道和尚の建立と伝わる。日本海中部沖地震による塔倒壊で、礫石経を確認。	
北-21	河戸川遺跡	能代市河戸川字新屋布	1	E			河戸川熊野神社本堂下に置かれた石を取り除いたところ、一字一石経の入った珠洲系陶器が発見された。	6
北-22	飛塚1経塚	山本郡三種町森岳	1	A-c	明和2(1765)		飛塚旧坂下に所在。「夢得実相居士」によって建立されたことが記された経碑が残る。塚下約1mの土中に、約7万点の一字一石経が納められていた。	7
北-23	飛塚2経塚	山本郡三種町森岳	1	不明	宝暦(1751-63)		飛塚地区に所在。	8
北-24	飛塚3経塚	山本郡三種町森岳字西飛塚	1	A-b	文政5(1822)	「大乘妙典書寫塔」	墓地に所在。「工藤忠六」が、逆修供養のために建立。	
北-25	宝竜前遺跡	山本郡三種町鹿渡字宝竜前	1	F			発掘調査の際、ある地点から一字一石経が複数個まとまって出土した。	8
北-26	立石経塚	山本郡八峰町八森字立石	1	不明			菅江真澄が記録。一本杉という立岩の傍らに、円仁の造営と伝わる礫石経塚がある。梵字の書かれた一字一石経が見られる。	1

## (2) 中央地区

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
中-1	下刈経塚	秋田市金足下刈字林中	1	不明			日吉神社に所在。礫石経出土が確認されている。疫病封じの経塚か。	13
中-2	広山田経塚	秋田市	1	A	文政5(1822)	「般若心経」		9
中-3	新波経塚	秋田市雄和新波字新町	1	A? C?	享保2(1717)		通称「内山街道」脇に所在。普門院第7世常青秀存和尚が一字一石経を書写し、法謝供養のため経塚を築いたという記録がある。	10
中-4	鍛冶屋敷経塚	秋田市河辺岩見字鍛冶屋敷	1	不明			曹洞宗寺院・両沢山千手院の裏手に所在。1960年(昭和35)頃、水道工事の際に偶然一字一石経が出土。	11
中-5	蓬内台経塚	南秋田郡五城目町馬場目字蓬内台	1	不明			礫石経の出土が確認されている。別名「馬場目経塚」。	1
中-6	船橋経塚	潟上市昭和豊川船橋字川原崎	1	B			豊受神社境内入口に所在。マウンドが残るが、大分崩れている。礫石経の出土が確認された。	12
中-7	本明寺経塚	男鹿市脇本脇本字横町道上	1	A-a	文政5(1822)	宝篋印塔	曹洞宗寺院・珪桐山本明寺の境内に所在。高さ5m余りの宝篋印塔の下に、礫石経が納められている。	28
中-8	脇本第一小学校前経塚	男鹿市脇本脇本字上野	1	不明				
中-9	家の後経塚	男鹿市船川港椿字家の後	1	A	享保3(1718)	大乘妙典書写塔	三島神社境内に所在。仙台住の沙門が願主。	14
中-10	瑞光寺経塚	男鹿市北浦北浦字杉原	1	D			臨済宗・瑞光寺の山門下に所在。	
中-11	茨島経塚	男鹿市北浦北浦字茨島	1	A		庚申塔	曹洞宗・雲昌寺の後方に所在。	
中-12	西水口経塚	男鹿市北浦西水口字堂ノ前	1	D			臨済宗・十王堂の前に所在。	
中-13	常在院前経塚	男鹿市北浦真山字白根坂台	1	不明			臨済宗・常在院の前に所在。	
中-14	畠崎経塚	男鹿市	1	A			菅江真澄が記録。法華経を一字一石に書写し、埋納して「七文字の碑」を立てている。	15
中-15	鶴木経塚	男鹿市鶴木字鶴木	1	B			礫石経と古銭が出土。	54
中-16	鶴木墓地経塚	男鹿市鶴木	1	A-a	享和3(1803)	「石経 大乘妙典一部」	台座に銘を持つ、高さ243.5cmの宝塔。鶴木村の親郷肝煎を勤めた大洲家の墓であり、鶴木墓地の中央に所在している。	16
中-17	永源寺経塚	男鹿市鶴木字道村	1	不明			曹洞宗・永源寺に関連。	
中-18	角間崎経塚	男鹿市角間崎	1	不明			礫石経の出土が確認されている。	
中-19	小深見経塚	男鹿市弘戸字小深見	1	不明			神明社に関連。	
中-20	丁刃森経塚	にかほ市平沢	1	不明			礫石経と、22種39枚の中国銭が出土したとされる。	54
中-21	延命地藏尊真経塚	にかほ市伊勢居地字谷地	1	A		「大乘妙典」	伊勢居地延命地藏尊の裏手に所在。経碑付近から礫石経が出土。	
中-22	金浦経塚	にかほ市金浦	1	A-c		「経塚」		17
中-23	水岡のお経塚	にかほ市象潟町横岡字目貫谷地	1	A?	安永4(1775)		僧・智仙によって建立されたもの。智仙は諸所を行脚して塚を築いているが、この水岡のものが最後の例と伝えられる。	18
中-24	荒町墓地経塚	由利本荘市荒町字古里	1	A-c		「・・・経一字一石」		19
中-25	館前経塚	由利本荘市館前字館前	1	A-c	享保(1716-35)	「奉書写大乘妙典一部 一字一石」	曹洞宗・寶圓寺の門前に所在。	19
中-26	大沢熊野神社経塚	由利本荘市大沢字南関	1	A-c	明和6(1769)	「妙法蓮華経」	1978年(昭和53)頃、一度礫石経が掘り出され、その後埋め戻された。	19
中-27	大蔵寺経塚	由利本荘市湯沢字湯沢	1	A-c	宝暦10(1760)	「大乘妙典石経塔」	曹洞宗・大蔵寺境内に所在。「十三世豊明」の建立。	19
中-28	船岡台経塚	由利本荘市船岡字船岡台	1	不明			1987年(昭和62)、墓地改装工事中に礫石経が出土。石碑をつくり、大部分をその下に埋め戻した。	19
中-29	水ヶ沢経塚	由利本荘市船岡字大平野	1	A-b	天保9(1838)	「観音経一千巻供養塔」	佐々木氏が建立。出羽三山・鳥海山碑、金毘羅・西国三十三番札所巡拝碑も兼ねる。	19
中-30	天然寺経塚	由利本荘市日役町	1	A	弘化3(1846)	「南無阿弥陀佛 浄土三部妙典石経塔 一石一字三禮」	浄土宗・天然寺境内に所在。	19
中-31	蔵堅寺経塚	由利本荘市日役町	1	A	文化12(1815)	「大乘妙典石経塔」	曹洞宗・蔵堅寺境内に所在。	19
中-32	蔵堅寺2経塚	由利本荘市日役町	1	A		「読誦千部 書經カ一部」		19
中-33	春日神社経塚	由利本荘市田町	1	A	天保元(1830)?	「法華塔」		19

中近世秋田における礫石経塚(2)  
 - 検討遺跡の集成 -

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
中-34	新山経塚	由利本荘市石脇	1	A-c		「□□趣一万部 三部 経 大乘経」	新山神社への参道中腹で発見された3基の石碑。1基は高さ・幅共に約50cmのもので、「理趣経碑」と呼ばれる。他の2基にはそれぞれ地藏菩薩・大日如来像が線刻されている。	19
中-35	長谷寺経塚	由利本荘市赤田	1	A-c		「大乘妙典・・・」	「赤田の大仏」という名で知られる長谷寺の立地する山の麓、現在は宅地となっている場所に所在。	19
中-36	万願寺経塚	由利本荘市万願寺	1	A	明和6(1769)	「妙法蓮華経」	新田諏訪神社に所在。	19
中-37	家口田1経塚	由利本荘市二十六木 字家口田	1	A	嘉永5(1852)	「奉納般若心経千巻塔」		19
中-38	家口田2経塚	由利本荘市二十六木 字家口田	1	A		「宝篋」		19
中-39	下野経塚	由利本荘市玉ノ池字 下野	1	A-b		「大乘妙典供養塔」	玉ノ池村豊島家の祖と言われる荘右衛門家の墓碑とも伝わるが、詳細は不明。	20
中-40	滝ノ沢経塚	由利本荘市葛法字滝 ノ沢	1	A	明和3(1766)	「書寫地藏本願経」	葛法共同墓地内に所在。	20
中-41	永泉寺経塚	由利本荘市給人町	1	A	文政4(1821)	「大乘妙典塔」		19
中-42	曲沢大石経塚	由利本荘市曲沢字中 谷地	1	A-c		「佛法僧」	道沿いに所在。経碑は高さ1.3m、径2.0mの円形の自然石。一石二字の礫石経が出土している。	21
中-43	曲沢墓地経塚	由利本荘市曲沢字千 手台	1	A			墓地に所在。道路工事の際に礫石経が出土したというが、詳細不明。	21
中-44	宮比神社境内 経塚	由利本荘市曲沢字山 本	1	A			宮比神社参道沿いに所在。高さ40cmほどの経碑周辺で、一字一石経が採取されている。	21
中-45	小菅野墓地経塚	由利本荘市小菅野字 平三郎	1	A	享保18(1733) ?		墓地に所在。土坑に多字一石経が多数納められていた。経碑が近くにあり、経塚に伴うものと考えられる。	21
中-46	五十土墓地経塚	由利本荘市五十土字 鍋ヶ森	1	A	延享元(1744)		旧矢島街道沿いの墓地に所在。一字一石経を拾うことができる。	21
中-47	陣ヶ森墓地経塚	由利本荘市陣ヶ森字 陣ヶ森	1	A	宝暦4(1754)	「書写大乘妙典 典一部□□□□」	墓地に所在。	21
中-48	飯沢庵寺跡経塚	由利本荘市飯沢字篠 竹	1	A	宝暦5(1755)	「書写法華」	飯沢庵寺(廃寺)の境内に所在。	
中-49	瑞光寺経塚	由利本荘市町村字下 黒沢	1	A	宝暦14(1764)	「妙法蓮華経 書写全 部」	曹洞宗・瑞光寺の墓域、万箇將軍の墓地内に所在。径1.5m、深さ1.0mの土坑中に2万点以上の多字一石経が納められていた。経碑は読誦塔も兼ねている。願主は瑞光寺11世大機徹道、勸進僧は智仙、仙栄の2名である。	21
中-50	根城経塚1号	由利本荘市川西字根 城	1	A		「上報四恩下資三有」	墓地に所在。礫石経が出土したとされている。	21
中-51	根城経塚2号	由利本荘市川西字根 城	1	A	天明7(1787)		墓地に所在。礫石経が出土したというが、現在遺物は所在不明。	21
中-52	新屋敷墓地経塚	由利本荘市川西字新 屋敷	1	不明				21
中-53	山本経塚	由利本荘市山本	1	A		「大乘妙典経塚」		25
中-54	黒沢経塚	由利本荘市黒沢	1	A	明和3(1766)	「千手陀羅尼経」		25
中-55	土倉経塚	由利本荘市土倉	1	A	宝暦7(1757)	「大乘妙典二字一カ・・・」	「八世智・・・」建立。	25
中-56	九日町経塚	由利本荘市矢島町元 町字九日町	1	C		「宝篋印塔」	別名「元町経塚」。円形マウンド上に、「宝篋印塔」銘の三角形板状板碑、弥陀の種字を刻した三角形板状板碑、三角形自然石があった。カマス10袋ほどの礫石経が出土し、その中の一つに「施主宏 光□」の墨書があった。	22
中-57	九日町経塚宝 篋印塔	由利本荘市矢島町元 町字九日町	1	A		「宝篋印塔」	高さ72cm、幅30cm、厚さ10cmの石碑。	
中-58	相庭館書写塔	由利本荘市矢島町元 町字相庭館	1	A-c		「書写塔」	墓地に所在。高さ50cm、幅40cm、厚さ35cmの自然石。	
中-59	根井館跡	由利本荘市元町字新 ら町	1	不明			八幡神社境内に所在。礫石経が矢島町郷土資料館に保管されている。	
中-60	郷内経塚	由利本荘市元町字郷 内	1	不明			礫石経が出土しており、矢島町郷土資料館に保管されている。	
中-61	小坂戸書写塔	由利本荘市矢島町川 辺字小坂戸	1	A-c	明和4(1767)	「書写地藏□願経」	高さ95cm、幅35cm、厚さ20cmの自然石。	

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
中-62	中村宝篋印塔	由利本荘市矢島町木在字中村	1	A-c		「寶篋印□」	浅間神社境内に所在。高さ70cm、幅80cm、厚さ25cmの自然石。	
中-63	下岩台経塚	由利本荘市矢島町木在字中村	1 1	A			礫石経約1,250点、石地藏13体、寛永通宝7枚が、積石の石室に納められていた。法覚院(廃寺)に関連。	
中-64	八木森経塚	由利本荘市矢島町木在字八木森	1	A-c	宝永6(1709)	「奉供養 大乘妙典一字一石皆命満足」	願主「三浦弥四郎」。高さ100cm、幅50cm、厚さ40cmの自然石。	
中-65	根城書写塔1	由利本荘市矢島町荒沢字根城	1	A-c	延享2(1745)	「奉書写大乘妙典五部」	金子九郎兵衛嘉忠建立の石碑。高さ50cm、幅30cm、厚さ10cm。	
中-66	根城書写塔2	由利本荘市矢島町荒沢字根城	1	A-c		「奉書写大乘…」	高さ40cm、幅30cm、厚さ11cmの自然石。	
中-67	前杉書写塔	由利本荘市矢島町城内字前杉	1	A-c	明和4(1767)	「書写法華…」	高さ63cm、幅55cm、厚さ25cmの自然石。	
中-68	前杉経塚1	由利本荘市矢島町城内字前杉	1	A-c	享保4(1719)	「奉書写 大乘妙典一字一石 上報四愿 下資三有 者也」	龍源寺八世明山の建立。高さ118cm、幅94cm、厚さ25cmの自然石。	
中-69	前杉経塚2	由利本荘市矢島町城内字前杉	1	A-b	元文5(1740)	「奉書写法華經一字一石□部」	「龍源寺八世明山」の建立。読誦塔も兼ねる。高さ57cm、幅28cm、厚さ19cmの石碑	
中-70	田屋の下宝篋印塔	由利本荘市矢島町城内字田屋の下	1	A-a	天明8(1788)	宝篋印塔	福王寺境内に所在。「鳥海山福王寺七十三世有程」の建立。	
中-71	田屋の下経塚1	由利本荘市矢島町城内字田屋の下	1	A-b	享保7(1722)	「奉書写大乘妙典法華經□部・・・」	福王寺境内に所在。願主「昌□妙月」、施主「菅原…」。高さ80cm、幅33cm、厚さ11cmの石碑。	
中-72	田屋の下経塚2	由利本荘市矢島町城内字田屋の下	1	A-c	宝暦5(1755)	「奉読誦 大乘妙典五百部一字一石書写為無微瑞大和尚両親菩提也」	祥雲寺境内に所在。「祥雲寺八世徳峰」の建立。高さ120cm、幅80cmの自然石。	
中-73	下岩之沢宝篋印塔	由利本荘市新荘字下岩之沢	1	A-c	安永2(1773)	「寶篋印塔」	権現堂境内に所在。高さ105cm、幅80cm、厚さ18cm。	
中-74	高建寺経塚	由利本荘市立石字上野	1	A-c		「大乘妙典二字一石」	曹洞宗・高建寺墓地に所在。「南翁知嶽」の建立。高さ75cm、幅40cm、厚さ15cmの自然石。	
中-75	長坂経塚	由利本荘市鳥海町上川内字長坂	1	A-c			道路の傍らに立っていた、高さ1.2mほどの自然石の下を発掘調査したところ、土坑に納められた礫石経を発見した。施主・年号が墨書されたと思われる礫石経もあったが、文字が薄れて解読不能であった。	23
中-76	提鍋1経塚	由利本荘市鳥海町上川内字提鍋	1	E			堰神社社殿の下から、甕に納められた一字一石経が出土した。	23
中-77	提鍋2経塚	由利本荘市鳥海町上川内字提鍋	1	C-c			1970年(昭和45)の耕地整理の際、自然石を立てた塚があった付近から一字一石経が出土した。	23
中-78	生出谷地経塚	由利本荘市鳥海町上川内字生出谷地	1	A	寛政11(1799)	百万遍供養塔	高さ113cmの石碑。経塚であるとの伝承がある。	23
中-79	猿倉経塚	由利本荘市鳥海町猿倉	1	A-c		「書写本願経」	高さ58cmの石碑。この碑は、俗に「経塚」と呼ばれている。	23
中-80	中直根経塚	由利本荘市鳥海町中直根	1	A	明和3(1766)	「書写法経塔」	高さ64cmの石碑。法華経の経塚と伝わる。	23
中-81	根子経塚	由利本荘市鳥海町	1	C	寛政5(1793)	「大般若経塔」		23
中-82	土崎廻国塔	秋田市土崎港	2	A	宝暦12(1762)			9
中-83	太平廻国塔	秋田市太平	2	A	安政5(1858)			9
中-84	上新城廻国塔	秋田市上新城	2	A	安永7(1787)			9
中-85	寺内廻国塔	秋田市寺内	2	A	安永7(1788)			9
中-86	鮎瀬廻国塔	由利本荘市鮎瀬	2	A	明和7(1770)	「日本廻□供養塔…」		19
中-87	鮎瀬広田庵廻国塔	由利本荘市鮎瀬	2	A		「日本廻国供養塔」		19
中-88	大沢熊野神社廻国塔	由利本荘市大沢字南関	2	A	元治元(1864)	「六十六部供養」	大沢熊野神社の脇に所在。菩薩坐像が線刻された碑。本願主は若狭国の人で、大沢在住の者が世話人となっており、台座に名前が刻まれている。	19
中-89	三条廻国塔	由利本荘市三条字三条	2	A	天明8(1788)	「大乘妙典六十六部日本廻国納経」	旧街道沿いに八幡神社があり、その境内に所在。	19
中-90	滝ノ沢廻国塔	由利本荘市葛法字滝ノ沢	2	A	天明8(1788)	「奉納大乘妙典六十六部日本廻国」	葛法共同墓地内に所在。「行者七郎兵衛」建立。	20
中-91	松ヶ崎庵寺廻国塔	由利本荘市松ヶ崎	2	A		「諸国納経塔」		19
中-92	町村廻国塔	由利本荘市町村	2	A	文政7(1824)	「奉納 大乘妙典六十六部日本廻国塔」	「行者 興吉」の建立。	25

(3) 県南地区

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
南-1	了翁禪師経塚	湯沢市八幡字前田	1	A-b		「一字一石拜書」	元禄15年(1702)、八幡村出身の了翁禪師が、雄物川の洪水で亡くなった人々の冥福を祈って造営したものと伝わる。「一字一石拜書」の碑があるが、これは経塚造営の後の時代に建立されたもの。	26・55
南-2	新田経塚	湯沢市八幡字新田	1	A-b		「一字一石石・・・」	雄物川洪水防止を願い、般若心経を書写して埋めたという了翁禪師の経塚が新田にあったとされるが、それに関連する経碑か。	26
南-3	吹張経塚	湯沢市吹張	1	不明			汝、界、誌、便、故、悉仏の墨書のある礫石経出土。	27
南-4	山田経塚	湯沢市山田	1	不明			梵字、大・事などの文字を墨書した礫石経が、山田の川原から出土。	27
南-5	上関経塚	湯沢市上関	1	A-c	享保20(1735)	「大乘妙典七千部塔」	菅江真澄が記録しており、上関市営住宅の傍らに現存。	27
南-6	尼ヶ台経塚	湯沢市杉沢	1	不明			杉沢村尼ヶ台より、礫石経数点出土。現在の「天ヶ台」か。	27
南-7	湯沢北高校裏経塚	湯沢市湯ノ原	1	不明			湯沢北高等学校の裏に所在する礫石経塚。	27
南-8	林松寺経塚	湯沢市大字大森	1	A-b	享保19(1734)	「奉書寫大乘妙典塚」	曹洞宗・森嶽山林松寺境内に所在。「又兵衛」建立。	28
南-9	河原毛温泉経塚	湯沢市高松字三途川	1	不明			菅江真澄が記録。路傍に石仏が沢山あり、その辺りて一字一石経が拾える。礫石経塚が崩落したもの。	29
南-10	大谷1経塚	湯沢市稲庭町字大谷	1	B			マウンドの前面直下に礫石経が埋納されている。	
南-11	大谷2経塚	湯沢市稲庭町字大谷	1	不明			「南無阿弥陀仏」「光明真言百遍」と墨書された礫石経が出土。小野寺氏の旗本屋敷跡、あるいは刑場跡との伝承がある地。	30
南-12	貝沢拾三本塚9号墳	雄勝郡羽後町貝沢字拾三本塚	1	G			1952年(昭和27)盗掘。マウンドから一字一石経、金小片、中国銭32点が出土。	54
南-13	貝沢拾三本塚10号墳	雄勝郡羽後町貝沢字拾三本塚	1	G			1960年(昭和35)に発掘調査。マウンドから477点の一字一石経と13点の中国銭が出土。中国銭のひとつに火葬骨片が付着していた。	54
南-14	貝沢拾三本塚11号墳	雄勝郡羽後町貝沢字拾三本塚	1	G			1950-53年(昭和25-28)頃までに盗掘。マウンドから礫石経、中国銭、切遣いの譲葉金が出土。	54
南-15	貝沢拾三本塚12号墳	雄勝郡羽後町貝沢字拾三本塚	1	G			1952年(昭和27)に盗掘。礫石経多数、中国銭13点、切遣いの譲葉金が出土。	54
南-16	宝泉寺経塚	雄勝郡羽後町西馬音内字裏町	1	A-c	享保7(1722)	「奉拜写地藏菩薩本願經一字一石供養塔」	曹洞宗・延命山宝泉寺境内に所在。「幻住慈賢」建立。	31
南-17	中町経塚	雄勝郡羽後町西馬音内字中町	1	不明			宝永元年(1704)、大仙和尚が庵を結んで住み始めたとき、宝永元年(1704)、大仙和尚が庵を結んで住み始めたときとされる所に経塚があったが、1917年(大正6)に開田のため消滅。礫石経は近くの墓地に埋め戻し。	31
南-18	岩土経塚	雄勝郡羽後町西馬音内堀回字岩土	1	C-c			大日堂の境内に所在。マウンドの上に自然石の経碑をもった経塚であったが、1911年(明治44)に消滅。経碑のみ普賢堂前に移転。	31
南-19	和尚塚	雄勝郡羽後町西馬音内中町	1	不明			400年前程、ツツガムシ病犠牲者を救うため、托鉢和尚が即身仏となる際、礫石経とともに穴に入ったという伝承がある。	28
南-20	光正寺経塚	雄勝郡羽後町堀内字堀内	1	D			曹洞宗・林内山光正寺境内、参道脇に所在。かつて多数の礫石経が出土したが、現在では詳細な地点は不明になっている。	31
南-21	大久保経塚	雄勝郡羽後町大久保字屋敷下	1	B			「ケダニ地藏さん」などのお堂がある所に、かつて松の木が生えたマウンドがあった。この木の根元から約3千点の礫石経が出土した。	31
南-22	常福寺経塚	雄勝郡羽後町大久保字大久保	1	A-a			曹洞宗・大鷹山常福寺境内に所在。ツツガムシ病犠牲者供養のために造営された礫石経塚。地藏経を一字一石に書写し、高さ2mの地藏尊を経碑として建立。	28
南-23	笠森稻荷経塚	雄勝郡羽後町飯沢字院ヶ台	1	A			1997(平成9)頃、道路改良工事中に礫石経が出土。	
南-24	能持院1経塚	雄勝郡羽後町足田字安良町	1	A-b	宝永2(1705)	「大乘法華石経塔」	曹洞宗・塩田山能持院境内に所在。「愚白弟子最極」書写。	31
南-25	能持院2経塚	雄勝郡羽後町足田字安良町	1	A-a?			曹洞宗・塩田山能持院境内の子育て地藏尊は、昔野盗が横行した際、命を落とした人の供養のために野盗が横行した際、命を落とした人の供養のために建立されたもので、法華経を書写した一字一石経が埋められている。	28
南-26	新城川経塚	雄勝郡羽後町足田字新城川	1	F			塩田山能持院が管理する「神城河原子育地藏尊」境内に所在。地藏堂の脇にかつて礫石経塚があったが、新城川の洪水で消滅したとされる。	31
南-27	竜泉寺経塚	雄勝郡羽後町新町字上高寺	1	A-c	安政6(1859)	「石経塔一部」	曹洞宗・竜泉寺境内に所在。建立主については、「行年八十老翁当寺十七世古嶽大溪謹拜書」とある。	31
南-28	横根経塚	雄勝郡羽後町上到米字上蒲生	1	C-c	安永5(1776)	「大乘妙法蓮華経」	横根峠の路傍に所在。径3.6m、高さ0.9mのマウンド上に、板状自然石の経碑が立つ。	31
南-29	聖塚	雄勝郡東成瀬村田子内字上野	1	G?			旅の僧が生前一字一石経を書写し、それを自分が埋葬された上に埋めるように遺言して亡くなったと伝わる。礫石経の出土が確認されている。	32
南-30	横町観音寺経塚	横手市本町	1	不明			真言宗・開華山観音寺境内に所在。	13
南-31	明永沼経塚	横手市	1	不明			1933年(昭和8)、明永沼造成工事の際に礫石経が出土。そのほとんどは、平城の武田氏墓地に埋め戻された。多字一石経が確認されている。	34

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
南-32	七面神社経塚	横手市平城町	1	A-b		(碑)「市中繁榮」(台座)「一字一石塔」	七面神社境内に所在。台座には「講中小山三之助外十一名」の刻字。	35
南-33	三貫塚経塚	横手市金沢中野字三貫塚	1	A-c		「南無・・・」	現在の国道13号線から屋藻沼に続く坂道(通称「法華坂」)の入口に、かつて経塚があった。道路拡張工事のため、経碑を動かした際に礫石経が出土。	24
南-34	神明町2経塚	横手市神明町	1	A-b	明和6(1769)	「奉納大乘妙典」	墓地に所在。台座に「明善□□、椿屋□光」の刻字。	35
南-35	永蔵寺経塚	横手市平鹿町下鍋倉字鍋倉	1	A-c		「奉書写法花一字一石供養塔」	下鍋倉遊園地に所在。造営主については、「永蔵寺二世秀榮大和尚書是」とある。	36
南-36	明沢経塚	横手市平鹿町醍醐字明沢	1	A	応永12(1405)		菅江真澄が記録。法華経一部を一字一石に書写し、月泉が奉納。梵字の礫石経。	33
南-37	増田多吉屋敷遺跡	横手市増田町増田字田町	1	不明			真崎勇助が『雲根録』(1874-1906)に記録。長、最、之という墨書のある礫石経が出土している。	13
南-38	福嶋経塚	横手市増田町増田字福嶋	1	A	寛永元(1624)	「奉写石一字三礼大乘妙典経全部 寛永元年八月甲申廿四日云々」	菅江真澄が記録。千田彦右エ門の墓石と並んで、路傍に所在。	29
南-39	梨木塚経塚	横手市増田町吉野字梨ノ木	1	B			梨の木の側にあったマウンドから、礫石経が出土した。真崎勇助が『雲根録』(1874-1906)に記録。	37
南-40	虹が沢経塚	横手市増田町龜田	1	B			菅江真澄が記録。「虹が沢」という所に所在。梵字の書かれた小石が出土する塚。	29
南-41	深井経塚	横手市雄物川町深井	1	A		「万部経供養碑」	菅江真澄が記録。石川氏建立か。	33
南-42	菅見沢経塚	横手市大森町上溝字中野	1	不明			菅江真澄が記録。菅見沢の出口に所在。石経が埋められているとの伝承がある。	29
南-43	下堀経塚	横手市十文字町睦合字本城	1	A-b	元禄元(1688)	「法華妙典八軸一字一石」	八幡神社境内に所在。造営主については、「比丘一□直心拜書」とある。	38
南-44	福万経塚	横手市山内	1	不明			菅江真澄が記録。「福万邑」の薬師嶺の上に所在。石経を埋めた所か。	29
南-45	高寺経塚	大仙市内小友字高寺	1	A-a? E?	享保7(1722)	「石経 佛 供養」	石仏と卵塔が安置されたお堂の下に、一字一石経が埋納されている。	53
南-46	石持経塚	大仙市内小友字石持	1	A-b	延享2(1745)	「奉石書法華一部供養□」	カマス2つ分の多字一石経が出土している。	53
南-47	島根経塚	大仙市内小友字館前	1	A-c	文政2(1819)	「大乘妙典石カ人・・・」	島根集落のはずれに、庚申塔などと併に所在。「禪・・・」が建立。曹洞宗・満友寺に関連。	39
南-48	覺善寺経塚	大仙市角間川町小中嶋	1	A-b	安永10(1781)		日蓮宗・本妙山覺善寺境内に所在。祖師五百遠忌のため、礫石経埋納。	24・28
南-49	坊村経塚	大仙市南外字坊村	1	不明			菅江真澄が記録。石経塚か。周辺は「きやうづか森」と呼ばれているが、由来は定かでない。	29
南-50	寺屋敷経塚	大仙市戸地谷字寺屋敷	1	不明			苗代区画替え作業中に、偶然一字一石経が出土した。遺跡の詳細な地点は不明。消滅したか。	40
南-51	開南経塚	大仙市長野字開	1	C-c			畑の中に直径5m、高さ2mのマウンドがあり、その上に自然石が3基据えられている。礫石経数点が出土したとされる。	41
南-52	開北経塚	大仙市長野字開	1	F	文化(1804-17)		作開神社境内入口に所在。自然石と二十三夜塔の周辺に、一字一石経が散らばる。	39
南-53	下川原経塚	大仙市長野字下川原	1	C-c			高さ1m、幅5mのマウンドの上に3基の自然石がある。周辺から一字一石経が出土する。	41
南-54	六日町観音堂経塚	大仙市長野字六日町	1	B			紫嶋氏の観音堂境内に、かつて経塚があった。礫石経が出土していたが、現在では堂も消滅。	41
南-55	多寶院経塚	大仙市鎌見内字相野	1	A-d			曹洞宗・毘沙門山多寶院境内に所在。毘沙門天を祀った小祠の下から礫石経が出土した。	45
南-56	源勝寺経塚	大仙市鎌見内字大根田	1	不明			大根田にかつて源勝寺という真言宗寺院があったが、焼失して現在は墓地のみが残っている。この墓地に礫石経塚があったとされるが、詳細な地点は不明である。	41
南-57	幕林経塚	大仙市鎌見内字幕林	1	F	天保4-5(1833-34)		幕林八幡神社境内入口に所在。出羽三山碑、庚申塔、象頭山塔など5基の石碑が並ぶ土盛りの上に、一字一石経が散らばっている。	45
南-58	囿ノ内観音堂経塚	大仙市豊川字囿ノ内	1	E			高橋喜太郎屋敷神観音堂(一間四面社)の縁の下に、礫石経が敷きつめられている。	41
南-59	五百刈田経塚	大仙市豊岡字五百刈田	1	A-c		「奉納経塚」	八幡神社へ続く参道の入口にある。高さ55cm、幅40cmの自然石。	56
南-60	法華経塚	大仙市栗沢	1	B			菅江真澄が記録。「森下清水」に所在。法華経を埋めた塚。築造時期は不明。	29
南-61	法華宝塔	大仙市刈和野字石名坂	1	C-b	元禄15(1702)	読誦塔	基底部11m、高さ2mのマウンドの上に読誦塔がある。旧道沿いに位置する。一字一石経が納められているという伝承がある。	57
南-62	心像西野経塚	大仙市土川字心像西野	1	A-c	享保13(1728)	「大乘妙典一字一石」	菩提供養のために経塚がつくられたと伝わる。	42
南-63	杉沢経塚	大仙市土川字杉沢	1	A-c		「大乘妙典」	杉沢会館の敷地内にある。	42
南-64	梨木塚	大仙市強首字乙越	1	F			菅江真澄が記録。伊藤氏の先祖が、家系譜や武家の調度品を埋めたとの伝承がある。木の葉大の平石で覆われており、石経塚とも言われる。塚の裾に梨の古木が生えている。マウンドが現存しており、表面に散在する川原石の中に礫石経が確認されている。	29
南-65	大巻経塚	大仙市強首字大巻	1	不明			菅江真澄が記録。寿命院という修験者が石経を書写し、埋めた塚であると言われる。	29
南-66	大巻経塚2	大仙市強首字大巻	1	A			文献に「経塚碑」、「江戸期の経塚」といった記述。菅江真澄の記録した大巻経塚とは別の経塚か。	1・43

中近世秋田における礫石経塚(2)  
 - 検討遺跡の集成 -

No.	遺跡名	所在地	種別	現況	紀年銘	経碑銘文・種類	備考	文献
南-67	中里経塚	大仙市協和下淀川	1	不明			母衣社跡から、礫石経30~40点が出土した。	
南-68	龍蔵台経塚	大仙市北楯岡字上龍蔵台	1	A-b	明和5年(1768)	「奉納大乘妙典」	龍蔵神社へ続く参道脇にある。仏像が彫刻されている。	
南-69	三本杉経塚	大仙市北楯岡字船戸	1	B			1996年(平成8)年、神岡町教育委員会が発掘調査。約7000点の礫石経が出土。別名「船戸経塚」。	
南-70	みのり塚	仙北郡美郷町飯詰	1	不明			菅江真澄が記録。石経を埋めた経塚であるとの伝承。	47
南-71	上深井経塚	仙北郡美郷町上深井字矢矧殿	1	不明			金沢西根字上糠淵の渋谷家所蔵『仙北全郡』に記録。現在では場所を特定できず、遺物もない。菅江真澄は、「上深井村」の字名として「経塚」を記録。真崎勇助も『雲根録』(1874-1906)に経塚について記録。	48
南-72	刺市経塚	仙北市田沢湖梅沢字刺市	1	B			梅沢氏が姫のために経塚を営んだと伝えられる。桜の太木が倒れた際、その根元から礫石経が出土。	44
南-73	八津1経塚	仙北市西木町小山田字八津	1	G			かつて観音堂があった場所から礫石経約100点、人骨、火打鎌、二股鉄器が出土。	46
南-74	八津2経塚	仙北市西木町小山田字八津	1	A			文献43に「経塚碑」という記述がある。	43
南-75	神明町1廻国塔	横手市神明町	2	A-b	文化12(1815)	「奉納大乘妙典六十六部供養」	墓地に所在。「岩蔵」の建立。	35
南-76	赤坂稲荷神社廻国塔	横手市赤坂	2	A-b	安政3(1856)	「奉納大乘妙典日本廻国」	赤坂稲荷神社境内に所在。「行者熊五良」の建立。	35
南-77	持田廻国塔	横手市新藤柳田字持田	2	A-b		(碑)「奉納大乘妙典」(台座)「六十六部日本廻国」	石碑正面と台座に銘がある。	35
南-78	三島神社廻国塔	横手市平鹿町醍醐	2	A	宝暦7(1757)	「奉納妙典六十六部日本回国 敬白」	三島神社境内に所在。	36
南-79	下醍醐廻国塔	横手市平鹿町醍醐字下醍醐	2	A-b	宝暦5(1755)	「奉納大乘妙典六十六部日本回国」	下醍醐集落の村はずれに所在。	36
南-80	砂子田廻国塔	横手市平鹿町樽見内字砂子田	2	A-c		「奉納大乘妙典六十六部日本廻国」	「砂子田村佐藤又□□門」の建立。	36
南-81	里見1廻国塔	横手市雄物川町	2	A	天明(1781-88)		雄物川町里見地区に所在。	49
南-82	里見2廻国塔	横手市雄物川町	2	A			雄物川町里見地区に所在。	49
南-83	八柏廻国塔	横手市大雄字八柏	2	A-b	文化14(1817)	「奉納大乘妙典經六十六部日本廻国」	「八柏村 行者甚三郎」が建立。高さ90cm、幅31cmほどの石碑。	50
南-84	鶴巻田廻国塔	横手市大雄字鶴巻田	2	A-c?		「六拾六部大乘妙典(典)」?	菅江真澄が記録。高さ94cm、幅60cmの三角形の石で、道路端にある。	29
南-85	十日町地藏堂廻国塔	横手市大森町十日町字剣花	2	A-b		「奉納大乘妙典六十六部日本廻国」	集落の地藏堂内に所在。	
南-86	大道西廻国塔	横手市十文字町仁井田字大道西	2	A-b	文政10(1827)	「奉納 大乘妙典 六十六部日本廻国塔」	「阿波 市兵衛」「羽後 与助」「江戸 松□」ら、計6名が願主である。	51
南-87	山神社廻国塔	横手市十文字町仁井田字大道西	2	A-b	明和4(1767)	「奉納 大乘妙典 六十六部日本廻国塔」	山神社境内に所在。「仙北平鹿二井田村高□□」が建立。	38
南-88	梨木廻国塔	横手市十文字町梨木	2	A-b	天保7(1836)	「奉納 大乘妙典 日本廻国六十六部供養塔」	愛宕神社境内に所在。願主「行者 虎蔵」の他、施主4名と世話人の名前もある。	51
南-89	富沢廻国塔	横手市十文字町上鍋倉字富沢	2	A-b		「供養 日本回国 六十六部塔」	三重・富沢屋敷上の地藏菩薩堂内に安置されている。	51
南-90	三重廻国塔	横手市十文字町上鍋倉字富沢	2	A	宝永7(1710)	「回□一参道易沙弥□覚」	墓地の入口に所在。廻国塔の類か。	51
南-91	荊島廻国塔	横手市十文字町谷地新田字荊島	2	A			厳島神社境内に所在。	38
南-92	真角廻国塔	横手市十文字町睦合字真角	2	A			真角集落の宅地中に所在。	38
南-93	旧榊神社境内廻国塔	大仙市佐野町	2	A-c		「・・・本回国」	馬頭観音境内に所在。石碑上部が欠損している。	52
南-94	寺山廻国塔	大仙市内小友寺山	2	A-b	文化5(1808)		集落はずれの地藏堂内に安置されている。	

【参考文献】

今野沙貴子 2007 「中近世秋田における礫石経塚—地域・時間軸からの検討と研究の動向—」『秋田考古学』第51号 秋田考古学協会 pp. 59-64

【文献一覧】

- 1、奈良修介 1977 「室町時代以降の経塚」『秋田県史』考古編 秋田県 pp. 440-447
- 2、奈良寿 1977 「鹿角の経塚」『歴史の中の鹿角』中巻 大館印刷所 pp. 213-246
- 3、秋田県教育委員会 1991 『秋田県遺跡地図（県北版）』
- 4、安倍良行 1987 「神社と寺院」『鹿角市史』第2巻（下） 鹿角市 pp. 418-419
- 5、秋田県教育委員会 1985 『歴史の道調査報告Ⅱ 来満街道』秋田県文化財調査報告書第128集 p9
- 6、武田孝義 1995 「河戸川遺跡」『能代市史』資料編 考古 能代市 pp. 889-892
- 7、山本町教育委員会 1991 『山本町の石造物』 p53
- 8、琴丘町教育委員会 1978 『宝竜前遺跡緊急発掘調査報告書』 p24
- 9、草薙武雄 1980 『秋田市の石塔』 みしま書房 pp. 27-28
- 10、雄和町史編纂委員会 1976 「旧蹟と館址」『雄和町史』 雄和町 p30
- 11、河辺町文化財保護審議会 2000 『河辺町の文化財』第10集 河辺町教育委員会 p28
- 12、昭和町史編さん委員会 1986 「遺跡・遺物が語る郷土の中世」『昭和町誌』 昭和町 pp. 159-160
- 13、奈良修介 1959 「秋田縣経塚地名表」『秋田考古学』第12号 秋田考古学協会奈良環之助 pp. 11-13
- 14、泉明 1998 椿 『男鹿半島 その自然・歴史・民俗』男鹿市教育委員会 pp. 141
- 15、内田武志・宮本常一 1973 「おがのすずかぜ」『菅江真澄全集』第4巻 未来社 p228
- 16、鈴木初男 1996 『若美町の石造遺物』第3集 若美町教育委員会 p57
- 17、長山幹丸 1994 『石一伝説と信仰—』民俗選書4 秋田文化出版株式会社 pp. 184-187
- 18、結柴宗雄ほか 1996 「文化財」『象潟町史』資料編Ⅱ 象潟町 p902
- 19、本荘市 2000 「石造文化」『本荘市史』文化・民俗編 pp. 220-221
- 20、子吉郷土史研究会 1992 「供養塔」『子吉の石碑・石仏』本荘市子吉公民館 pp85-100
- 21、秋田県由利町公民館 1999 『由利町史跡探訪』 pp. 15-16
- 22、武藤鉄城 1957 「矢島町経塚発掘報告」『秋田考古学』第7号 秋田考古学協会奈良環之助 pp. 2-3
- 23、鳥海町史編纂委員会・鳥海町企画課 1985 『鳥海町史』 鳥海町 pp. 1503-1504
- 24、今野沙貴子 2006 「茨城県水戸市井戸向経塚・淡島神社経塚—秋田県横手盆地の事例を参考に—」『博古研究』第32号 博古研究会 pp. 15-28
- 25、由利町高齢大学研究部 1977 『由利町民俗誌—むかしをしのんで—』由利町 pp. 8-9・127-128
- 26、秋田県教育委員会 1987 『歴史の道調査報告XⅥ 本荘街道』秋田県文化財調査報告書第159集 p10
- 27、山下孫繼・茂木久栄 1965 「一字一石経塚」『湯沢市史』 秋田県湯沢市教育委員会 pp. 177-178
- 28、秋田魁新報社出版部 1997 『心のふる里 秋田のお寺』 秋田魁新報社 p102・269・373・387・388・390
- 29、今野沙貴子 2007 「菅江真澄の記録した「塚」—横手盆地の事例を中心に—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第21号 秋田県埋蔵文化財センター pp. 70-74
- 30、稲川町教育委員会 1984 「宗教文化」『稲川町史』 pp550-551
- 31、羽後町郷土史編纂委員会 1966 「経塚」『羽後町郷土史』 羽後町教育委員会 pp. 745-750

- 32、東成瀬村郷土誌編集委員会 1991『東成瀬村郷土誌』 東成瀬村教育委員会 p515
- 33、内田武志・宮本常一 1976「雪の出羽路 平鹿郡」『菅江真澄全集』第6巻 未来社 p76・388
- 34、伊沢慶治 1984「埋経石」『横手郷土史資料』第58号 pp. 87-88・口絵
- 35、横手市教育委員会 1995『横手市内の民間信仰塔』文化財調査第1集 p42・写31
- 36、佐々木志朗 1984「仏教的信仰によってつくられた石造物」『平鹿町史』 平鹿町 pp. 1207-1209
- 37、秋田県教育委員会 1987『歴史の道調査報告XX 手倉街道』秋田県文化財調査報告書第163集 p8
- 38、佐々木志朗 1996「郷土の石碑」『十文字町史』十文字町 pp. 1348-1349・1361-1362
- 39、今野沙貴子 2006「島根経塚と開北経塚—近世礫石経塚の事例—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号  
秋田県埋蔵文化財センター pp. 31-40
- 40、後藤金一郎 1997「円福寺」『菅江真澄の道ガイド 仙北町』仙北町観光協会 pp. 8-9
- 41、藤田秀司 1989「中仙の塚」『中仙町史』文化編 中仙町 pp. 328-337
- 42、西仙北町郷土史編纂委員会 1995「近世」『西仙北町史』先史～近世編 西仙北町 pp. 888-889・895
- 43、三森英逸 1978『仙北の歴史』三森印刷 p50
- 44、武藤鉄城 1977「寺屋敷から経塚」『田沢湖町史』神代編 田沢湖町教育委員会 p62
- 45、今野沙貴子 2005「大仙市鍵見内の礫石経塚二例」『秋田考古学』第49号 秋田考古学協会 pp. 98-108
- 46、武藤鐵城 1951「八津の環状石籬墳群」『考古学雑誌』37-4 pp. 50-51
- 47、内田武志・宮本常一 1979「月の出羽路 仙北郡一七」『菅江真澄全集』第8巻 未来社 p25
- 48、仙南村村史編纂委員会 1992「経塚」『仙南村郷土誌』 仙南村 pp. 1124-1126
- 49、雄物川町郷土史編纂会 1980「信仰と神社・寺院」『雄物川町郷土史』雄物川町役場 pp. 904-905
- 50、柴田昭五郎 2001「石碑」『大雄村史』 大雄村 p1172
- 51、十文字地方史研究会 1989『十文字町の石造物』 十文字町教育委員会 pp. 28-29
- 52、花館民俗資料保存会 1994『古文書と碑に見る花館の歴史』 大曲市花館財産区 p130・163・171
- 53、今野沙貴子 2005「大曲市内小友の礫石経塚」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第19号 秋田県埋蔵文化財センター  
pp. 77-86
- 54、高橋学 1996「秋田県出土の銭貨資料集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第11号 秋田県埋蔵文化財センター  
pp. 23-74
- 55、了翁禅師研究会 2002『了翁さんの物語』 pp. 18-19
- 56、中仙町郷土史編さん委員会 1989「碑石信仰」『中仙町史』文化編 中仙町 p246
- 57、嵯峨勘左衛門 1976「石名坂日蓮宝塔」『西仙北町郷土誌』近代篇 秋田県西仙北町役場 pp. 831-832

# 中国仰韶文化と縄文文化の共通性と相違点に関する問題

趙 建龍\*1  
吉川耕太郎\*2 訳

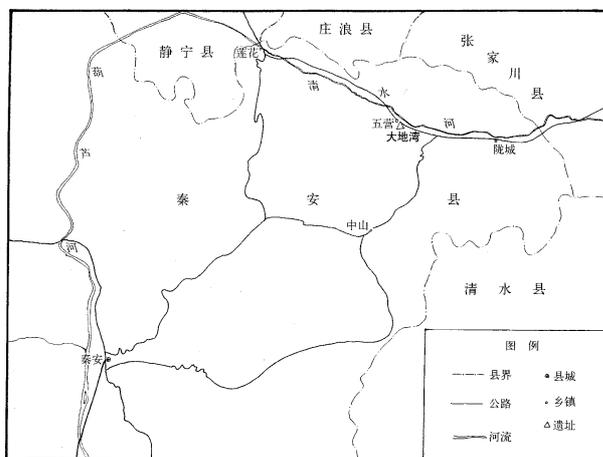
## はじめに

中国仰韶文化の主要な分布は中国中部の陝西省にある。なかでも涇河及び渭河流域は華夏(訳註1)民族による初期文化の中心的な発祥地のひとつである。仰韶文化の分布範囲は広大で、西は渭河上流の甘肅省東部と寧夏回族自治区、北は内蒙古自治区南端、東は山西省の太行山から河南省の洛河以西、南は達秦嶺南麓の四川省嘉陵江沿岸まで広がり、黄河中流域の大部分を占めている。

当該地域の古代文化は開始時期が早いだけでなく、生活に適した黄土高原のおかげで長期間にわたって継続した。とくに新石器時代人は自然界の生態環境に多くの部分を依存していたため、当時の自然環境が変化するたびに移動を繰り返した。その結果、一箇所で営まれた生活の期間はさほど長くはないといえる。新石器時代の遺跡はこれまでに多く発見されているにもかかわらず、長期間にわたって営まれた遺跡が少ない理由はそこにある。こうした事実は遺跡間の時間的な前後関係の把握を困難なものにしている。また、C14 測定年代があるにもかかわらず、自然環境の影響等により試料間の年代測定結果に大きな誤差が生じている。しかし、試料数が徐々に多くなるにつれて、試料間相互に対比・検討される例も多くなってきている。一方で、陶器片の熱ルミネッセンス法による測定は誤差範囲がさらに大きいため、研究者や学界の人々の賛同を得がたくしている。こうしたわけで、地質学における地層累重の法則を用いた新旧関係の把握が急務であった。しかし、数十年來にわたる発掘では地層的な上下関係が把握された例はごくわずかし確認されなかった。

1978～1984年、渭河上流域の葫芦河流域にある甘肅省秦安県五營郷大地湾遺跡の発掘調査により、長年にわたり解決するすべをもたなかった仰韶文化の新旧各段階の相互関係が徐々に明らかとなった。大地湾遺跡は面積が広いばかりでなく文化層の堆積も厚く、その内容も豊富な新石器時代早期における仰韶文化の遺跡である。本遺跡からは前代未聞の重大な発見と認識がもたらされ、先史人類がいかに発展してきたかに関する歴史的研究に多大な貢献をした。これをもって、国家文物局は1988年1月に大地湾遺跡を國務院交付による第3批全国重点文物保护单位に認定した。

## 1 甘肅省秦安県大地湾遺跡の概要



第1図 大地湾遺跡位置図 0 6公里

大地湾遺跡は、甘肅省秦安県五營郷邵店村に所在する中国新石器時代仰韶文化の遺跡である(第1・2図)。文化層の堆積は厚く(平均で2mに達する)、長期間にわたって営まれており、その内容も豊富で、前仰韶文化から仰韶文化を経て常山文化下層類型までを含む。遺跡の総面積は110万㎡ある。1978年7月から1984年までの7年間にわたり継続的に発掘調査が実施された。発掘面積は約13,800㎡で、総面積の百分の一程度に過ぎない。遺構は、

\*1甘肅省文物考古研究所副研究員・史前室主任  
\*2秋田県埋蔵文化財センター南調査課文化財主任

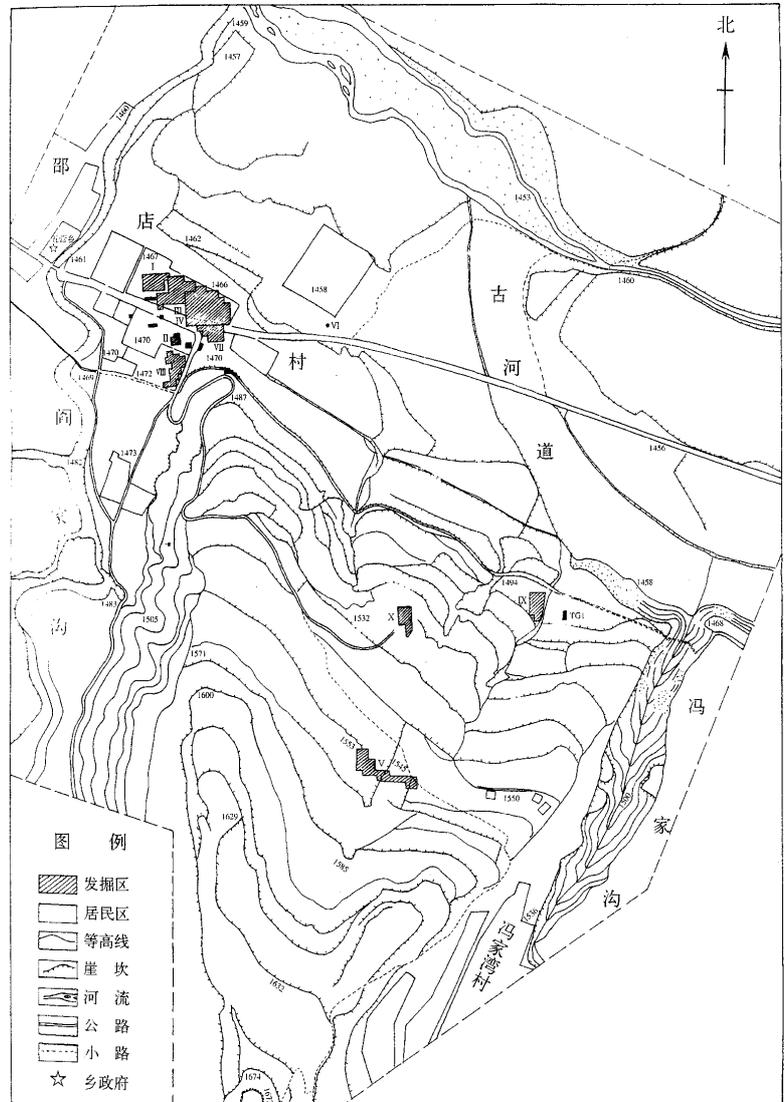
住居址 242 軒、貯蔵穴および土坑 322 基、墓 71 基、陶器焼成窯跡 35 基、カマド遺構 98 基が検出された。また、完形もしくは復元可能な陶器<sup>(訳註2)</sup>等の遺物は 8,000 点を越える。

大地湾遺跡の新石器時代文化は、今から 8,000～4,500 年前に相当する大地湾一期から大地湾五期までの 5 時期に区分することができる。遺跡には 3,000～4,000 年間の原始文化が連続してしており、あたかも歴史の本で「原始社会」のページを開いたかのようなのである。その成果は甘肅省史前文化の空白部を埋めるにとどまらず、仰韶文化の分期樹立に関する時間的尺度を提供し、中国考古学の調査研究等に大きく貢献した。本稿では、大地湾遺跡の内容を時期ごとに概観しながら仰韶文化の特徴を描き出し、あわせて同時期の縄文文化との比較検討を簡単にではあるが加えていきたい。

## 2 8,000 年前の前仰韶文化（大地湾一期）

大地湾一期文化は、中国新石器時代前仰韶文化早期に属す。前仰韶文化の遺跡は甘肅省、陝西省一帯で 30 箇所あまり確認されており、そのうち 10 箇所あまりが発掘調査されている。これらの遺跡の文化的特徴は基本的に同じであり、ひ

とつの文化系統に属する。前仰韶文化の早期段階である大地湾一期は、すでに陶器の盛行を示す円筒状罐、丸底鉢、球腹壺のほか、三足罐、三足鉢、丸足碗等に代表される。後三者の陶器は前三者のものに脚部が加えられて器形が変化したものである。多くの陶器外面には、回転押圧による「交叉縄文」が施されたり、大多数の鉢の口縁部は磨かれた後、紫紅色の顔料により彩色帯が施されたり（これは現在最古の彩陶であり、「甘肅彩陶」のルーツである）、罐と碗は口唇部に縄文を回転させることにより鋸歯状口縁が作り出されたりしている。覆い焼きによる焼成が採用されており、火は不均一で青灰色の斑が付く。焼成温度は摂氏 800 度前後である。陶器製作技術は現在知られている中で最古の方法のひとつである「内模敷泥法」<sup>(訳註3)</sup>（同様に古い陶器製作技法に「外范押圧成形法」<sup>(訳註4)</sup>と「泥片貼築法」<sup>(訳註5)</sup>がある。これらは長江流域の 9,000 年前の初期陶器製作に用いられた技法である）が



第2図 大地湾遺跡の地形および調査区位置図 0 250米

採用されている。

この器壁にも特徴があり、砂質土を胎土としてその表裏面に泥を薄く塗るという3層構造をなしている。それにもかかわらず器壁は3～5mmと非常に薄い。この内模敷泥法には3段階の製作工程がある。まず、先に成形された型の外面に砂質の胎土を貼り付ける。そして、その上に緻密な泥土を塗って回転縄文を施す。胎土が固まったのち型をはずし、その内面に緻密な泥土を塗って器体内面を磨く。

大地湾遺跡の骨器は錐がもっとも普遍的に見られる。それらの錐の多くは刃部磨製である。また、打製石器も多く出土している。1基の土坑中からは炭化した黍きびが発見された。これは大地湾人かほんが禾本植物の黍をすでに栽培していることを示しており、中国でもっともはやい穀物栽培の証拠のひとつである（訳註6）。

住居は楕円形の竪穴式住居であり、直径は2m前後、深さは1m未満で、スロープ状の出入口部が付設されているが、カマドや暖炉はない。周囲には住居中心に向かって傾いた柱穴があり、テントのような円錐状の木組み構造であったことがわかる。暖炉がないことは当時の気候がまださほど寒くなかったことを示している。この時期の墓の多くは長方形を呈した土坑墓で、単身仰身伸展葬である。副葬品は陶器類のほか豚の下顎骨を伴っているものもある。

大地湾遺跡では前仰韶文化中・晩期段階は発見されなかったが、甘粛省天水市と陝西省では当該期の遺跡が発掘されている。それらの陶器の特徴もまた筒状罐を主要器種としており、3つの脚部が加えられるものもあるが、その形状は大地湾一期にあるような脚端部が尖頭状をなすものではなく、乳頭状を呈している。このほかに丸底鉢、「假圈足碗」（訳註7）等が組成する。器壁は比較的厚手で、「泥条盤築法」（訳註8）により製作される。これはかなり進歩した陶器製作手法の一種である。焼成方法はいまだ多くが覆い焼きで、火勢は不均一で焼成温度も低い。

丸底を呈する筒状罐は日本における縄文文化草創期と早期にも盛行したものであり、前仰韶文化のものと非常に多くの共通点や類似点を見出すことができる。このうちもっとも共通性を見出せるのは、「模倣陶器」の製作であり、中国と日本でおおよそ同時期に出現し製作されている点である。中国の模倣陶器は前仰韶文化期の丸底鉢類で、これらの形態は、当時日常的に目にし食用された堅果類などの果実の殻を模倣したものと考えられる。一方、縄文時代における同一時期の模倣土器には、人生の最初に食べ物を得る乳房を模倣した乳房状の土器がある。

縄文時代早期の住居建築は一種の円形半地下構造（竪穴式）で、屋内の面積は前仰韶文化期に比べやや広いが、暖炉やカマド、縁辺部の柱穴等は発見されず、一条の壁溝が巡るのみである。これは早期の秋田県根下戸道下遺跡や宮城県松田遺跡等でみられる。これらは「掘立式」の建築構造と推定復元されよう。

### 3 6,000年前の仰韶文化早～中期（大地湾二・三期）

大地湾二・三期の文化は、黄河中流域の仰韶文化半坡類型（はんぱ）・廟底溝類型（びょうていこう）に相当する。この時期の陶器の種類は大地湾一期にくらべて非常に豊富で多様化している。主要なものには丸底鉢、丸底盆、平底盆、葫芦形瓶、細頸瓶、尖底瓶、小型平底深腹罐、尖底缸、平底缸等がある。大地湾二期には大量の模倣陶器がまだ継続して受け継がれている。たとえば丸底鉢、丸底盆、葫芦瓶、尖底瓶等がこの時期に最も多く組成する。大地湾三期にいたって平底皿の大量使用が開始され、丸底〈や尖底〉（訳註9）

の容器は基本的に姿を消す。陶器製作技術に関しては、大地湾二期（半坡類型）段階ではまだ内模敷泥法が多く採用されている。しかし、わずかな陶器には、先述した泥条盤築法という新しい技術が導入されている。新技術が採用されたことは、たとえば尖底瓶の底部に泥条盤築法の痕跡が残っている一方、平たく粘土を塗った〈内模敷泥法によって生じる〉線状痕は見当たらないということから明らかである。そして、大地湾三期には泥条盤築法による陶器製作が普遍的となる。同時に回転台による陶器の成形も始まる。大型缸、瓮類器、皿も同時に数多く出現した。陶器に用られた陶土は用途やニーズによって区別され、「細泥陶」、「泥質陶」、「挟細砂陶」、「挟粗砂陶」<sup>(訳註10)</sup>といった使い分けがなされる。火にかけて食べ物を煮炊きする罐類であれば、砂粒が不均一な挟砂陶を用いて破裂を防ぐ。食べ物を盛り付ける盆や鉢、皿類は細泥陶が供され、さらに細泥陶は黒色顔料により模様を描いて装飾される。この段階の石器や骨器等はすべて磨製で非常に滑らかかつ緻密に仕上げられている。食料は大量のシカ科以外には、豚や犬の飼育がみられる。また、黍や粟、菜種<sup>なたね</sup>などの穀物やアブラナ類の植物が発見されている。これらは陝西省西安市にある半坡遺跡でも発見された。

当該段階の住居跡については、陝西省一帯の早期初頭の住居址は円形を呈しているため今のところ保留したいが、その他の地方では方形あるいは長方形の半地下式住居が採用されている例が多い。仰韶文化早期の竪穴式住居の深さは60cm以上あったが、仰韶文化中期には40～50cmが主流となる。当時の人々は暗く湿気のある居住環境から脱するため、これまで深く掘っていた竪穴を浅く掘るように改変して床面の高さを上げ、そのうえ壁の芯材となる木柱を立てて壁を築いて空間を広げた。また、住居の一辺には長いスロープや階段を持つ門道（出入口部）が張り出すように作られ、あたかも卓球のラケット状を呈するような形態となっている。こうした様式を日本では「柄鏡形」と呼称している。屋内の出入口付近には円形を呈するカマドが1基付設される。カマド前面には門道に向かって通風用のトンネルがうがたれ、カマド後方には火種保存用の罐が埋設されるか穴がうがたれる。カマドの深さは時間の経過に伴って浅くなっていく。住居中央の主柱は4～6本あったものが2本にまで次第に減少するものの、柱や屋根などの木組みは力学的原理にかなった構造となっている。

日本で当該段階に相当する縄文時代前期の土器は、器形が非常に多様で、大地湾二、三期の陶器と類似するものも多い。たとえば、平底の円筒深鉢（罐）等がそれである。前期は依然として楕円形を呈する竪穴式住居であり、住居内には石囲いなどによる炉が出現する。しかし、住居周縁を巡る柱穴はない。わずかではあるが掘立柱建物跡も出現したと考えられる。たとえば、埼玉県関山貝塚における前期の方形竪穴住居跡は、大地湾二期の方形あるいは西安市半坡遺跡の円形半地下式住居の形式にきわめて近い。

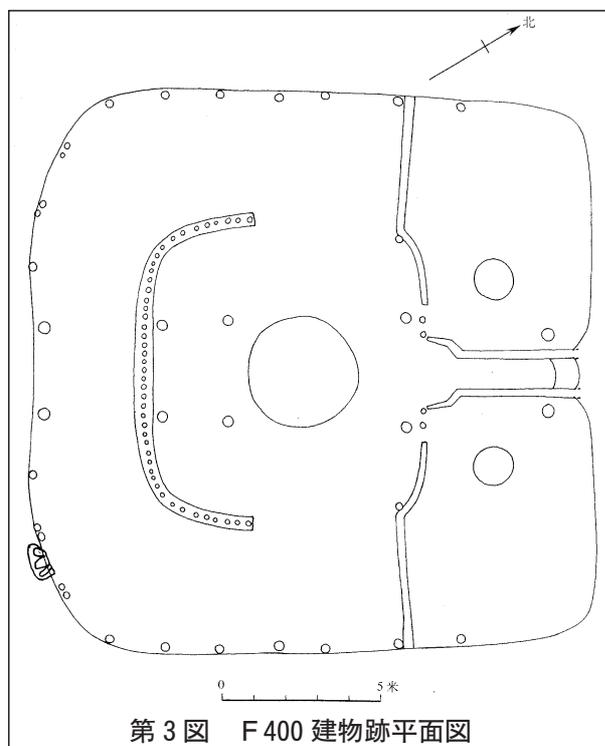
#### 4 5,000年前の仰韶文化晩期（大地湾四期）

大地湾四期は仰韶文化晩期段階に相当する。これは仰韶文化早～中期を継承的に発展させたものである。この時期は集落の人口が絶え間なく増加したため、人々は食料の確保と住居の建築に専念した。日常生活の道具としての陶器も需要が急激に増加し、このため、陶器の製作も幾分粗雑に行われるようになった。それゆえ、この段階の陶器は数量と器種が多くなったが、早・中期に大量に使用された細泥陶は少なくなり、泥質陶と挟砂陶が多くなった。主要な器種は盆、鉢、罐、缸、瓮、尖底瓶等であり、尖底瓶を除けばすべて平底となる。彩陶の数量もまた減少し、文様も自由奔放に描かれるよう

になる。文様として描かれる中で最も多いモチーフは、動物と水波紋、渦巻紋等である。ただし、陶器製作技術には改良されたところもある。基本的には泥条盤築法と回転台の整形によるが、あわせて回転台上の陶器を載せる回転盤を陶器の大きさによって交換可能とした(訳註11)。石器・骨角製品の製作もまた生活の需要に基づいており、精製品と粗製品とが区別されていた。たとえば、装飾品の加工は比較的精巧であるのに対して、日常的に用いられる石斧や石刀等はやや粗雑なつくりである。また、晩期には「陶量具」(訳註12)が新たにみられるようになる。陶量具は個人の所有に重きをおいた私有制の成立を示唆しており、その出現は原始共同体の根底を揺るがすこととなった。

この時期の住居建築は新しい段階へと入った。つまり、基本的には暗くて湿気のある竪穴もしくは半地下式構造の住居から平地式の住居建築へと移ったのである。地中に穴を掘って作られたカマドも改良され、地面上に台状のカマドが設けられるようになった。床面には、耐久性を保持して防湿効果を高めるために、現代のコンクリートと同じ強度を持つ石灰質のモルタル塗料が均一に塗られた。こうした床面を「白灰面」と呼ぶ。また特記されることとして、この時期に出現した「宮殿式」の大型建物の床面には人工の軽い骨材(軽石)と砂石の混合層が塗装されるという点がある。混合層の厚さは建物ごとに異なっている。壁は、芯材として大量の木柱(壁柱)が立てられた後、草泥土(草と泥土の混合土)を塗り固めて作られる。このようにして作られた壁を「木骨泥壁」(訳註13)と呼称している。たとえば、大地湾遺跡の宮殿式大型建物跡であるF400、F405、F901は今から5,000年前の仰韶文化晩期に帰属するが、これらの特徴は平地式の木骨泥壁建築で、居住面、壁面、支柱、壁柱に草泥土を塗って覆い、さらにその表面に石灰質のモルタルを塗布して硬化するようにしている。それ以外には次のような相違点もいくつかある。

F400は前方後円形の建築構造で、屋外の付属建築はないが、出入口部の東西両側に一室ずつ部

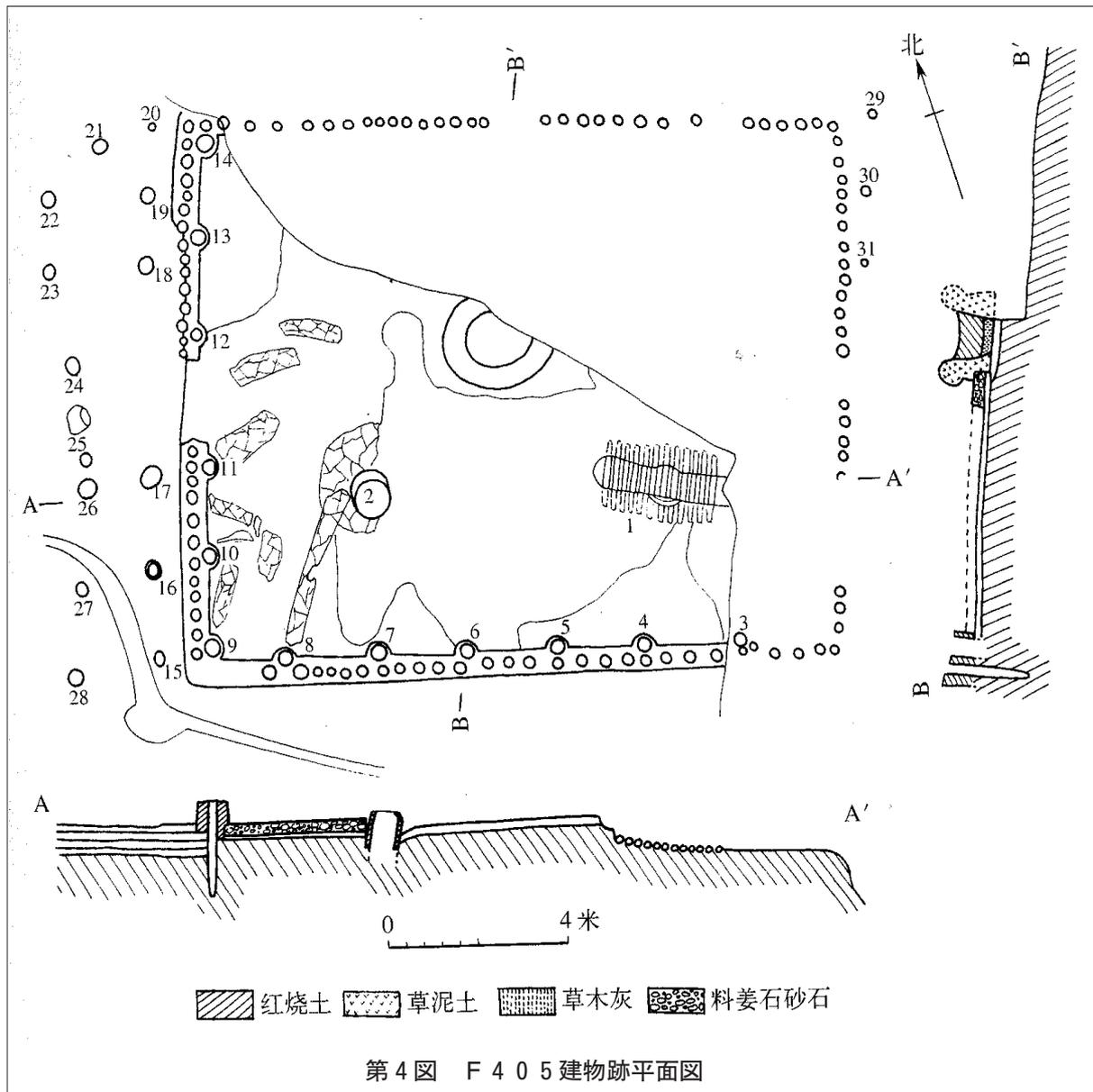


屋が設けられている(第3図)。床面には燃焼によって青灰色を呈したカマドが遺存している。大広間の後方には木骨泥で作られたU字形の仕切り塀があり、この塀により広間後方に形成された通路状の空間を「室内回廊」と呼んでいる。回廊の壁面には屋内炉が穿たれている(訳註14)。建築面積は約260㎡である。

F405は方形に近い大広間式建築と庇付き通路が組み合わさった形式である(第4図)。厚さ50cmの木骨泥壁があり、北壁面に正門、東西両脇に側門と通路がある。壁内側には24基の壁柱が巡っており、屋内の南側後方(訳註15)には屋根の梁を支える外径75cmの主柱が東西に各1基ある。正門付近には直径約170cm、高さ約80cmのキノコ状を呈した台状のカマドがある。屋外

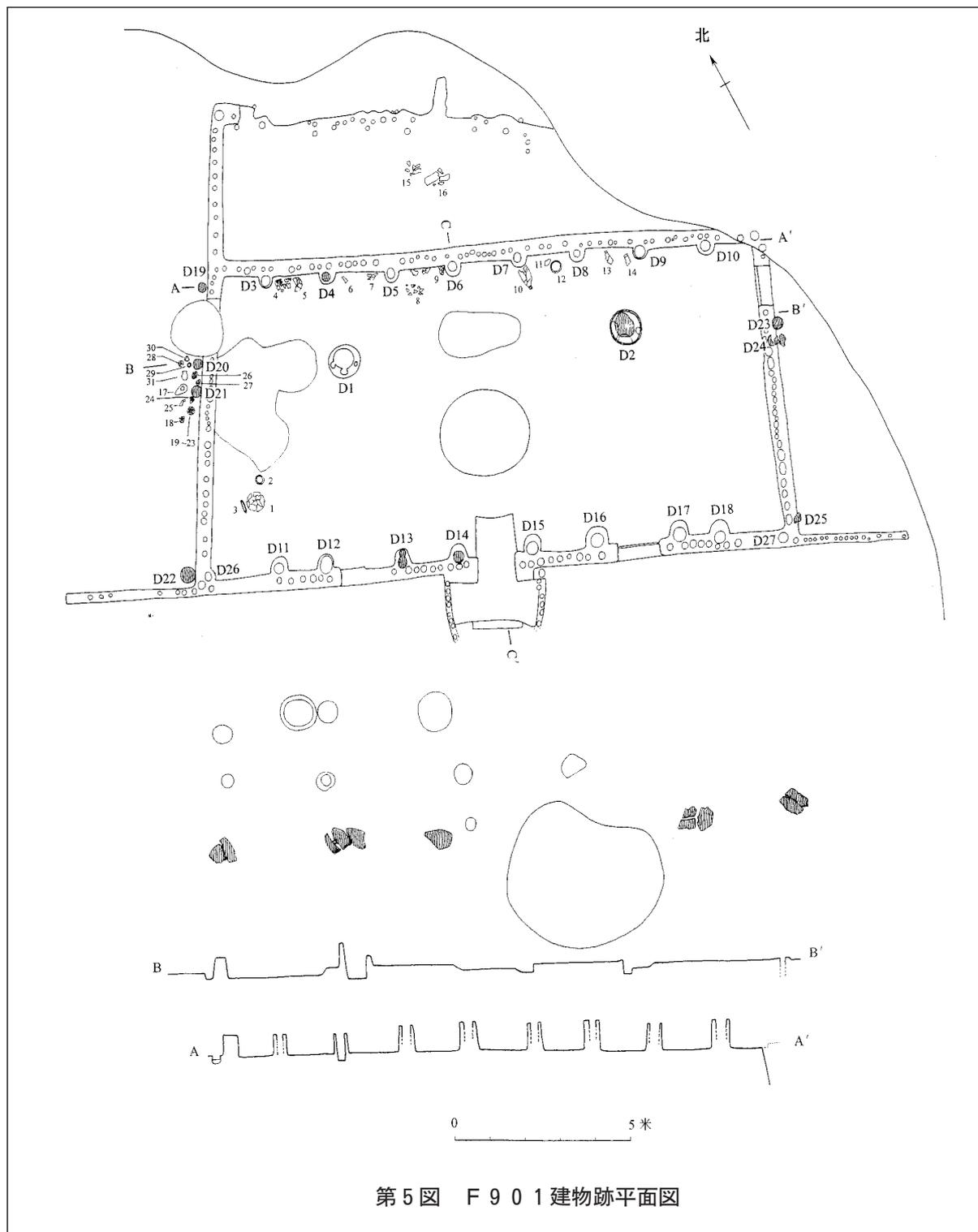
の東西両脇には庇状の通路がある。屋内面積は約150㎡で、全体の建築面積は約230㎡である。

F901は前室(主室)と後室があり、出入口にあたる建物前方には掘立柱の建築物、建物両脇に



は底付き通路〈<sup>しょうぼう</sup>廂房〉が付属する構造となっている（第5図）。木骨泥壁の厚さは45cmある。前室の前壁面と後壁面には各々8基の壁柱がある。さらに建物内中央部には外径90cmをはかる2基の支柱があるが、これは前室と後室を隔てる壁とわずか2.2mほどしか離れていないので、前室・後室との共同支柱となっていたことがわかる。正門の近くには直径2m強の円形大型カマド台があるが、その基台はわずか20cmしか残っていない。前室には計5つの門〈出入口〉と二つの窓が設けられている。このうち、前方壁面には、中央に1つの正門があり、その両側に各1つの脇門、それぞれの脇門のさらに外側には各々1つの窓がある。そして、東西に各々1つの側門があり、建物外部の底付き通路に通じている（<sup>訳注</sup>16）。正門出入口部の門道には庇がついており、門道両脇には掘立柱建物がある。前室の面積は約128㎡、後室の面積は約45㎡、これに建物外の掘立柱建物と底付き通路を加えた建築総面積は420㎡である。これは後代の中国における住居建築構造の前身である。

日本の縄文時代中期の土器群は、独特の造形と彫塑性の面で突出しているが、一部の土器には中国の仰韶文化と類似したものがある。たとえば、青森県三内丸山遺跡の円筒上層a式土器の深鉢、同県



泉山遺跡の円筒上層 b 式の深鉢、秋田県大畑台遺跡の円筒上層 d 式の深鉢、北海道では宮園遺跡の北筒(Ⅱ)式の深鉢、岐阜第Ⅲ遺跡の北筒(Ⅲ)式の深鉢、サイベ沢遺跡の円筒上層 b 式の深鉢、そのほか円筒上層 e 式の深鉢等、大地湾二、三期の「侈口深腹罐」(訳注17)に極めてよく似ている。とりわけ東北地方から北海道一帯にかけての類似性が突出している。今から4,000~5,000年前において、日本列島に居住していた縄文人と大陸側の中国には一定の関係あるいは文化の往来があったのであろう。しかし、土器の装飾技術、すなわち土器の彫塑技術の手法に関しては日本と中国で別々の方向へと向

かったと考えられる。中国中部は、彩絵陶器の装飾方式をまだそのまま継続的に発展させていた。ただし、中国東部の沿海地区で同時期にあたる大汶口文化<sup>だいぶんこう</sup>では、縄文時代のものと類似した彫塑や透かし彫りの装飾手法が新しく盛行するようになるが、これは偶然の一致ではないだろう(訳註18)。

この時期の日本の住居建築は、まだ多くが円形の浅い竪穴式住居である。あわせてとくに中期末から後期にかけて盛行するのは長い門道をもつ「柄鏡形住居跡」で、一般的な直径は4m前後と住居面積は拡大した。同時に掘立柱建物もわずかながら出現する。これは石組み炉や配石遺構等を周辺に伴うようである。とりわけ中・後期段階に至って、幾分大型の住居建築が出現し、同様に比較的大きな集落遺跡も出現する。たとえば秋田市松木台Ⅲ遺跡の環状集落では直径が10m前後にいたる大形住居跡がある。また、北秋田市森吉に所在する二重鳥B遺跡でもわりと大きな円形の住居跡がみられる。直径は7.6m、竪穴の深さは0.9mに達し、石で組まれた複式炉が1基あり、周囲は木板の壁を建てたと考えられる壁溝がある。こうした構造からも分かるように、当時の人々の防湿に対する意識は非常に強かったのであろう。その他に中期末からは高床式建物跡と立石<sup>(訳註19)</sup>による祭祀空間なども散見されるようになる。

## 5 4,000年前の後仰韶文化(大地湾五期)

大地湾五期は、中国中部では「常山文化」<sup>じょうざん</sup>、陝西省では「客省庄二期文化」<sup>きゃくしょうじょう</sup>と称され、甘肅省中部に分布するのは彩絵陶器の発達した「馬家窯文化」<sup>まかよう</sup>である。また、東部沿海地区に分布するのは「山東龍山文化」<sup>さんとうりゅうざん</sup>と呼ばれ、一種の透かし彫りによる黒陶を代表とする文化である。その器壁はかなり薄く、卵の殻のようである(訳註20)。東北地区に分布するのは「夏家店下層類型」<sup>かかてん</sup>と呼ばれ、これは「紅衣黒彩絵制卷雲紋」<sup>(訳註21)</sup>による「曲腹罐」が代表的である。大地湾五期の常山文化は実質上、仰韶文化が継続的に発展したものであり、「後仰韶文化」とも呼べる。陝西省の客省庄二期文化は、常山文化と同一の文化系列に属すが、分布する地域と発展時期を異にしている。つまり、常山類型段階と客省庄二期類型段階、そしてこれに橋村類型<sup>きょうそん</sup>段階が加わり、その各類型は常山文化の早・中・晩期の3つの発展段階に各々対応するのである。大地湾五期は常山文化の早期段階にあたる。この時期の陶器は、紅色泥質陶と挾砂陶、盆、鉢、壺、罐類が依然として多い。泥質陶の外表面には横走縄文による装飾が施され、挾砂陶には「粗縄文」<sup>(訳註22)</sup>が押圧された多條隆帯紋が付加される。彩絵陶器は急速に衰退していき、少量の褐紅色で描かれた簡単な図案があるのみとなる。常山文化中期、すなわち客省庄二期類型段階には中空の脚部が3つ付いた鬲<sup>れき</sup>や罍<sup>か</sup>類が出現する。

常山類型段階の比較的早い段階では住居建築は依然として白灰面の「柄鏡式」住居建築であるが、中期あるいは晩期段階に至って一種の「窑洞式」<sup>ヤオトン</sup>の住居建築が現れる。この種の住居も床面は白灰面であるが、出入口から奥へと延びる長方形の洞穴式建築である。窑洞式住居の導入により、木材の使用量が大幅に減少し、わずかの木柱でしっかり支えられた住空間を実現した。いかなる原因で、中国中部地区の先住民は豪華で乾燥した地面の居住環境から、比較的原始的な「崖洞式建築」といえる洞穴の居住空間へ転換したのだろうか。このことについては、森林の大量破壊もしくはその他の原因か今のところ満足のいく結論は出せない。その他に、この時期の遺跡には屋外に石棒類の祭祀具が置かれている例がわずかに発見されている。これは日本の縄文時代中期以降に出現する石棒や列石の祭祀行為と類似する現象である。

日本では、縄文文化中期後葉から後期段階の土器製作技術が実用性の面で進歩し、かわって透かし彫りが施された土器は減少・衰退した。これに伴って、祭祀的性格の強い土偶の製作と使用が非常に多くなる。住居構造に大きな変化はないが、屋内外に立てられた石棒や環状列石により構成される祭祀遺跡が多く発見されるようになる。たとえば、後期では、鹿角市大湯環状列石や同県伊勢堂岱遺跡、青森県小牧野遺跡、同県太師森遺跡、岩手県湯舟沢遺跡の環状列石など、大きなものでは直径が30～40mにいたる。これは集落遺跡とは違った性格を持つ。縄文時代後期の人々は常に自然災害に見舞われていたのだろう。人々はそうした状況下では、ただなす術もなく、天と神に祈るしかなかった。

## 6 結語

以上に、大地湾遺跡を中心として仰韶文化を概観し、主として東北地方の縄文文化との比較もあわせて行った(第6～8図)。総じて言えば、大地湾に代表される仰韶文化は中国中部における華夏民族文明の初源を示している。彼らの陶器製作技術は内模敷泥法に始まり、泥条盤筑法へと発展し、回転台による整形の過程へと至る。焼成方法は「平地堆積焼法」から、密封する「篋孔式」あるいは「火道式斜焼法」(訳註23)へ発展する。早期の紅色陶器の焼成温度は800度前後であり、晩期の橙黄色陶器および灰色陶器の焼成温度は1000度以上である。初期の陶器は堅果類の殻を模倣した丸底にはじまり、尖底器を主とする。中期以降はより便利なように改良された平底の皿類が主体となる。これは日本でみられる土器製作の発展過程に基本的な部分で相通するだろう。ただし次のような異なる側面もある。中国では、前仰韶文化の内模敷泥法による土器製作技術は、その始まりから器壁を非常に薄くすることができ、3層構造による成形にもかかわらず一般に3～5mmの厚さが保たれる。中期以降の泥条盤筑法による器壁でも厚さ8mm以内である。一方、日本の縄文時代草創期から前期に至る土器の器壁はかなり厚く一般的に1cm前後である。また、内外面も滑らかではないため、非泥条盤筑法によるか、もしくは泥片貼筑法により製作された可能性が高いだろう。加えて、縄文土器に用いられた陶土は比較的単純な粘土で、粘性の強い紅・黄色の石膏モルタル土が加えられていないため、密度差が大きく非常に脆い。平安時代に至って「ロクロー一次成形法」が一般的となるが、陶土の成分は依然として大きくは変わらない。

住居の建築構造では、中国中部地区の遠古の人々である旧石器時代の「崖洞式」居住から新石器時代の「深壑穴式」、「浅壑穴式」、「平地式」の各種住居建築を経て、崖洞式に近似する「窑洞式」へと至るという周期的な居住環境の変遷過程が見られる(訳註24)。しかし、「平地式」建築の居住方式は中国中部以外のその他の地方ではそのまま継続的に発展し、商(殷)・周代以降の「高台式」へと発展する(訳註25)。この種の建築構造も中国における代表的な建築である。その他に、中国では仰韶文化を含めたすべての原始文化がそうであるが、各集落遺跡で住居跡がかなり密集しており、求心的な集落構造を発展させてきた。

日本列島の場合、住居跡は相対的にかなり散漫であり、関東地方と北海道一帯を除いて、縄文時代中期から後期に比較的多く出現する大形の集落遺跡以外は、多くが小群落の組織構造を示しているようである。このことは、当時の自然環境あるいは人口の問題と関係している可能性がある。円形を呈する壑穴式住居は一貫して住居建築の特徴であり続ける。発掘事例からは、「壑穴式」・「浅穴式」住居には石の使用があまり多く見られない。一方で、環状列石のある遺跡では、列石構築のため大量

の石が用いられており、集落遺跡と一線を画した祭祀遺跡といえよう。また時として、環状に配された石は屋内炉や住居壁際に多く分布する傾向にある。住居縁辺に巡らされた石は当時の人々が屋外と隔絶するために設置したものであろう。それは精神的な意味合いよりも、あくまで機能的な側面が強いと考える。つまり、住居は海風を受けやすく、このため屋根や壁などがあおられて、飛ばされやすい環境にあったと考えられる。そうなれば住居内は土に埋もれたり腐朽したりしやすい。このため、葺き降ろされた屋根や壁を石で抑える方法を採用し、住居を長期間にわたって保持して使用に耐えるものとしたと推測される。ただし、全てではないにしろ祭祀的な意味合いもあっただろう。また、こうした住居の屋根は必ずしも草木類を葺いたとは限らず、獣皮もしくは樹皮類であった可能性もある(訳註26)。これは海風や雨水を防ぐためにはより効率的で、日本のように風雨の多い自然環境には適していると考えられる。

訳註1 中国の古称。

訳註2 日本考古学では一般に「土器」を用いるが、中国考古学では「陶器」と呼称する。ここでは各国の名称法を優先させる。

訳註3 型(かた)の外側に粘土を貼り付けて陶器を作る方法。型起し法。後述の「外范押圧成形法」とは技法上、表裏一体の関係になる。型は陶製のもので大地湾遺跡で出土しているが(第11図8)、ほかに木製のものなどもあったかもしれない。縄文時代晩期の「籠型土器」・「籠目文土器」は参照すべき事例であろう。

訳註4 型(かた)の内側に粘土を貼り付けた後、型をはずしてたたき出しながら整形して土器を作る方法。「范」は鋳型の意。

訳註5 粘土片を貼り合わせながらかたちを作る、いわゆるパッチワーク技法。

訳註6 大地湾遺跡のほかに河北省磁山遺跡や河南省裴李崗遺跡等で最古級の粟や黍の栽培の証拠が見つかっている。中国では華北で粟・黍が、華中で稲の栽培がなされるという地域差が見られる(宮本2005)。

訳註7 いわゆる偽高台。

訳註8 陶器製作技術の一つで、ロクロ成形によらず、粘土紐をらせん状に巻き上げて叩き成形する巻上げ技法。

訳註9 〈 〉は訳者補足。以下同じ。

訳註10 「細泥陶」は緻密質粘土による陶器で、後述するように鑑賞にもたえる精製土器。「泥質陶」はより粗雑な陶土による粗製の陶器で日常的な使用に供された。「挟細砂陶」は細砂粒と粘土の混合土による陶器で耐火性に優れ、「挟粗砂陶」はより粗い砂粒と粘土の混合土による陶器。

訳註11 従来の回転台は陶器を載せる回転盤(中国語では「托盤」=トレイの意)との一体型であった。

訳註12 度量衡の「量」。陶製の計量具で、大きさにより条形盤(約265cc)・錘形抄(約2650cc)・箕形抄(約5300cc)・四把深腹罐(約26000cc)の四種が知られる(第11図9)。これらは2倍・5倍・10倍といった関係にある。ちなみに大地湾二期からは「度」である骨製の尺が出土している。

訳註13 すなわち、木柱を骨組みとした泥土の壁という意味。

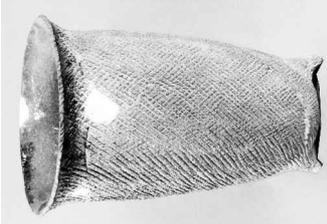
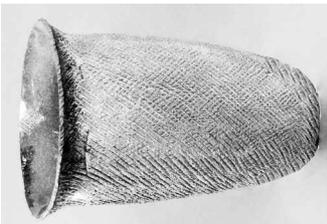
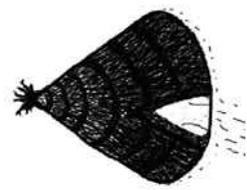
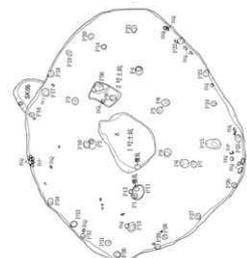
訳註14 この壁面炉には、壁面中に煙突状の煙道が通されているようである。

訳註15 ここでは建物正門側を「前方」とし、その奥を「後方」と表現してある。

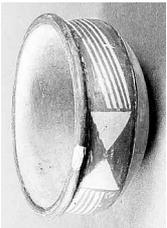
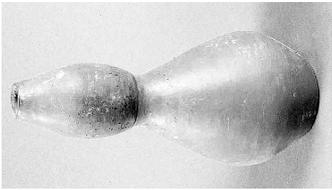
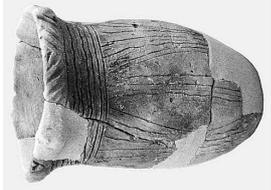
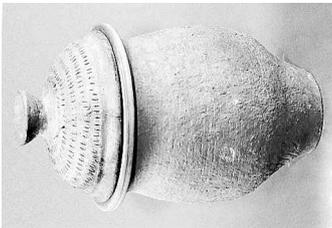
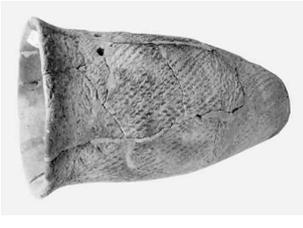
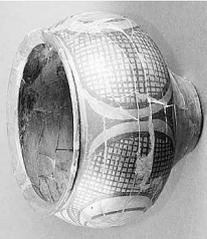
訳註16 前室と後室は壁で完全に遮断されている。そのため、前室から後室へは、いったん建物外の庇付き通路に出てからではないと入ることができない。

訳註17 「侈口深腹罐」は口縁部が外反する深鉢。このほかに、口縁部が直立するものを「直口」、口縁部が胴部からラッパ状に外反するものを「敞口」、口縁部が内湾するものを「斂口」という。

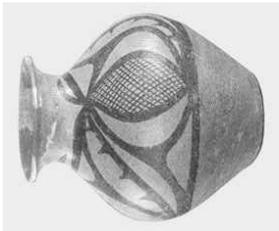
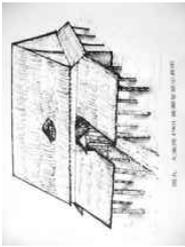
仰韶文化と秋田県の縄文土器・遺構対比図(1)

名称 遺物 時代	前仰韶文化	縄文時代草創期	縄文時代早期	一 万 年 至 七 千 年					
	丸底鉢 と 丸底浅鉢   大地湾一期	 大地湾一期	鉢形鼎   大地湾一期	三足罐  	上、筒形罐 下、住居跡  	上、住居跡 下、推測復元   早期房跡推測復元	大館市根下戸道下遺跡   大館市根下戸道下遺跡	大館市根下戸道下遺跡   大館市根下戸道下遺跡	大館市根下戸道下遺跡   大館市根下戸道下遺跡

仰韶文化と秋田県の縄文土器・遺構対比図（2）

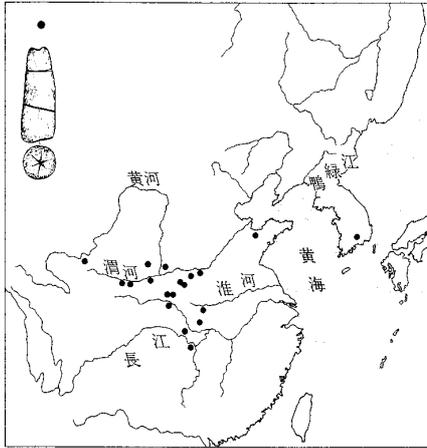
名称 遺物 時代	仰韶文化早、中期		縄文时代前期	
	六千五百年至五千年			
丸底鉢 と 丸底浅鉢		大地湾二期		横手市下田遺跡
丸底盆 と 平底深鉢		大地湾二期		大仙市上ノ山Ⅱ遺跡
葫芦瓶 と 円筒深鉢		大地湾二期		大館市池内遺跡
夾砂罐 と 円筒深鉢		大地湾二期		大館市池内遺跡
曲腹盆 と 曲腹浅鉢		大地湾三期		大館市池内遺跡
住居跡		大地湾二期房跡		縄文时代前期後葉房跡

仰韶文化と秋田県の縄文土器・遺構対比図（3）

名称 遺物 時代	仰韶文化晚期	繩文时代中期	
	五千年至四千五百年		
雙蓋盆 と 雲口淺鉢		大地湾四期	湯沢市堀量遺跡
彩陶壺 と 束頸深鉢		大地湾四期	三種町和田Ⅲ遺跡
帶蓋罐 と 円筒深鉢		大地湾四期	三種町和田Ⅲ遺跡
彩陶盆 と 折肩淺鉢		大地湾四期	湯沢市堀量遺跡
F901 建物跡 と 高足深鉢		大地湾四期 F901 房跡	三種町和田Ⅲ遺跡
F901 推測復元 と 縄文中期住居跡		F901 房跡推測復元	北秋田市深渡遺跡

訳注18 別々に発展した装飾技法も日本に近接した中国東部では相互に影響があったと趙氏は考えている。

訳注19 趙氏は配石遺構や環状列石、石棒などを同じ範疇で捉えて議論を進めている。なお、石棒に類する資料は中国でも発見されているが、その場合、「陶祖」と呼ばれる陶製のものが一般的であるらしい（第9・10図）。趙氏によると、陶祖は象形文字の「且」にあたるという。これは祖先の「祖」を意味する。陶祖自体は男根偶像であることから、仰韶文化晩期には母系制社会から父系制社会へと社会が大きく移り変わったことを示している。



第9図 陶祖分布(宮本 2005 より転載。原典は甲元・今村 1998)

甲骨文



第10図「祖」の字の成り立ち

金文

(漢語林より)



漢語林では、「且は、祭器で、肉をのせる台の象形。そなえ

篆文

物をして祭る祖先に意味を表す」とある。



訳注20 中国では「卵殻黒陶」と呼称される。

訳注21 赤褐色の器面に黒色顔料で描かれた渦巻紋のこと。

訳注22 縄文の太さにより、細い縄文を「線紋」、太い縄文を「粗縄文」等と呼称する。

訳注23 「甕孔式」は土をかぶせて多数の煙道をあけて焼く覆い焼きの方法、「火道式斜焼法」は窯を築き、床面に煙道を通して焼成する方法。

訳注24 ここでいう「周期的」とは、旧石器時代の「洞穴式」から新石器時代の「深い堅穴式」→「浅い堅穴式（浅穴式）」を経て再び旧石器時代の「洞穴式」に似た居住環境へと回帰するということを意味する。

訳注25 言い換えれば甕洞式住居は中国中部の黄土高原という環境にのみ適応した居住形態であるといえる。その他の地域で発展した「高台式」とは基壇を持った宮殿式建築構造をさすのであろう。

訳注26 趙氏は土葺き屋根についても疑義を呈しており、たとえば焼失家屋に見られる粘土塊は消火用の土と推測している。

#### 翻訳者による解説

本稿は、平成19年度秋田県甘肅省文化交流事業により来秋された甘肅省文物考古研究所副研究員である趙建龍氏に執筆していただいた論考「有関中国仰韶文化与日本縄文文化的文化同異問題」の日本語訳である。趙氏は1954年甘肅省金昌市に生まれ、北京大学で考古学を専攻された。専門は新石器時代である。卒業後の1978年には甘肅省文物考古研究所に入所し、同年に始まった甘肅省秦安県大地湾遺跡の発掘調査に参加した。以降、大地湾遺跡の整理作業から報告書刊行までご尽力された。氏は甘肅省交流員として、当センターで遺跡の発掘調査や整理作業、本県における考古学や埋蔵文化財保護行政の現状などを平成19年7月上旬から平成20年1月初旬の6か月にわたり研修された。中国新石器時代に関して高い専門性を有しており、また研修中は縄文時代の遺跡や土器等にも強く興味を示された。そこで、本研究紀要誌上にて、甘肅省の新石器時代を紹介してもらいながら縄文時代と

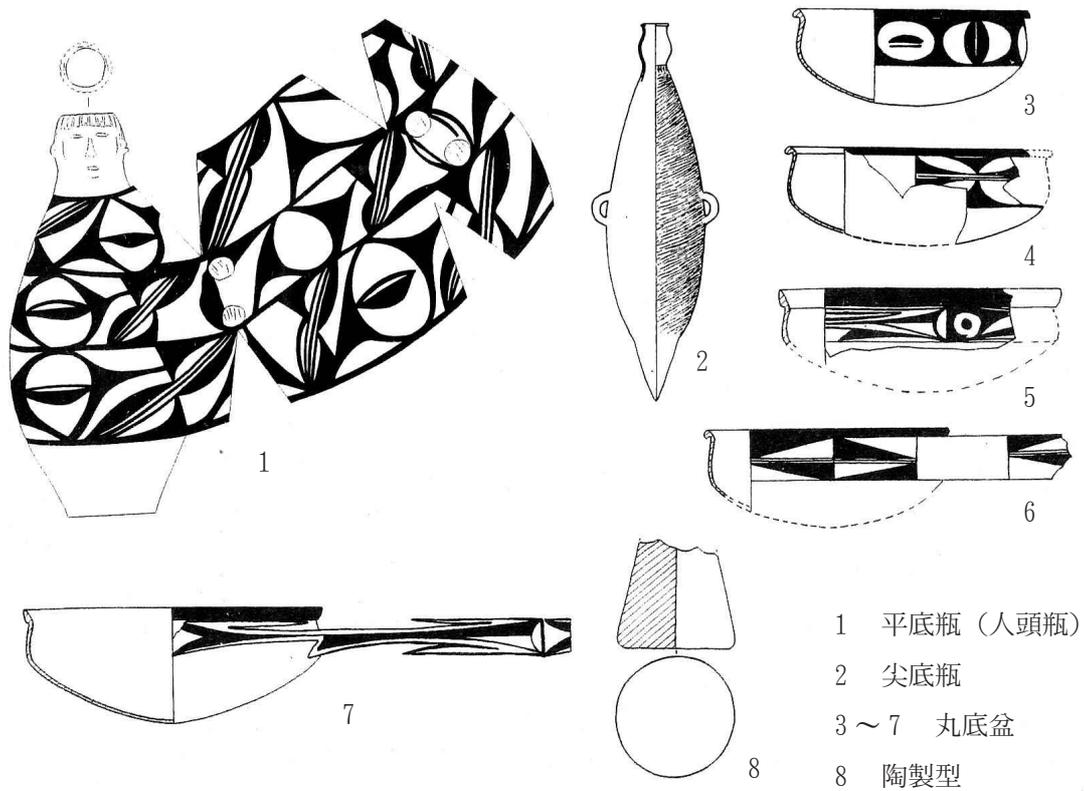
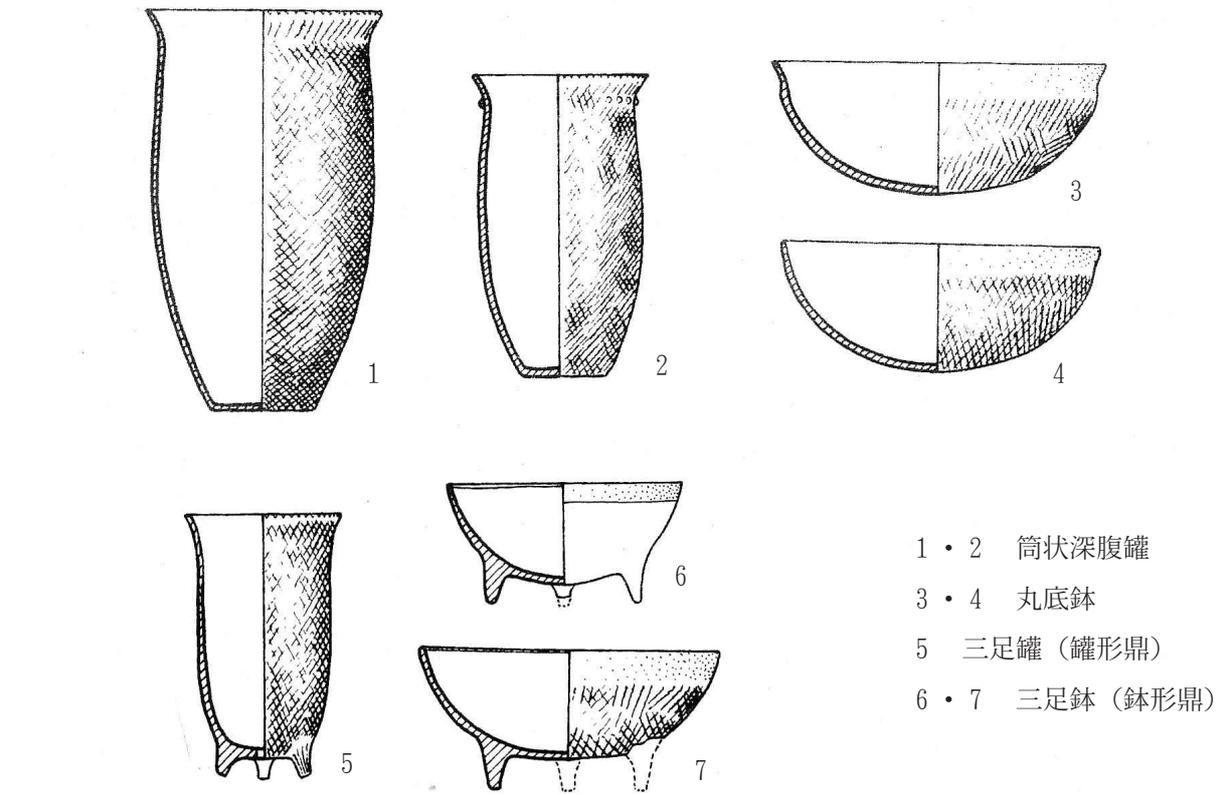
の簡単な比較・考察をしていただけないかと当方から提案した。これに対し、時間のない中であったが快く引き受けてくださったばかりではなく、原稿の準備から稿了まで1か月足らずという早さで書き上げていただいた。ただ、諸事情によって、本来の7か月間の研修期間を短縮しての緊急帰国となり、最終的な詰めの作業が行えなかったことが残念である。なお、訳出にあたってはなるべく原文に忠実に行った。中国考古学の用語をそのまま採用したため補足説明の必要が生じた箇所等については、すべて訳注として記した。趙氏へ確認をしながらの翻訳作業となったが、なお、確認作業が不十分であることは否めない。それらはすべて訳者の怠慢と力量不足によるところである。

さて、本稿では、趙氏がこれまで関わってきた大地湾遺跡の調査成果をもとに中国新石器時代仰韶文化を時間軸に沿って紹介している。前仰韶文化・仰韶文化早期・仰韶文化中期・仰韶文化晩期の各期において、土器の器種組成と製作技法、住居・集落のあり方、社会制度等の項目について詳細に説明されている。そして時期ごとに縄文時代との比較が試みられる。全てにおいて非常に興味深い内容であるが、とくに注目すべきは、大陸的な観点での日中の土器に関する議論や縄文時代における竪穴式住居の構造を防湿の側面から考察している点であろう。両国を横断的に見ることにより、同時代をより大きなスケールで俯瞰的に眺めることの重要性を痛感させられる。仰韶文化と縄文文化とは直接的に比較できないものの、趙氏の縄文時代に対する視点は、日本の研究者にとって馴染みのない点もあるが、大陸的な視野で述べられた幾つかの指摘は今後の縄文時代研究に少なからず貢献するであろうと考える。

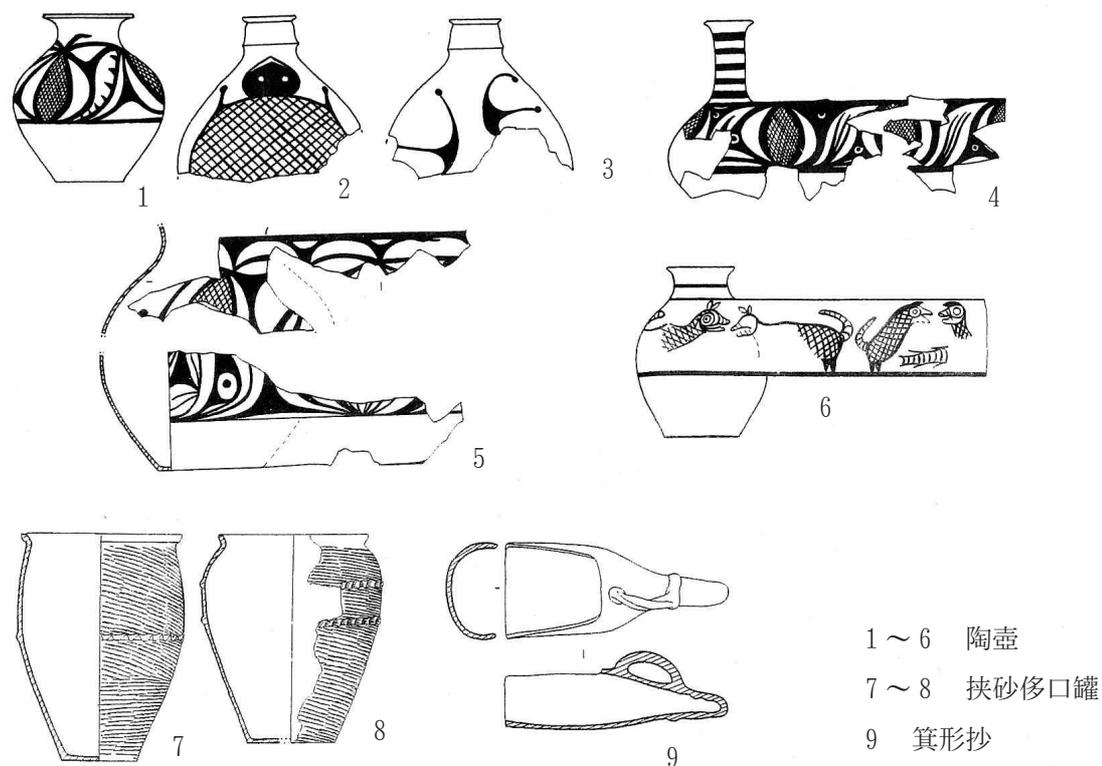
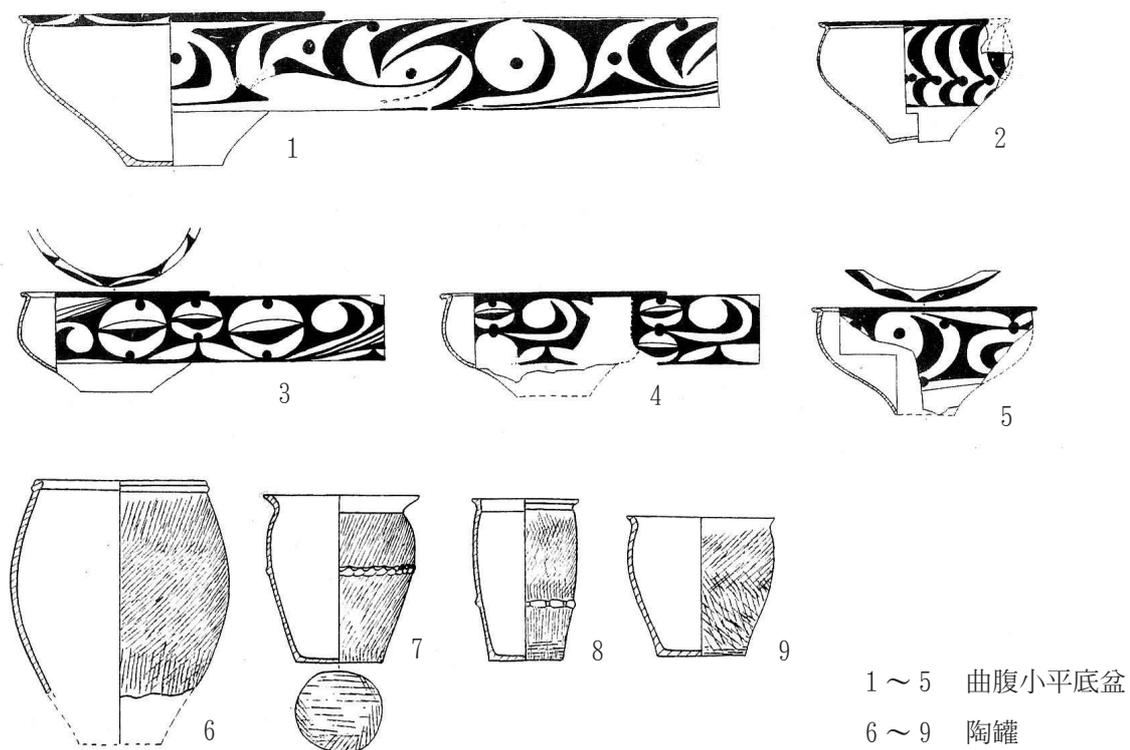
なお、理解の便宜を図るために補足として挿図を訳者が追加した（第1～5図、第11～13図）。

訳出にあたっては、以下の方々にご教示いただいた。末筆ですが記して感謝いたします。

櫻田隆 高橋学 武藤祐浩 加藤朋夏 新海和広 王義軍（順不同・敬称略）



第11図 大地湾一期（上段）・二期（下段）の出土陶器（縮尺不同）



第12図 大地湾三期（上段）・四期（下段）の出土陶器(縮尺不同)



第13図 大地湾五期出土罐(縮尺不同)

【参考文献・図版出典】(紙数の都合上、遺跡発掘調査報告書は一部省略させていただいた。※は翻訳者参考文献。)

秋田県教育委員会 1997『池内遺跡—国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ—』秋田県文化財調査報告書 第268集

小澤正人 2005「中国新石器時代土器の焼成と地域性」『世界の土器づくり』佐々木幹雄・齋藤正憲編 同成社

甘肅省文物考古研究所 2006『秦安大地湾—新石器時代遺跡発掘報告—』上・下巻

※鎌田正・米山寅太郎 1991『漢語林 改訂版』大修館書店

※甲野勇『縄文土器の話』学生社

※小澤正人・谷豊信・西江清高 1999『世界の考古学⑦中国の考古学』同成社

※張光直(量博満訳) 1980『考古学よりみた中国古代』雄山閣考古学選書

※趙春青・秦文生 2006『図説中国文明史1 文明の胎動』創元社

東京国立博物館『土器の造形—縄文の動・弥生の静—』

※宮本一夫 2005『中国の歴史0 1 神話から歴史へ』講談社

※武藤祐浩 1995「大地湾遺跡について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号

※謝瑞瑤 2002『甘青地区史前考古』文物出版社

## 秋田県考古学関係文献抄録（8） —縄文時代①—

利部 修\*

ここでは論文や論考を主として扱い、簡単な紹介・宣伝とか感想・トピックス的な記述はなるべく避けた。また県市町村史や、報告書におけるまとめ等の記述も割愛してある。

1955（昭和30）年～2007（平成19）年

1955. 6. 諸橋守之「上新城から発見の土偶」『秋田考古学』創刊号 秋田考古学協会
1955. 10. 磯村朝次郎「秋田県における先史硬玉製品」『秋田考古学協会』第2号 秋田考古学協会
1955. 10. 根田信隆「炉址に土器を伏せた新例」『秋田考古学』第2号 秋田考古学協会
1955. 11. 大和久教諭「能代市柏子所貝塚調査略報」『教育秋田』第76号 秋田県教育委員会
1956. 3. 秋田大学史学会学生部会「秋田県平鹿郡大森町八沢木「村の歴史」共同研究報告」『秋大史学』7 秋田大学史学会
1956. 3. 川口重一「大湯町環状列石の配置」『郷土文化』第11巻第1号 郷土文化会
1957. 1. 安保彰「小坂町に於ける縄文土器について」『秋田考古学』第6号 秋田考古学協会
1957. 5. 西村正「県内貝塚の貝について」『秋田考古学』第7号 秋田考古学協会
1957. 9. 奈良環之助「柏子所貝塚見学記」『秋田考古学』第8号 秋田考古学協会
1957. 9. 岩見誠夫「寺内神屋敷採集土器について」『秋田考古学』第8号 秋田考古学協会
1957. 9. 佐々木隆「本荘市金山」『秋田考古学』第8号 秋田考古学協会
1958. 2. 大和久震平「柏子所貝塚出土の人骨について」『秋田考古学』第9号 秋田考古学協会
1958. 5. 中島巖「由利郡西目出土魚形文刻石」『秋田考古学』第10号 秋田考古学協会
1958. 7. 安保彰「岩偶考」『出羽路』第3号 秋田県文化財保護協会
1959. 3. 笹原竹三「考古行脚—由利の縄文文化の遺跡をたづねて—」『鶴舞』創刊号 本荘市文化財保護協会
1959. 3. 大和久震平「秋田県能代市柏子所貝塚出土の骨角器」『考古学雑誌』第44巻第4号 日本考古学会
1959. 5. 安保彰「小坂町下大谷地発見の環状列石」『出羽路』第6号 秋田県文化財保護協会
1959. 5. 笹原竹三「考古茶話—本荘市並びに由利郡出土の石やじり—」『鶴舞』第2号 本荘市文化財保護協会
1959. 12. 船木勝雄「男鹿市椿中山縄文遺跡」『秋田考古学』第13号 秋田考古学協会
1959. 12. 嵯峨勘左衛門「積石塚発見」『秋田考古学』第13号 秋田考古学協会
1959. 12. 安保彰「小坂出土土器石器一覧表」『秋田考古学』第13号 秋田考古学協会
1959. 12. 安保彰「小坂出土石器並に石製品土製品一覧表」『秋田考古学』第13号 秋田考古学協会
1960. 11. 大和久震平「円筒上層式の細分」『秋田考古学』第16号 秋田考古学協会
1960. 11. 安保彰「小坂町の縄文文化二題」『秋田考古学』第16号 秋田考古学協会

\* 秋田県埋蔵文化財センター南調査課長

1960. 11. 大和久震平「大乘院遺跡発掘調査報告」『横手郷土史資料』第33号 横手郷土史編纂委員会
1961. 6. 江坂輝弥「藤株遺跡と木村善吉氏」『秋田考古学』第18号 秋田考古学協会
1961. 11. 興野義一「秋田県の大木式2B土器」『秋田考古学』第19号 秋田考古学協会
1961. 11. 安保彰「小坂町出土の縄文前期の岩版についての一考察」第19号 秋田考古学協会
1962. 9. 奥山潤「角間崎貝塚」『秋田考古学』第21号 秋田考古学協会
1963. 9. 県立鷹巣農林高校附属農林博物館「北秋田郡鷹巣町出土香炉型土器」『秋田考古学』第22号 秋田考古学協会
1963. 9. 奥山潤「秋田市周辺の縄文晩期末及後続期の遺跡概要」『秋田考古学』第22号 秋田考古学協会
1963. 12. 奈良修介・山下孫継・富樫泰時「雄勝郡雄勝町岩井堂洞穴遺跡発掘調査略報」『秋田考古学』第23号 秋田考古学協会
1963. 12. 永瀬福男「刈和野の青竜刀型石器」『秋田考古学』第23号 秋田考古学協会
1964. 7. 富樫泰時「雄勝町院内岩井堂第二洞穴下層の土器について」『秋田考古学』第24号 秋田考古学協会
1965. 5. 富樫泰時「昭和町狐森出土の土器」『秋田考古学』第25号 秋田考古学協会
1965. 6. 佐々木雷翁「金属含有の縄紋土器」『出羽路』第26号 秋田県文化財保護協会
1965. 11. 山下孫継「秋田県雄勝町岩井堂第四洞穴発掘調査報告」『出羽路』第28号 秋田県文化財保護協会
1967. 2. 豊島昂「第三章 縄文式文化」『秋田県の考古学』 吉川弘文館
1967. 3. 山下孫継「3 秋田県岩井堂岩陰」『日本の洞穴遺跡』 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
1967. 7. 大館鳳鳴高校社会部「北秋田郡比内町独鈷出土の縄文式土器」『秋田考古学』第26号 秋田考古学協会
1967. 12. 富樫泰時「藤株遺跡とその周辺」『出羽路』第36号 秋田県文化財保護協会
1968. 5. 奥山潤・高橋昭悦「円筒下層A式およびその直前の土器(大館市周辺の状況)」『秋田考古学』第27号 秋田考古学協会
1968. 5. 武石孝「五城目町出土の石冠と石棒」『秋田考古学』第27号 秋田考古学協会
1968. 5. 奥山潤・高橋昭悦「(人面)動物土偶 大館市曲田」『秋田考古学』第27号 秋田考古学協会
1968. 6. 阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻第1号 日本考古学会
1968. 7. 五十嵐芳郎「秋田産黒耀石」『出羽路』第38号 秋田県文化財保護協会
1968. 12. 岩見誠夫「南秋田郡八郎潟町沢田遺跡調査報告」『秋大史学』16 秋田大学史学会
1970. 2. ぬめ・ひろし「縄文中期における農耕文化私考」『出羽路』第41号 秋田県文化財保護協会
1971. 6. 斎藤忠「大湯環状列石と日本の縄文時代の類似遺跡について」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会

1971. 6. 江坂輝彌「縄文時代の配石遺構について」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会
1971. 6. 奥山潤「秋田県北鹿地方の縄文期配石墳墓（特に矢石館石棺と小坂環状列石墳墓）」『北奥古代文化』第3号 北奥古代文化研究会
1972. 2. 五十嵐芳郎「秋田地方の黒輝石について」『秋田考古学』第30号 秋田考古学協会
1972. 7. 高橋昭悦「大館市野沢岱採集・青竜刀石器と伴出遺物について『火内』創刊号 大館市史編さん委員会
1972. 7. 泉明「入道崎昆布浦採集の土器片」『男鹿半島研究』第1号 男鹿地域研究会
1972. 7. 磯村朝次郎「男鹿半島目潟周辺の遺跡および遺物」『男鹿半島研究』第1号 男鹿地域研究会
1972. 7. 磯村朝次郎「男鹿半島産の黒曜石の原石について」『男鹿半島研究』第1号 男鹿地域研究会
1973. 4. 小玉準「縄文時代晩期土偶の一例」『男鹿半島研究』第2号 男鹿地域研究会
1973. 12. 田村栄「石匙という名の石器—大館市及びその周辺の考古学資料について—」『火内』5号
1973. 12. 磯村朝次郎「八郎潟干拓地にあらわれた縄文期の遺物」『男鹿半島研究』第3号 男鹿地域研究会
1973. 12. 小玉準「男鹿市椿中山遺跡緊急調査概報」『男鹿半島研究』第3号 男鹿地域研究会
1973. 12. 泉明「鹿の沢遺跡採集の鐸形土製品」『男鹿半島研究』第3号 男鹿地域研究会
1973. 大友俊和「地方遺跡採集の石製装飾品について」『秋田考古学』第31号 秋田考古学協会
1974. 5. 富樫泰時「円筒土器分布圏が意味するもの」『北奥古代文化』第6号 北奥古代文化研究会
1975. 3. 五十嵐芳郎「秋田地方出土石鏃の基礎的実験」『秋田考古学』第32号 秋田考古学協会
1975. 3. 永瀬福男「二ツ森古館堤頭遺跡緊急調査報告」『秋田考古学』第32号 秋田考古学協会
1975. 3. 庄内昭男「能代市相染森遺跡のフラスコ状ピットについて」『秋田考古学』第32号 秋田考古学協会
1975. 5. 門間光夫「歴史探訪① 大湯環状列石」『教育秋田』第310号 秋田県教育委員会
1975. 7. 小川武「貝塚と菖蒲崎」『鶴舞』第30号 本荘市文化財保護協会
1975. 12. 富樫泰時「菖蒲崎貝塚と秋田の貝塚」『鶴舞』第31号 本荘市文化財保護協会
1976. 8. 富樫泰時「東成瀬村発見の有舌尖頭器」『秋田考古学』第33号 秋田考古学協会
1976. 8. 岩見誠夫「中角境遺跡のフラスコ状ピット」『秋田考古学』第33号 秋田考古学協会
1976. 8. 大友俊和「宝竜崎のフラスコ状ピット」『秋田考古学』第33号 秋田考古学協会
1976. 10. 富樫泰時「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』 東北考古学会
1976. 10. 船木義勝・鎌田俊昭「秋田県茂屋遺跡出土の岩偶について」『遮光器』2号 みちのく考古学研究会
1978. 3. 富樫泰時「人面付環状注口土器」『考古学雑誌』第63巻第4号 日本考古学会
1979. 3. 磯村朝次郎・渡部晟「女川貝塚出土の遺物について」『秋田県立博物館研究報告』第4号 秋田県立博物館
1980. 3. 金子浩昌「女川貝塚採集の動物骨と骨角加工品」『男鹿半島研究』第10号 男鹿地域研究会

1981. 2. 永瀬福男「秋田県内におけるフラスコ状ピットについて」『秋田地方史論集』みしま書房
1981. 2. 富樫泰時「秋田県縄文時代集落研究の現状と課題」『秋田地方史論集』みしま書房
1981. 3. 永瀬福男「秋田県・杉沢台遺跡検出の大形堅穴住居跡」『考古学雑誌』第66巻第4号  
日本考古学会
1981. 4. 武藤康弘「小阿地遺跡C地区出土の縄文時代前期前半の遺物について」『秋田考古学』  
第37号 秋田考古学協会
1981. 4. 安田忠市「上新城中学校遺跡発見の両頭石斧について」『秋田考古学』第37号 秋田考  
古学協会
1981. 7. 富樫泰時「石器時代の本荘由利地方についてー佐藤正吉先生遺稿ー」『鶴舞』第42号  
本荘市文化財保護協会
1982. 3. 磯村朝次郎・金子浩昌・渡部晟「大野地遺跡(縄文時代前期)の出土遺物とその意義ー  
自然遺物を中心としてー」『秋田県立博物館研究報告』第7号 秋田県立博物館
1982. 3. 秋元信夫「発掘調査の成果と今後の課題ー主に天戸森遺跡についてー」『上津野』第7号  
鹿角市文化財保護協会
1982. 5. 富樫泰時「縄文の集落の大型住居〈資料紹介〉」『考古学ジャーナル』No.203 ニュー・  
サイエンス社
1982. 5. 富樫泰時「本荘市川口菖蒲崎子吉川川底採集の遺物について」『本荘市史研究』第2号  
本荘市史編さん室
1984. 2. 富樫泰時「秋田県の南北性ー原始・古代」『出羽路』第80号 秋田県文化財保護協会
1984. 10. 富樫泰時「秋田県における北陸系の土器について」『本荘市史研究』第4号 本荘市史編  
さん室
1984. 11. 水野正好「ストーンサークルの意義」『季刊考古学』第9号 雄山閣出版株式会社
1984. 12. 永瀬福男「秋田県における円筒土器文化」『考古風土記』第9号 鈴木克彦編集
1985. 3. 秋元信夫「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査について」『上津野』第10号 鹿角市文化財  
保護協会
1985. 7. 富樫泰時「大湯環状列石研究史と今後の課題(1)」『よねしろ考古』第1号 よねしろ  
考古学研究会
1985. 7. 本間宏「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号  
よねしろ考古学研究会
1985. 7. 斎藤長八「大湯環状列石昭和六年発見説を駁すー「浅井小魚翁の遺跡巡礼日誌」の解説か  
ら大湯環状列石発見前後の実状を探るー」『よねしろ考古』第1号 よねしろ考古学研究会
1985. 7. 秋元信夫「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」『よねしろ考古』第1号 よねしろ考  
古学研究会
1985. 8. 児玉正『故郷の考古をたずねてー秋田の縄文・弥生ー』 株式会社秀英社
1985. 10. 富樫泰時『日本の古代遺跡』24 株式会社保育社
1985. 11. 齊藤忠「配石遺構ー特に環状列石についてー」『考古学ジャーナル』No.254 ニュー・サ  
イエンス社

1985. 11. 江坂輝彌「配石遺構とは」『考古学ジャーナル』No.254 ニュー・サイエンス社
1985. 11. 野村崇「東北北部と北海道の配石遺構—近年の発掘調査を中心として—」『考古学ジャーナル』No.254 ニュー・サイエンス社
1986. 3. 富樫泰時「古代における東北日本と北陸の文化交流」『富山市考古資料館報』第13号  
富山市考古資料館
1986. 4. 高橋忠彦「中山遺跡にみる亀ヶ岡式土器」『考古学ジャーナル』No.261 ニュー・サイエンス社
1986. 8. 阿部義平「“日時計”の考察—大湯環状列石の配石類型の意味—」『よねしろ考古』第2号  
よねしろ考古学研究会
1986. 8. 斎藤長八「大湯環状列石 昭和7年発見説の証拠」『よねしろ考古』第2号 よねしろ考古学研究会
1986. 8. 藤井安正「配石遺構研究略史と名称の概念」『よねしろ考古』第2号 よねしろ考古学研究会
1986. 8. 秋元信夫「秋田県の配石遺構」『よねしろ考古』第2号 よねしろ考古学研究会
1986. 8. 佐藤樹・藤井富久子「大湯環状列石周辺出土資料」『よねしろ考古』第2号 よねしろ考古学研究会
1987. 5. 庄内昭男「秋田県東成瀬村上掬遺跡出土の大型磨製石斧」『考古学雑誌』第73巻第1号  
日本考古学会
1987. 7. 富樫泰時「縄文時代の生活と文化」『図説秋田県の歴史』図説日本の歴史5 河出書房新社
1987. 8. 村越潔「北東北の葬制」『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古学研究会
1987. 8. 富樫泰時「大湯環状列石研究史と今後の課題（2）」『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古学研究会
1987. 8. 本間宏「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古学研究会
1988. 3. 小林克「内村遺跡出土土器と住居群の変遷」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号  
秋田県埋蔵文化財センター
1988. 10. 本間宏「縄文時代後期初頭土器群の研究（2）—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
1988. 12. 武藤康弘「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究—表館式、早稲田第6類土器をめぐって—」『考古学雑誌』第74巻第2号 日本考古学会
1989. 8. 高橋忠彦「秋田県の縄文時代後期の土器」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号  
秋田県埋蔵文化財センター
1990. 1. 秋元信夫「八幡平黒沢出土の縄文時代後期の土器」『よねしろ考古』第5号 よねしろ考古学研究会
1990. 1. 高橋忠彦「東北地方縄文～弥生時代の漆—秋田県中山遺跡の資料から—」『考古学ジャーナル』No.314 ニュー・サイエンス社
1990. 3. 庄内昭男・石川恵美子「秋田市新屋浜貝塚採集資料—鏝野目久米蔵コレクションより—」

- 『秋田県立博物館研究報告』第15号 秋田県立博物館
1990. 3. 石川恵美子「岩井堂洞窟における早期貝殻沈線文土器の系統と変遷」『秋田県立博物館研究報告』第15号 秋田県立博物館
1990. 3. 谷地薫「七曲台における縄文時代の居住形態についてー居住形態の変遷に関する一試論ー」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 秋田県埋蔵文化財センター
1990. 3. 大野憲司「狐岱遺跡についてー1989年の範囲確認調査からー」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号 秋田県埋蔵文化財センター
1990. 3. 石郷岡誠一・安田忠市「高清水丘陵の縄文、弥生時代の土器」『秋田考古学』第40号 秋田考古学協会
1990. 12. 藤井安正「大湯環状列石周辺遺跡の配石遺構群について」『よねしろ考古』第6号 よねしろ考古学研究会
1990. 12. 秋元信夫「環状列石と建物跡ー大湯環状列石近傍に分布する建物跡の分析ー」『よねしろ考古』第6号 よねしろ考古学研究会
1990. 12. 成田典彦「大湯環状列石周辺遺跡の古環境」『よねしろ考古』第6号 よねしろ考古学研究会
1990. 12. 佐藤樹・古川孝政「鹿角市八幡平出土の鋒形石器」『よねしろ考古』第6号 よねしろ考古学研究会
1991. 2. 鎌田幸男「魚形文刻石と魚供養塚・魚祭碑の考察」『秋田地方史の展開』 みしま書房
1991. 3. 大野憲司「大館市上ノ山I遺跡出土の鋒形石器について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 秋田県埋蔵文化財センター
1991. 3. 高橋学「湯沢市山田出土の縄文土器」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第6号 秋田県埋蔵文化財センター
1991. 4. 伊藤攻「神岡町小沢遺跡の発掘から」『北方風土』第22号 北方風土社  
安田忠市「秋田市御所野丘陵部遺跡群についてー縄文時代前・中期の住居跡ー」『よねしろ考古』第7号 よねしろ考古学研究会
1991. 10. 秋元信夫「米代川流域の縄文時代中期の集落ー住居形態の変遷についてー」『よねしろ考古』第7号 よねしろ考古学研究会
1991. 10. 林謙作「大湯環状列石の配石墓(1)」『よねしろ考古』第7号 よねしろ考古学研究会
1992. 3. 富樫泰時・武藤祐浩「秋田県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37号 国立歴史民俗博物館
1992. 3. 松田隆嗣「中山遺跡出土の弓の用材について」『秋田県立博物館研究報告』第17号 秋田県立博物館
1992. 3. 尾関清子「中山遺跡の編布試作」『秋田県立博物館研究報告』第17号 秋田県立博物館
1992. 3. 小林克・高橋学「峰浜村手前谷地尻遺跡出土の遺物について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 藁科哲男「寒川II、小出I、II、IV、上猪岡、八木遺跡出土の黒曜石遺物の石材産地分析」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター

1992. 3. 水野正好「ストーンサークルの謎」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 9. 秋元信夫「大湯環状列石—精神性を秘めた墓域—」『歴史読本』第37巻 第17号 9月号 株式会社新人物往来社
1992. 11. 富樫泰時「『化石を利用した、縄文時代の装身具』から」『秋田市史研究』創刊号 秋田市史編さん室
1992. 12. 中村大「米代川流域における亀ヶ岡土器様式—大洞B式における文様変遷の再検討とその地域性について—」『年報・能代市史研究』第2号 能代市史編集委員会
1993. 3. 谷地薫「家ノ後遺跡の晩期初頭土器—入組帯状文と入組三叉文—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 秋田県埋蔵文化財センター
1993. 3. 高橋忠彦「大型遮光器土偶と環状注口土器—鷹巣町高森岱遺跡発見の遺物から—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第8号 秋田県埋蔵文化財センター
1993. 3. 大野憲司「秋田県内の縄文時代晩期の墓域」『平成4年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文化財センター
1993. 4. 富樫泰時「大型住居と環濠」『考古学の世界』第1巻 株式会社ぎょうせい
1993. 5. 榮一郎「縄文後期～晩期の大墓域—秋田県虫内I遺跡」『季刊考古学』第43号 雄山閣出版株式会社
1993. 6. 富樫泰時「(円筒土器文化) 総論」『考古学ジャーナル』No.362 ニュー・サイエンス社
1993. 6. 谷地薫「米代川流域における前期縄文土器の器形について」『考古学ジャーナル』No.362 ニュー・サイエンス社
1993. 7. 富樫泰時「華ひらく縄文土器文化—縄文中期・後期の土器—」『白い国の詩』通巻443号 東北電力株式会社
1993. 8. 富樫泰時「縄文集落の変遷=東北」『季刊考古学』第44号 雄山閣出版株式会社
1993. 8. 高橋学「森吉町長野岱I遺跡採集の岩偶」『秋田考古学』第42・43合併号 秋田考古学協会
1993. 8. 安田忠市「秋田市「坂ノ上B遺跡」採集の遺物について」『秋田市史研究』第2号 秋田市史編さん室
1993. 11. 高橋忠彦「米代川流域の三脚石器」『よねしろ考古』第8号 よねしろ考古学研究
1993. 11. 小畑巖「高屋館跡の環状列石」『よねしろ考古』第8号 よねしろ考古学研究会
1993. 11. 和泉昭一「烏野遺跡について」『よねしろ考古』第8号 よねしろ考古学研究会
1993. 11. 林謙作「大湯環状列石の配石墓(2)」『よねしろ考古』第8号 よねしろ考古学研究会
1993. 11. 高橋学「秋田県森吉町白坂遺跡の調査—縄文時代晩期前葉の区画施設を有する集落遺跡—」『考古学ジャーナル』No.367 ニュー・サイエンス社
1993. 11. 中村大「秋田県柏子所貝塚からみた亀ヶ岡文化—装身具に見る階層化社会—」『考古学ジャーナル』No.368 ニュー・サイエンス社
1994. 3. 石川隆司・及川良彦・谷地薫・柴田陽一郎「家ノ後遺跡の粘土採掘坑—粘土と出土土器の分析を中心に—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 秋田県埋蔵文化財センター

1994. 3. 高橋学「森吉町白坂遺跡で発見した縄文人の足跡—切り取りから保存処理まで—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 秋田県埋蔵文化財センター
1994. 3. 富樫泰時「縄文土器にみる南と北—北の円筒土器様式と南の大木土器様式—」『北日本の考古学』日本考古学協会
1994. 9. 谷地薫「御所野台地遺跡群の縄文中期後葉土器ノート（1）」『秋田考古学』第44号 秋田考古学協会
1994. 9. 磯村亨「男鹿半島出土青竜刀形石器新資料紹介」『秋田考古学』第44号 秋田考古学協会
1994. 11. 利部修「岩瀬遺跡と草創期の遺構・遺物」『考古学ジャーナル』No.382 ニュー・サイエンス社
1994. 11. 相原康二「縄文時代の集落—ムラのシンボル—堅穴住居」『白い国の詩』通巻459号 東北電力株式会社
1995. 2. 富樫泰時「縄文人の天体観測予察—大湯環状列石を中心として—」『東アジアの古代文化』通巻第82号
1995. 3. 小林克「秋田県における縄文時代晩期～弥生時代の墓制」『平成6年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文化財センター
1995. 3. 阿部義平「配石」『縄文文化の研究』9 雄山閣出版株式会社
1995. 3. 富樫泰時「青竜刀形石器」『縄文文化の研究』9 雄山閣出版株式会社
1995. 6. 金澤長一郎「三内丸山遺跡と米代川流域」『北羽歴史論集』2 北羽歴史研究会
1995. 12. 富樫泰時「秋田県大湯遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学別冊6 雄山閣出版株式会社
1996. 3. 栗澤光男「秋田県のヒスイ」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第11号 秋田県埋蔵文化財センター
1996. 3. 小林喜平「黒曜石を訪ねて」『年報・能代市史研究』第4号 能代市史編集委員会
1996. 3. 富樫泰時・池田正治「西目町埋蔵文化財（出土物）一覧」『西目町史研究』創刊号 西目町教育委員会町史編纂室
1996. 10. 石郷岡誠一「秋田市内の縄文時代晩期から弥生時代の土壌墓について」『秋田市史研究』第5号 秋田市史編さん室
1996. 11. 長山幹丸・協和町教育委員会「協和・木形台Ⅱ遺跡」『北方風土』第33号 北方風土社
1997. 3. 春成秀爾「縄文から弥生へ—習俗からみた—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 秋田県埋蔵文化財センター
1997. 3. 小林達雄「何を語る伊勢堂岱遺跡「縄文時代の記念物」」『鷹巣地方史研究』第40号 鷹巣地方史研究会
1997. 3. 富樫泰時「縄文式土器」『西目町史研究』第2号 西目町教育委員会町史編纂室
1997. 3. 五十嵐一治「秋田県内出土の植物遺体集成（1）」『人間・遺跡・遺物3』発掘者談話会
1997. 4. 尾関清子「縄文時代の編みと織りの復元—私の試作実験の記録から—」『よみがえる縄文ファッション—衣服・髪形・装身具—』 秋田県立博物館
1997. 5. 富樫泰時「配石の遺構」『季刊考古学』第59号 雄山閣出版株式会社

1997. 6. 小林克「大規模集落と生活の安定」『ここまでわかった日本の先史時代』株式会社角川書店
1997. 6. 小林克「縄文のムラ、墓と祈り」『ここまでわかった日本の先史時代』株式会社角川書店
1997. 10. 小林克「東北地方北部縄文時代の墓制」『月刊考古学ジャーナル』No.422 ニュー・サイエンス社
1998. 1. 鷹巣町縄文シンポジウム実行委員会『伊勢堂岱遺跡から縄文の世界を考える』鷹巣町縄文シンポジウム記録第1集 鷹巣町教育委員会
1998. 2. 利部修「秋田県岩瀬遺跡における草創期の石器群」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論集—』 渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
1998. 3. 磯村亨「結髪形土偶—男鹿市上鮪川Ⅰ遺跡で発見された遺物から—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第13号 秋田県埋蔵文化財センター
1998. 3. 富樫泰時「西目町の縄文時代の遺跡と遺物（1）」『西目町史研究』第3号 西目町教育委員会町史編纂室
1998. 3. 藤井安正「北東北の環状列石について（大湯環状列石遺構のこだわり）」『上津野』No.23
1998. 3. 柳沢兌衛「大湯環状列石と太陽運行—縄文人と太陽信仰—」『上津野』No.23
1998. 6. 松田真一・竹下美智子・小西京子「第1章 雄勝町の先史時代」『みちのく縄文地名発掘雄勝—秋田県雄勝町文化調査報告書—』 日本地名学研究所
1998. 8. 小林克「縄文社会における「祭祀」の一構造—前期円筒土器文化の事例—」『季刊考古学』第64号 雄山閣出版株式会社
1998. 12. 富樫泰時「真崎勇助の御所野遺跡の記録」『秋田市史研究』第7号 秋田市史編さん室
1999. 3. 庄内昭男「東成瀬村上掬遺跡における大型磨製石斧の発見状況」『秋田県立博物館研究報告』第24号 秋田県立博物館
1999. 3. 小林達雄「縄文ランドスケープ」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第14号 秋田県埋蔵文化財センター
1999. 3. 岡村道雄「本当に縄文時代観は変わったのか？」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第14号 秋田県埋蔵文化財センター
1999. 3. 小笠原正明・櫻田隆・能登谷宣康「二ツ井町富根字駒形不動沢地内のアスファルト滲出地について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第14号 秋田県埋蔵文化財センター
1999. 3. 富樫泰時「西目町の縄文時代の遺跡と遺物（2）」『西目町史研究』第4号 西目町教育委員会町史編纂室
1999. 11. 宗左近「なぜ虹は立つのか～本荘の縄文～」『鶴舞』第78号 本荘市文化財保護協会
1999. 12. 秋元信夫「遺跡研究 環状列石」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究
2000. 1. 利部修「秋田県岩瀬遺跡における早期の石器群」『関俊彦先生還暦記念論集』 立正大学考古学会
2000. 2. 富樫泰時「伊勢堂岱遺跡から縄文人の生活を探る」『縄文人のくらしとところを探る』
2000. 3. 富樫泰時「米代川流域の遺跡（縄文）が語るもの」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第15号 秋田県埋蔵文化財センター
2000. 3. 宇田川浩一「鷹巣町採集の大型遮光器土偶と大洞式土器」『秋田県埋蔵文化財センター研

- 究紀要』第15号 秋田県埋蔵文化財センター
2000. 3. 鈴木克彦「岩手、秋田県北部の後期初葉土器の編年—湯舟沢A式の設定と提唱—」『岩手考古学』第12号 岩手考古学会
2000. 3. 秋元信夫「大湯環状列石における遺跡の変遷」『青森県考古学』第12号 青森県考古学会
2000. 3. 奥山一絵「伊勢堂岱遺跡における土地利用」『青森県考古学』第12号 青森県考古学会
2000. 3. 五十嵐一治「環状列石構築直前の土壌墓と祭祀関連遺物—伊勢堂岱遺跡の事例から—」『青森県考古学』第12号 青森県考古学会
2000. 6. 富樫泰時「興野義一氏採集の宮崎・沼田遺跡の遺物について」『西目町史研究』第5号 西目町教育委員会町史編纂室
2000. 7. 庄内昭男「武藤一郎氏の考古学研究と収集資料について」『秋田市史研究』第9号 秋田市史編さん室
2001. 3. 吉川耕太郎「協和町岸館採集の槍先形尖頭器」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
2001. 3. 目黒明彦・児玉準「大畑台遺跡出土の人面裝飾付深鉢形土器」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
2001. 3. 村上義直「八郎潟町沢田遺跡採集の縄文土器について」『秋田考古学』第47号 秋田考古学協会
2001. 7. 鷹巣町縄文まつり実行委員会ほか『伊勢堂岱遺跡を魅力ある遺跡に』鷹巣町縄文シンポジウム記録第5集 鷹巣町教育委員会
2001. 12. 小林克・小島朋夏「非環状集落」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
2001. 12. 小林克・小島朋夏「秋田県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
2002. 3. 五十嵐一治「百聞不如一見—伊勢堂岱遺跡の遺構（1）—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第16号 秋田県埋蔵文化財センター
2002. 8. 庄内昭男「鏝野目久米蔵氏の考古学研究と収集資料について」『秋田市史研究』第11号 秋田市史編さん室
2003. 3. 富樫泰時「掘立柱建物考（縄文時代）—秋田県の例を中心に—」『秋田県立博物館研究報告』第28号 秋田県立博物館
2003. 3. 渡辺誠「縄文時代の食文化—植物食を中心として—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号 秋田県埋蔵文化財センター
2003. 3. 吉川耕太郎「個体別資料分析の再検討—琴丘町小林遺跡における縄文時代中期後半の石器群—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号 秋田県埋蔵文化財センター
2003. 3. 五十嵐一治「百聞不如一見—伊勢堂岱遺跡の遺構（2）—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号 秋田県埋蔵文化財センター
2003. 6. 藤井安正「特別史跡大湯環状列石の保存と活用」『日本歴史』第661号 吉川弘文館
2004. 3. 戸村正己「縄文土器づくり—生涯学習における土器製作体験の在り方—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号 秋田県埋蔵文化財センター
2004. 3. 海道澄子「秋田県における大形住居の集成」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号

秋田県埋蔵文化財センター

2004. 3. 河田弘幸「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（1）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号 秋田県埋蔵文化財センター
2004. 3. 五十嵐一治「百聞不如一見一伊勢堂岱遺跡の遺物一」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第18号 秋田県埋蔵文化財センター
2004. 3. 小島朋夏・五十嵐一治「秋田県2002年度土偶情報」『第1回 土偶研究会発表資料』土偶研究会
2004. 6. 原田千紘・阿部朝衛「男鹿市脇本第一小学校裏採集の石器」『秋田考古学』第48号 秋田考古学協会
2004. 7. 高橋忠彦「縄文時代の漆文化一戸平川遺跡出土品を中心に一」『秋田市史研究』第13号 秋田市史編さん室
2005. 3. 小林謙一・坂本稔・尾寄大真・新免歳靖・松崎浩之・小林克「秋田県内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第19号 秋田県埋蔵文化財センター
2005. 3. 河田弘幸「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について（2）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第19号 秋田県埋蔵文化財センター
2005. 3. 富樫泰時「第一章 秋田のあけぼの」『図説秋田市の歴史』秋田市
2005. 3. 小島朋夏「秋田県2003年度土偶情報」『第2回 土偶研究会発表資料』土偶研究会
2005. 5. 小林克「縄文時代 東北」『考古学ジャーナル』No.530 ニュー・サイエンス社
2005. 5. 小林克「縄文時代の特異な繊維製品一漆糸・糸玉・漆塗り繊維製品一」『季刊考古学』第91号 雄山閣株式会社
2005. 7. 秋元信夫『石にこめた縄文人の祈り・大湯環状列石』株式会社新泉社
2005. 10. 新海和広「秋田県における複式炉の様相」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
2005. 10. 古屋敷則雄「環状列石の設計図を求めて」『北奥の考古学』葛西勳先生還暦記念論文集刊行会
2005. 10. 榎本剛治「秋田県における湯舟沢A式土器の検討」『北奥の考古学』葛西勳先生還暦記念論文集刊行会
2005. 10. 小林克「東北地方北部中期末～後期の墓制を巡って一大型不整形土坑の系譜とその意味」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅢ予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所
2006. 3. 宇田川浩一・小林克「向様田A遺跡出土の石製品」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号 秋田県埋蔵文化財センター
2006. 3. 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ「秋田県内遺跡出土試料の<sup>14</sup>C年代測定（その2）」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号 秋田県埋蔵文化財センター
2006. 3. 小林謙一・小林克「秋田県内出土試料の<sup>14</sup>C年代測定結果について」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第20号 秋田県埋蔵文化財センター
2006. 3. 山田祐子「秋田県2004年度土偶情報」『第3回 土偶研究会発表資料』土偶研究会
2006. 3. 北秋田市教育委員会『北東北・北海道の環状列石～4000年前の原風景を求めて～』北秋

田市教育委員会

2006. 7. 新海和広「秋田県における早期中葉貝殻沈線文系土器群の様相」『第4回 縄文時代早期中葉土器群の再検討—資料集—』 海峡土器編年研究会
2007. 3. 沓澤則雄・河田弘幸・柴田陽一郎「漆塗り糸玉の復元」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第21号 秋田県埋蔵文化財センター
2007. 3. 新海和広「秋田県内の縄文時代前期初頭～前葉期土器群の様相再検討—烏野上岱遺跡Ⅱ群土器の再分類—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第21号 秋田県埋蔵文化財センター
2007. 5. 中村大「亀ヶ岡文化の葬制」『縄文時代の考古学』9 同成社株式会社
2007. 7. 榎本剛治「秋田県における集成と諸問題」『第5回 縄文時代後期末葉～晩期初頭土器の課題—資料集—』 海峡土器編年研究会
2007. 9. 小林克「環状列石（東北・北海道地方）」『縄文時代の考古学』11 株式会社同成社
2007. 11. 武藤祐浩「秋田県の諸遺跡」『季刊考古学』第101号 雄山閣株式会社

---

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第22号

発行年月 平成20年3月

発行機関 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187) 69-3331

FAX (0187) 69-3330

URL [http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun\\_hp/index2.htm](http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun_hp/index2.htm)

E-mail [maibun@pref.akita.lg.jp](mailto:maibun@pref.akita.lg.jp)

印刷 西仙印刷株式会社

---

